# 盾の勇者の成り上がり　14

アネコユサギ



目次

「現状を確認しておく。まずは……」
戦勝会の翌朝、クテンロウの港町の屋敷で俺はみんなを集めてこれからの方針を決めようとしていた。
屋敷内は前日の戦勝会……飲めや歌えやの騒ぎの影響か、結構ゴミなどが散乱している。
和風な国の所せ為いか、日本でいうところの花見が終わった後の汚れた会場に似ているな。
「うう……」
俺の仲間達以外はテンションが低い。
「なんだお前等？　ラフタリアを旗頭にして革命をするんじゃなかったのか？」
昨夜のテンションがウソみたいに、みんな黄土色の顔で呻うめいている。
「み、水……」
「サディナ姉さんがみんなと一緒に飲み比べをするからですよ」
「あら？」
「う、噂は……本当だった。先代の殺さつ戮りくの巫み女こ相手に飲み比べをしたら潰つぶされるって……」
掠かすれた声で、昨夜、サディナと飲み比べをしていた連中が告げた。

今にも死にそうだな。
吐きに行ったのが既に四名……戻ってこない。
どいつもこいつも二日酔いでダウンか……大丈夫か？
うーん、現地加入した連中よりも連れてきた仲間だけで先に方針を決めておいた方がよさそうだ。
クテンロウは現在、政治が腐敗していて国民にかなりの負担が掛かっている。
ラフタリアの命を狙った連中は、そんな国の膿うみと呼べるような連中の息が掛かった者達だったらしい。
で、俺達がクテンロウに乗り込んだ結果、革命運動に賛同する者達が挙こぞって声を上げたわけだ。
長年の鬱うっ屈くつした想いがあったのか、俺達が港を占拠した瞬間、町がお祭り騒ぎになったもんな。
今も騒ぎは継続していて、屋敷の外からはドンチャンと楽しそうな音が響いてくる。
「あの女は酒の神に愛されていた。今もどこかで酒を飲んでいると……」
「まさか酒の神すら逃げる悪酒のもとをそのまま食う化け物のところにいたとは……納得するしかない」
なんで俺に視線が集まってくるわけ？　ルコルの実を食うことがそんなに気色

悪いか。

「どうしてこうも化け物呼ばわりされるのか……理解に苦しむな」

俺の名前は岩いわ谷たに尚なお文ふみ。元々は日本人で、現在は異世界で盾の勇者をしている。

異世界に召喚されて盾の勇者という役割を押し付けられたというのが正しいか？

この前の出来事から、この盾の勇者って国によって随分と扱いに差が出るんだなと、まざまざと実感している最中だ。

その経緯を説明する前に、俺を召喚した世界に関して説明しておくべきか。

この世界はゲームみたいにLvがあって、魔物とかを倒すと経験値が入ってLvが上がる。

ステータスとかそういった要素、現代日本のゲーマーならばわかりやすい世界構造が根本にある。

意識することによって詳しい能力値とかも確認できるから、召喚されてゲームの世界に迷い込んだと認識しても、あながち間違いではないだろう。

まあ、そのわかりやすさの所為で勘違いもしかねないわけだけどさ。

俺がこの世界に召喚された理由は、波と呼ばれる世界を崩壊させる災害を鎮め、この世界を守ってくれというものだった。

選ばれた勇者、異世界召喚などの創作物に慣れ親しんだ俺からすれば夢いっぱいの状況だったのだが、俺を召喚したメルロマルクという国は盾の勇者を宗教上の理由から悪魔として認識していた。

その所為でいろんな陰謀に巻き込まれ、結果、自分で言うのもどうかとは思うけど、俺自身歪ゆがみ切ってしまっていた。

逆にもしも盾の勇者を信仰しているシルトヴェルトに上う手まく召喚されていた場合を考える。

シルトヴェルトという国は亜人、獣人と呼ばれる人種が住む国だ。

そのシルトヴェルトに召喚された場合……俺は神扱いされて大事にされるだろうが、その反面神の子供を欲しがる国中の貴族とかが女共を連れてきて、俺のためのハーレムを作ろうとしたのは記憶に新しい。

陰謀で冤罪を被こうむって無一文で放り出されるのと、種馬として搾られる生活だったらどっちがいい？

ぶっちゃけどっちも嫌だな……今の俺はそういった話は大嫌いだし。

ともかく、いろんな陰謀や厄介事をはねのけて、俺はここにいる。

「まったく、嘆かわしいことですわね」

「ふん……」

と、アトラとフォウルが二日酔いでダウンしている連中を見ながら呆あきれる

ように言った。
この二人は俺が購入した奴隷で、ハクコ種というシルトヴェルトで上位に位置する種族だ。
アトラはパッと見は幼い女の子。ただ、内面はかなりの武闘派だ。
この前もシルトヴェルトで血の気が多い連中を相手に力で説得していた。
その時のことで言いたいことが沢山あるが、結果が良かったので今のところは黙っている。
シルトヴェルトの重鎮曰いわく、シルトヴェルトの国民の鑑かがみのような精神をしているらしい。
俺に対して行きすぎた忠誠を誓っているアトラがねーとも思うがな。
フォウルはそのアトラのオマケ……違うか。
病弱だったアトラを必死に看病する立派な兄だったんだけど、病気が治って元気になりすぎたアトラに振り回されている。
最初はアトラよりも使えそうだと思ってフォウルを購入したんだが、抱き合わせで買ったアトラの方が強くなってしまったって感じだ。
まあ、今ではその差も縮んできているみたいだ。
白い虎男に獣人化もできるようになったし、背も大分伸びてきている。
条件が不明だけど、更なる獣化もできるらしい。要検証だな。

クテンロウへ来るためにシルトヴェルトを経由する必要があって、二人はその時に活躍した。

一応、この二人はシルトヴェルトで大いに評価されているらしい。

俺が役目を終えて日本に帰ってもシルトヴェルトの重鎮として迎え入れられそうだ。

「未成年のお前等に酒を勧めたらさすがに注意するぞ」

「尚文様が勧めるのでしたらどんな毒物でも飲み干してみせますわ」

「なに⁉　そんなことをアトラにさせる気か！」

「させねえよ……少し考えろ」

終始こんな調子の二人だ。

「そういや樹いつき達はどこへ行ったんだ？」

川かわ澄すみ樹。俺とは異なる日本から召喚された弓の勇者だ。

やっぱ俺と同じく色々とあって……ヴィッチって女の被害者仲間だ。

ヴィッチの所為で精神に問題を抱えている。

治療が必要な状態だが、戦闘面は問題ないのでそのまま使っている。

「リーシアさんと一緒にクテンロウの資料を閲覧しに行きました。すぐに来ると思いますよ」

ふむ、ならこの場にいなくても問題はないか。

リーシアは真面目だし、酒に飲まれたりはしていないだろう。
今でこそ樹の世話をしているリーシアだが、過去に樹に手て酷ひどく捨てられた経緯がある。
その後、戦闘の才能を開花させ、闇に堕おちた樹に勝って立ち直るよう説得した。
こう……主人公みたいな経歴を持つ奴だ。
最近はかなり地味だけど、本来は戦闘ではなく知略向けだな。
俺としては、性格的にも能力的にも結構信頼している。
「どっちにしても二日酔いの連中はさっさと治してこい。時間は有限なんだぞ？」
何が悲しくてこんな状況に陥っていると思ってんだ。
そう、事の発端はラフタリアとの因縁だ。
ラフタリアは俺と共に戦うことを誓ってくれた、右腕のような存在だ。
出会いは奴隷と主あるじって間柄だったけどさ。
今では俺は親代わりとして接している。
今回の騒動は、俺が領主をしている村でラフタリアに巫女服を着せたことが始まりだ。
絆きずな達の方の世界で着ていたのが似合っていたからまた着せてみたんだ。
それが何の因果かラフタリアの両親の故郷であるクテンロウでは特別な意味の

ある衣装だった。
　しかもクテンロウの奴等はずっとラフタリアを陰から監視していたのに、ラフタリアが不幸のどん底にいる時に助けもせずに傍観していた、なんて事実が明らかになった。挙句、ラフタリアの命を狙って常時刺客を送り続けるとかふざけたことを言い出した。
　こんなことをされて黙っていられるほど、俺は心の広い人間じゃない。
　何より、俺にとってラフタリアの優先順位はかなり高い。
　なんせ、本当に苦しい時に俺の味方になってくれたのはラフタリアだけだからな。
　だから、クテンロウの連中……ラフタリアの暗殺を命じた連中には痛い目にあってもらう。
　そんな感じで直接この国に乗り込んできたわけだ。
　海に囲まれたクテンロウは国を守る結界の所為で入国がしづらく、シルトヴェルトの交易船で入国しようとした。その際、刺客が海から襲ってきて、追い返したのだが、その矢先にクテンロウの海域を守っている水竜によって俺とラフタリア、サディナにガエリオンが海に引きずり込まれた。その後、水竜の手助けもあって俺達が先にクテンロウに辿り着いた。
　上陸した俺達は天命という王のような存在に反抗的な勢力の代表……港町の長

であるラルヴァと話をつけ、港町を我がもの顔で占拠していた役人共を倒した。
その途中で武器屋の親父の師匠と知り合ったこととかは……まあおいておこう。
まだふざけた連中を始末するために行動している最中だし、色々とやることは多い。
当面の課題としてラフタリアと同族の天命という名の王の存在がある。
コイツを蹴けり落としてラフタリアが王であると証明しない限り、刺客がいなくならないらしい。
なので、占拠した港町を拠点として進軍を始める予定だ。
幸いなことに現在のクテンロウの天命が、魔物を仕留めた者を罰するという生類憐あわれみの令みたいなふざけた法律を施行している影響で国民の信頼を失い、国が傾いている。
付け入るなら今が絶好の好機だろう。
国民の不満が爆発しているのは、今も行われている戦勝を祝う祭りの盛り上がり方を見ると一目瞭然だ。
「キュアアアア」
「なんかまだお祭り終わってないみたい。フィーロ遊びに行こうかなー」
「キュアキュア、キュアアア」
「むー！　ごしゅじんさまに可愛がってもらってるのはフィーロだもん」

で、庭の方で睨にらみ合いをしているのはフィーロとガエリオン。

フィーロは種族がフィロリアルという勇者が育てると特別な成長をする鳥型の魔物だ。

今は背中に羽の生えた金髪碧へき眼がんの少女の姿をしているが、これは本当の姿じゃない。

本当の姿は丸々と太って足腰を頑丈にしたダチョウ……とも少し違うが、そんな姿をしている。

元々は気まぐれに買った卵くじの景品だった。

最近は色々と運気が下降気味だったけど、少し前にフィトリアというフィロリアルの女王と再会して色々と加護を授かったらしい。随分と戦闘能力が上昇したみたいだな。

ガエリオンはフィロリアルと仲の悪い種族、ドラゴンだ。

普段は生まれたばかりの赤ん坊形態でいることが多いが、いざって時には大きなドラゴンに変身して戦う。二重人格……じゃないか、一つの体に二つの意識を内包している。

一つは今、表に出ているその体の本当の持ち主である子ガエリオン。もう一つは呼べば出てくる裏人格……俺が以前戦ったドラゴンゾンビの生前の人格である親ガエリオンで、この二つが肉体に同居している。

飼い主は俺なのだが、村の奴隷の一人であるウィンディアが育ての親として面倒を見ている。

今、ウィンディアはシルトヴェルトの方でフォーブレイから来た錬金術師のラトと一緒に生態調査の勉強に精を出している。その関係でガエリオンが俺と同行している感じだ。

フィーロとガエリオン……こいつ等はいざって時に何かと役に立つのだが、種族的に仲が悪く、いつも喧けん嘩かしている。

まあ、放置しておいても問題はないだろう。

「ともかく、早めにこれからの方針を決めておかねばチャンスを逃がしかねないだろ」

「そうですね」

「う……」

ブンブンと頭を振って酔いを醒ましたのか、クテンロウの港町の町長をしているラルヴァが会議に加わった。

「でだ。天命とやらはこのクテンロウのどこにいるんだ？　サクッと仕留めるなりなんなりして、さっさと全てを終わらせたいんだが」

クテンロウの地図を広げて俺は確認する。

メルロマルクやシルトヴェルトほど大きくはないが、こう……日本みたいに密

度の高い国なのがクテンロウらしい。
で、俺達が今いるのはクテンロウでも西に位置する港町だ。
「当代の天命様は現在、首都となっているこの都にいらっしゃいます」
そう告げて指差したのはクテンロウの東の方だ。
結構形状は異なるけど日本風で言うなら、今の俺達がいるのが鹿児島で、ラルヴァが指差したのは東京……じゃないな千葉辺りだ。
あくまで日本基準なだけで、かなり違うけどな。
そこでサディナが首を傾かしげる。
「あら？　お姉さんがいた頃と首都が違うのね」
サディナは元々クテンロウ出身で、ラフタリアの両親と一緒にメルロマルクに流れついた経緯がある。村でもみんなの頼れるお姉さん的ポジションで、ラフタリアの姉代わりをしている女だ。
酒に異様に強くて、よく人を泥酔させている。
性格はイケイケお姉さんって感じだな。正直鬱うっ陶とうしい。
強さは……底が知れない。シャチの獣人に変身できる和風美人だ。
「今代の天命に代わった際に代々の天命が住まう都から移転しました。なのでまず現在旧都と呼ばれる地を占拠するのがいいかと思います。立地も良く、今後の活動に大いに貢献できるでしょう」

「代々続く都を捨てるとは思い切ったわね」
サディナの言葉にラルヴァが同意するように頷うなずく。
「反対意見も多かったのですが、強引に政策として実行され、首都には現在も建設中の箇所があります」
生類憐みの令に始まり、なんつーか、何をしても裏目に出ているダメ領主だな。
これなら、メルロマルクの方がまだ上手く回っている。
「移転の本当の目的は側近の懐に入る金とかだったりしてな」
「えー……先々代が懇意にしている毒婦の言う、旧都は肌に合わないという意見が大きいですね」
「どんな理屈だ？　というかそいつが裏で操っているとかじゃないのか？」
「はい。マキナと呼ばれる毒婦が実質、全ての実権を握っております」
俺の言葉に、ラルヴァが頷く。
当たりなのかよ。
それだけ腐っていたら、民はラフタリアこそ真の天命って思うだろうよ。
旧都。汚職の所為で首都ではなくなった場所か。
「旧都を目指す理由は他にも、ラフタリア様が天命様としての儀式を行うことができるからです」
立地的な面はともかく、今の話には俺にはわからないところがあった。

「それじゃあナオフミちゃんは理解できないわよ。えっとね、相手が使ってきた祝福をラフタリアちゃんにも使えるようにするって話よ。つまり、上手くいけば逆にこっちでもその力を持てるって話」

「そういうことか」

天命として祝福を施すと桜天命石から発せられる結界の範囲内で四聖の力が弱体化し、味方がパワーアップする。加えて、アストラルエンチャントで仲間内のステータスを上乗せすることもできるのだが、その技能を俺達が使えるかもしれないってことだ。

「旧都には天命を任命する地があって、そこでラフタリアちゃんが儀式をすれば、使えるようになるんじゃないかしら？」

「じゃあ当面やるのは旧都への進軍ってことでいいのか……」

現在の天命は東にある新しい都に移動したらしいからな。というかそんな重要拠点を捨てるとか頭が悪すぎだろ。

どっちにしても悪い手じゃない。まだまだわからないところも多かったしな。

進み方をもう少し模索してみるか。

それこそガエリオンが授かった水竜の水晶玉辺りから情報を引き出してみるとしよう。

「じゃあ作戦だな。現状確認として現在の俺達の拠点はこの港町だけだ」

「役人を追い払った噂と、こちらの宣言によって近隣の集落や町が同意表明をするのは時間の問題かと思われます」

「わかった。だが、俺達は暇じゃない。なので一応、それ以外の方針も決める」

「はい。なんだかんだで村の復興をしないといけませんし……次の敵が控えていますからね」

「ああ、いつまでもこの国にいるつもりはないからな」

ということで、地図の隣に紙を広げて絵を描いて提案をする。

「案その一、ちまちまと国盗りをするなんて面倒臭いので、ササッと天命とやらのところに乗り込んで一気に決着を付ける」

サディナと話をした限りじゃ、国を滅ぼさない限り、ラフタリアに危害を加えようとするだろうって話だった。

とはいえ、正面を切って国盗りをするほど俺達に余裕なんてないと思う。

なので手早く親玉を仕留めて黙らせる作戦だ。

「問題は敵の戦力とこっちの武器の相性の悪さか」

というのも、この国独自の技術があり、四聖……盾の力を弱める技術の介在で俺達勇者とは極端に相性が悪い。

こっちの強化方法を無効化した挙句、相手はパワーアップするという厄介な技術があって、高いLvと能力によるごり押しが難しい。一応、強化方法の無効化を

緩和する武器があるのだけど、それでも相手のパワーアップの阻害まではできない。
そんな状態で敵陣に乗り込んでも返り討ちにあう危険性が大いにある。
「ナオフミちゃんらしいわね」
「あんまり現実的じゃないのが痛いところか」
無茶なことをして返り討ち、なんて展開は避けるべきだろう。
「武器屋の親父の師匠に武器を作らせるって手も考え中だ」
これまでクテンロウで強力な武器を作っていたのが武器屋の親父の師匠だ。
筋金入りの女好きで、元康やす二号って感じだがな。
色々とこの国独自の技術を知っているから攻略の切り口になる武器を作らせることができるかもしれない。
現在、武器屋の親父と一緒に鍛か冶じ場に籠こもっている最中だ。
言ってはなんだが、未確定な要素が多くてごり押しによる攻撃は難しいだろう。
「さすがですわ尚文様。尚文様こそ、神なのです。ラフタリアさんのご親戚など蹴り落として誰が神であるのかを誇示するべきですわ」
……まあ、シルトヴェルトがそれだったけどな。
アトラは無視する。今は相手をしている余裕がない。
「次は案その二、ラフタリアを旗頭にして賛同者を集めて実行する国盗りだな。
シルトヴェルトからの交易船をもっと呼び込んで物資や戦力調達をさせる。他に現

在の天命の方針に異を唱えている連中を抱え込めば、時間は掛かるかもしれないが最初の案よりは無難に勝てるだろうな」

「なかなかに難しい話だな……」

フォウルが腕を組んで考え込んでいる。

脳みそ筋肉タイプなのかと思ったが、そうでもなかったのか？

「国盗り、血が騒ぎますわ。それこそ尚文様の権力を知らしめるために、シルトヴェルトの戦力を続々と投入して侵略すべきですわ」

アトラの方は随分とやる気だな。

考えていることが蛮族のソレに近い気もするが、今に始まったことじゃない。

「早く終わらせたいですが、今の私達では潜入して勝てるか未確定な要素が多すぎるってことですね」

「ああ」

ラフタリアの言葉に同意する。

頭さえ潰せばどうにかなるとは思うんだが、如何いかんせん不確定要素が多すぎる。

「ラフー？」

そこに欠伸あくびをしながらトコトコとラフちゃんがやってきた。

ラフちゃんはラフタリアの毛髪をもとに作り出した式神……使い魔だ。

たぬきのようなアライグマのような姿をした魔物、なのかな？
　俺のお気に入りの生き物で、庭で睨み合いをしている二匹よりも優先して可愛がっている。
　いろんな技能を所有していて、いざって時に色々と役に立つ。
　昨日の戦いには参加してなかったけどさ。
「最初は乗り込んで倒すことを考えていましたけど、国の方々が困っているのですから堅実に攻めていくのがいいかもしれませんね」
　確かにラフタリアの言うのが無難だろう。
　後々のことを考えればこの国の連中を配下に加えて、波での戦力アップという手もあるしな。
「時間は掛かりそうだけどな」
　相手を倒しても心を折らなければ意味はない。
　こういう場合、仮に頭を潰しても国を支配したとは言えないからな。
　樹が昔やった革命の話が思い出される。
　過去に樹はメルロマルクの隣国の革命に参加したことがあるらしいのだ。
　確かその時は革命軍が王を打倒して国を占拠したはいいが、国民の飢えは変わらなかったとかで無意味に終わったんだよな。
　事の本質を見極めないといけない。

……腐敗した政治が原因だとしたら、頭を潰せばいいだけのようにも見えなくもない。
だが、腐った政治家共を仕留めたらそれで良くなるか？
「ま、入国二日目に決めるのは早計か」
「そう……ですね」
「とはいえ、早めに決めておかないといけない案件なのも事実だ。みんな頭の片隅に入れておくように」
「「「了解」」」
「ラルヴァは港町を俺達が占拠したことが国に伝わって、大々的に攻め込まれることを視野に入れて軍備を整えておけ。戦争をするにしても大将潰しをするにしても、その事実は変わらないぞ」
まあ、俺が言わなくてもこの辺りは察しているだろ。俺にも専門家より優れているという自覚はない。
「は！」
「後は……今日はラフタリアが巫女服でパレードをして、町の連中の士気を高めておくか」
現状では戦力も知名度も足りないからな。
ここで一発、もう一人の天命様を大々的にアピールしておこう。

ラフタリアは外見が良いので目立つし、国民を煽せん動どうするには丁度良い。
悪政を敷いている現在の天命とそれを討とうとする新たな天命。
今後のことを考えれば、この図を大きく宣伝することが重要だ。
「結局はそうなるんですか。そもそもどうしてみんな私の巫女服でやる気を見せるんです？」
「似合うからだ」
断言してやろう。
ラフタリア、お前はあまりにも巫女服が似合いすぎる。
袴はかま姿が似合うというだけではなく、不思議な魅力があるんだ。
もしかしたらこれが天命の証なのかもしれないな。
「ラフー」
ラフちゃんも同意している。
後でラフちゃん用の巫女服も作らせてみよう。
「そもそも、ナオフミ様が私に巫女服を着せなければこんな事態にならなかったんですよ」
「知らんな。ラフタリアの不幸を見ていただけの連中がいた。その事実があれば十分だ」
責任転嫁をする気はない。ただ、その事実を俺が許すことはない。

「はあ……」

「ラフタリアさん。尚文様の寵ちょう愛あいを受ける衣装が羨うらやましいですわ、妬ねたましいですわ」

ラフタリアがアトラを見てげんなりしている。

「譲れるなら譲りますよ」

「その余裕、調子に乗らないことですわ！　お兄様、ハクコには専用の衣装はありませんの？」

どんな争いだ？　しかも兄頼りかよ。

「あるぞ！　今度取り寄せてもらおうな！」

あ、フォウルの顔が綻ほころんでいる。頼られて嬉しいのか？

……確かにアトラがフォウルに頼っているのは珍しい気がする。

まだアトラが病弱だった頃以来なのかもしれない。

「絶対に尚文様を悩殺してみせますわ」

「がんばれよー」

面倒だ。今はラフタリアの巫女服姿を見て目の保養をしておこう。

「ぬ!?」

そこでガエリオンがフィーロとの喧嘩をやめて何やら外へ顔を向ける。

「んー？」

フィーロも同様の反応を示したぞ。
「ラ、ラフ？」
「どうした？」
俺がそんな三匹に尋ねたのと、ほぼ同時だっただろうか。
遠くで大きな爆発音のようなものが響き渡った。

## 一話　封じられしオロチ

「なんだ？　町の連中が派手などんちゃん騒ぎをしすぎたか？」
「それにしては変な音だったと思います」
「おかしな気の流れを感じますわ」
丁度良くフィーロがフィロリアル姿になっていたので背中に上って、音の方角を見ると……町はずれの山辺りで土煙が起こっているように見える。

確かあそこは、クテンロウに来た際に通りがかったな。
古墳があった場所だ。
「な、なんですか今の音は……」
「騒がしいですね」
調べ物から帰っていたリーシアと樹いつきが聞いてきた。
「まさか……そんな――」
ラルヴァが絶句するように古墳を凝視する。
「おーい、アンちゃーん」
武器屋の親父が師匠である元もと康やす二号と一緒に駆けつけてきた。
「いやー、国の連中も手段を選ばねえんだな。そんなにも自分の立場を守りたいかねー」
武器屋の親父の師匠は手で日陰を作るようにして、半ば呆あきれるように古墳の方を凝視していた。
「何かあるのか？」
「野郎に答える口はねえ！　偉いくせにハーレムを作らねえクソに教えて何になるんだ」
コイツ！　うっぜえええええ！
「師匠……いい加減にしてくれねえか？」

武器屋の親父が元康二号の頭を片手で握りしめる。
「いでででで！　エルハルト、やめぇえええぇ――」
ラフタリアには絶対に近寄らせん。
「ナオフミ様？　腹いせに私の頭を撫でるのをやめてください。ラフちゃんじゃないんですから！」
「ラフー」
舌打ちしてラフタリアを撫でてみせる嫌がらせをしていると、サディナが察して尋ねてくれる。
「あらー？　お姉さんになら教えてくれるの？」
「ええ、綺き麗れいなお嬢さん。教えてあげましょう」
……どこまで徹底してんだ元康二号は！
「あの遺跡には大昔にこの国に多大な被害を与えた化け物が封印されてんだ。もちろん、当時の天命様が封印したってお墨付きでな」
「そういや近くを通った時にサディナがそんな話をしてたな。倒したんじゃなかったのか？」
「お姉さんの記憶違いだったのかしら？　慰霊碑だと思っていたわ」
「場所が場所だからな、国の一部の者しか真実は知らねぇよ」
ふむ……霊亀みたいに実は世界を守るために存在する化け物とかだろうか？

「封印してこの地に留めた理由はクテンロウと外界を隔絶する結界を強固にするためなんだと。いわば国の守り神の一柱って認識なわけだ」

「本当に国の守り神なのか？」

「ま、政府の役人共はそう思っているみたいだがな」

熱心な教徒ってやつか。頂点はラフタリアの家系みたいだけど。

というか手段を選ばない連中だな。魔物の封印を解くとか。

「だが、そこは厄介な事情がかなーり混じってるわけよ」

「……何があるんだ？」

すると元康二号はボリボリと頭をかき、遺跡の方を指差して呟つぶやく。

「すこーし前のことなんだけどよ。今の天命……糞くそガキが魔物を溺愛して『守り神様の負担が少しでも楽になりますように』って桜天命石と祝福を各地の封印された化け物共に施して回って――」

「馬鹿じゃねえのか!?」

昨日戦った連中でさえ、手を焼くほどの強さなんだぞ？

それと同等の祝福を国に被害を与えた化け物に施してるってどういうことだよ！

下手に復活させたら手の施しようがない災厄になるのは目に見えてるだろ。

なるほど……水竜とやらが天命に敵対して、俺達がこの国に接近した時に力を

貸してくれた理由がわかる。
　そんなトチ狂った奴が国を統治している状態が良いはずがない。
　タイラントドラゴンレックスの時のような嫌な気配が充満しているぞ。
　国を支配されるくらいなら死なば諸共とでも言いたげなヤケ糞感がある。
　きっと俺達の脅威度を相当低く考えていたんだろうな。
　だが、実際は俺達が乗り込んできた挙句、追い込まれた。
　色々とバカバカしくなってくるぞ。
　まあ……俺も呪いの所せ為いで能力ダウンしているし、盾の力を弱める力を持った連中が相手じゃ満足に戦えない。
　どんだけ逆境が続くのかウンザリしてくるな。
「ふむ……」
　だが、使えるな。
　相手が封印された魔物を解き放ってきた事実を逆手に取れる。
　つまり俺達、どちらかと言えばラフタリアが新たな天命として封印を解かれた危険な魔物を討伐したら、人々の目にはどう映る？
　民を蔑ないがしろにしている現在の政府と民のために戦う革命軍の図式が更に大きくなる。
　いい具合に国が腐敗してくれていて、攻め込む材料に苦労しないな。

「キュアキュアキュア！」
俺は大きくなったガエリオンの背中に乗る。飛べるガエリオンの方が速そうだからな。
「とにかく、さっさと向かうぞ！　速さ優先、フィーロも負けずに追いかけてこい。ガエリオンより早く来れたら次はお前に乗ってやる」
「えええええ！　フィーロ、がんばるー！」
「あ、待ってください」
「行くわよ」
「ささ、お兄様も戦力になるかわかりませんが行きますわよ」
「おう！」
ラフタリアとサディナ、アトラとフォウルが続いた。
もちろん、ラフちゃんは俺が抱える。
「樹達もフィーロに乗って早く追いついてこいよ」
「はい」
「ふぇええええ……ですがここで引いていては正義じゃないです！」
「じゃ、こっちは逃げてるぜ。お嬢さん達、ピンチになったらそっちの野郎を盾に逃げることを勧めますよ」
元康二号……お前はいい加減、後で断罪してやるからな。

「行きましょう」
無気力な樹とリーシアがフィーロの背に乗る。
「えー！　弓の人乗せないといけないのー？」
「キュアア」
フィーロの唖あ然ぜんとした声を無視してガエリオンが勝利の声と共に飛び立つ。
「ガエリオンに負けてたまるかー！」
おー、フィーロもがんばるな。屋根伝いに走ってくる。
いい勝負……上う手まくいけばフィーロが勝つかもな。
「キュアアアアアア！」
ガエリオンも必死に羽ばたいてレースが始まった。
うん。この二匹は争わせた方が速いな。
「……何か出てくるな」
地割れと共に古墳から封印された化け物が姿を現した。
赤い目で周囲を見渡しながら獲物を探している。鋭い牙が口から生え、口から定期的に出し入れされる舌はまるで炎のようだ。
ピットと呼ばれる器官を持ち、そこで温度を感知して獲物の位置を特定している。

「ヒドラか……確かにコレは厄介な相手であるな」
親ガエリオンが分析する。そういう呼び名もあるが、こんな頭を八つも備えた竜は……むしろ八岐大蛇やまたのおろちと呼ぶべき魔物だろ。
そんな魔物が古墳から全身を出して俺達の方に視線を向けている。
背中辺りにはご丁寧にしめ縄と桜色に光る何かを背負っていた。
空中にいる俺達に対して八岐大蛇っぽい魔物……えっと、魔物名は『封じられしオロチ』が威嚇してくる。
「シャアアアアア……」
「見る限りじゃ桜天命石と祝福のしめ縄を同時に着用して、随分とパワーアップを図ってるみたいだな」
俺達の方に向けて威嚇すると同時に毒の息を吐いてくる。
「む……」
ガエリオンが羽ばたいて避ける。
四聖の力を阻害する桜天命石の結界が奴を中心に展開されていて、祝福まで掛かっている。
勇者の加護が弱体化されているフィールド内まで近づいて仕留めないといけないってことだろ？
かなり厳しい状況だ。

「悠長にしていると町に被害が出るでしょうね」
距離を取る俺達を見て攻撃を諦めたのか、オロチが町の方に進み始める。
優先順位は町よりも俺達ってところか、近寄れば気配を察知して襲ってくるようだが、次の狙いは町だということだろう。厄介極まりない。
「いや、ちょっとくらいは被害があった方が国に対する反感が強まるぞ」
「ナオフミ様！」
「わかっている。桜天命石の武器の力である程度戦えるしな。やるしかないか」
「あらー」
「難儀な問題であるな」
さて、じゃあ化け物相手に戦ってみるとするか。
「よし！　行くぞ！」
というところでオロチは町に侵入し、俺達と相対する……直前に何か壁に阻まれた。
「な、なんだ？」
「ナオフミちゃん、あれ」
サディナの指差す方角を見ると、桜光樹が強く光って壁のようなモノを生成している。
桜光樹はクテンロウ独自の桜に似た植物で、いろんなことができる便利なもの

らしい。
　もしかして、化け物クラスの魔物に対する防衛能力を宿しているってことなのか？
「うむ？　何やらドラゴンの力を感じる。水竜とやらが手助けしてくれているのかもしれんぞ」
「それは幸先いいな」
「だけど、時間の問題なんじゃないかしら？」
　壁のようなものの反発が徐々に弱まってきているのが見てとれる。
　今のうちに攻撃の準備を整えろってことか。
　着地してガエリオンから下りると、亜人化していたサディナが獣人化し始める。
「どっちにしても戦うのよね？」
「そうだな。何にしてもあの化け物を仕留めないと、国を支配するなんて夢のまた夢だ」
　対勇者用装備を着用した化け物に挑む……か。
　俺の戦いってなんか常に不利な状況で挑むことになるな。
「俺達が先頭で桜陣結界を展開する」
　パワーアップ効果のある新しいスキル、桜陣結界で味方を強化しつつ、援護魔法を唱えるべきだな。

問題は結果的に武器の強化方法が制限されているところか。
ちなみに検証の結果、桜天命石の結界……桜天結界が作動していないと桜陣結界は使用できないことがわかっている。
「流星盾！　エアストシールド！　樹はもう桜天命石の武器は登録しているよな？」
封じられしオロチの攻撃を受け止めつつ、俺は尋ねる。
「はい。既にしています」
呪いの所為で抑揚がないけど、指示には素直に応じる。
強化方法を選定して上手く使えば、この場で後れを取ることはないだろう。
むしろあれこれ騒がない分、こっちの方が便利かもしれない。
「その武器で戦えよ。他の武器じゃ間違いなく無効化される」
「わかりました」
というか樹は結界の範囲外から射撃とかをすれば……って矢自体が結界内に入ってしまうか。
「あの化け物にアストラルエンチャントが掛かっていたらシャレにならないが……」
化け物同士を連結させて強化してるとしたら、霊亀とかよりも強い化け物になってしまうじゃないか？

「さすがにそう安易にできる技術じゃないんじゃないかしらー？　それができたら町の防御機能が一瞬で破壊されてると思うわよ？」
「そうだな。というか、その手の技能を解除するのがラフタリアが覚えた技だよな」
「念のために初手で行きますか？」
「ああ、桜天結界とやらは解除できなくても祝福は無効化できるんだろうしな？　できるか？」
「……はい。できると思います」
ともかく、今は目の前の敵に意識を集中すべきか。
「フィーロもがんばるー」
「キュアアアア！」
「やってみせますわ」
「ああ」
フィーロやアトラ達がそれぞれやる気を見せているが……大丈夫か？
「待てお前等、近づいて力が抜ける感覚があるようだったら少し下がれ」
「えっとねー、武器屋のおじちゃん達がフィーロ達にってくれたよ？」
「そうだな」
それぞれの手と足に桜天命石で作られた武器を装備している。

話によるとその装備は勇者の加護の無力化を軽減できるそうだ。
親父の真心が心に染みる。すぐにそんな品を作ってくれるんだからな。
いざって時のために準備してくれていたのか。
「これからは使うことになるって教えてくれたの」
「後れを取らないために持っておけとな」
「キュア！」
「なん、ですって」
そこでアトラがフォウルの背中に抱きつく。
そして、脇腹をつつきながらフォウルの手に嵌はまる手てっ甲こうを奪おうとしていた。
「あ、アトラ⁉　ぐふ！　や、やめ――何をするんだ！」
「お兄様、それをよこすのですわ」
「アトラももらっていただろ」
「私の場合はあのナンパな男が気色悪く私の手を握って持たせたので廃棄したのですわ。取りに戻っては後れを取りますわ」
アトラには元康二号が渡しに行ったと。そりゃあ捨てるか。
「フィーロもだよー？　だけどキラキラして綺麗だったからもらっといたー」
「お兄様！　それを渡すのですわ」

「あ、アトラ、やめ――」

この光景だけ見ていると、兄貴に駄々をこねる妹に見えなくもない。

フォウルもなんか嬉しそうだ。

「あらー」

「あなた達は……」

「いつまでも遊んでるんじゃない！」

敵前だというのに緊張感のない連中だ。

「アトラ、お前は武器を持ってきていないんだから……」

フォウルとアトラのどっちかか？

持っている武器は手甲だろ？　アトラの場合、勝手が違いそうだ。

「相手の能力を分析する限りじゃ……アトラ、お前は素直に下がっていろ。フォウルに八つ当たりするな」

「く……このような屈辱。全てはあの方の所為ですわね」

気持ちはわからなくもないが、完全に逆恨みだな。

とはいえアトラは基本素手で戦っているから、どっちにしても持ってこなかった可能性が高い。

「嫌ならこれからは何か武器を装備して戦うことも意識したほうがいいな」

武器にはいろんな付与が掛かっている。素手だとそんな要素がないのだからア

トラにも何か効果のある武器を持たせることには、意味があるだろう。
「尚なお文ふみ様の命令ならば、今後は装備しますわ！」
「じゃあアトラは後方で……樹とリーシアの警護を頼む」
「承知しましたわ！」
そんなわけで陣形を組んで俺達は封じられしオロチと対たい峙じする。
喧けん嘩かっ早い連中が多くて困るな。
「うー……」
フィーロがフィロリアル形態で羽毛を逆立てて威嚇している。
ガエリオンの話じゃドラゴンの一種なんだったか？
「ともかく、サッサと仕留めるぞ！　桜陣結界！　アタックサポート！」
俺の足元を中心にして桜を模かたどった結界が作り出され、アタックサポートで出現した棘とげを封じられしオロチに向けて投とう擲てきする。
その棘は結界を通り過ぎると同時に五枚の桜の花びらとなり、オロチの二つの頭に、それを縛り上げるように巻きつく。
「シャアアアアアア！」
「フィーロ行くよー！」
「キュアアアアアアア！」
フィーローとガエリオンが我先にとばかりに飛び出して、俺が縛り上げた二つの

頭のそれぞれをツメで薙なぎ払う。二匹の能力はかなり高く、必殺とばかりに力を込めた一撃で二つの頭はそれぞれ切り裂かれた。

「防御力はなさそうだな」

「……生命力に変化はありませんわ」

後方でアトラが分析する。ラフタリアも同意見なのかそれに頷うなずいた。

するとフィーロとガエリオンによって切り裂かれた二つの頭が即座に再生された。

こいつはヒドラだと親ガエリオンが分析していたな。

「と──！　ん──？」

「速度を利用させてもらうぞ」

獣人化したフォウルが突撃するフィーロに掴つかまってその速さを利用して接近し、自身が落下する衝撃でオロチの頭を踏みつぶして即座に離脱する。

猛たけ々だけしく成長したもんだな。

アイツ、最近絶好調になってきているな。

だが、頭が弱点とは思えない速さで再生していく……霊亀みたいにこの手の魔物は再生するのな。

「ラフ──」

ラフちゃんは……ラフタリアの肩に乗っかって、毛を逆立てている。

魔術的なサポートとかしている雰囲気だ。
「胴体を狙え！　そっちの方が怪しい！」
「わかったー」
それで効かない場合は全ての頭の同時撃破とか有効だろうか。
瞬間、金属音と共に、オロチを中心に桜色の六角柱みたいな結界が生成される。
やっぱりそっちか。
「とー！」
フィーロが負けじと蹴けり飛ばすが、知らんとばかりに結界が弾はじく。
「かたーい！」
「シャアアアアアアアアア！」
オロチは目を赤く輝かせて炎を吐き散らす。
「セカンドシールド！　ドリットシールド！」
既にフロートシールドは展開させている。
俺が先頭に立つことで相手の攻撃を一手に引き受けることはできる。
「ふむ……龍脈の力を一部吸収しておる。時間を掛けるのは愚策だぞ」
親ガエリオンが俺の隣に飛んできて、俺が押さえ込んでいる頭に噛かみついて
相手の気を逸そらしたうえで呟いた。
「わかっている。サディナ！」

「あーい！　ナオフミちゃんと私の共同作業ね」
「気色の悪いことを言ってるんじゃない！　ガエリオン、お前も手伝え」
援護魔法、雷神降臨をサッサと発動させてこっちの手数を増やすのが得策だろ。
「アローレイン……イーグルピアシングショット」
「変幻無双流投擲技、ローリングスピン！」
オロチの八つの頭を相手に最前線で善戦しているフィーロへ、樹とリーシアが援護射撃をしている。
こう……背中にある六角柱の所為でちょうど亀の甲羅みたいな守りなんだよな。
根元に近づいて仕留めようにも結界が邪魔だ。
要するに二重に防御壁が張ってある感じだな。
「私も行きます」
ラフタリアが習得したスキルはどうやら桜天命石の加護の類たぐいを無力化させるもののようだ。
便利なスキルだよな。
俺の方も良いスキルが出たからこれからの戦いに大きく役立つだろう。
「わかった。俺の合図と共に一気に仕掛けろ！」
「はい！」
つと、魔法に意識を集中すべきだな。

ガエリオンが加入してから、早めに合唱魔法を使えるようになった。
「雷神降臨！」
勇者専用のスキルで全能力を引き上げることのできるツヴァイト・オーラをベースとした、雷神降臨。
サディナの得意な雷の魔法と組み合わせると、少なくとも上級であるドライファ以上の効果に変化する。
「シャアアアアアアア！」
オロチの頭が接近してきたラフタリア目掛けて各々一斉に毒の息、火の息等を吐き散らす。
「とー！」
「はぁ！」
フィーロとフォウルがその頭を薙ぎ払い、樹とリーシアが援護射撃をする。
「ドライファ・チェインライトニング！」
詠唱を終えたサディナも協力してオロチに魔法を放った。
ラフタリアが鞘さやに収まっている刀を握って、フィーロが相手をしている頭に向かって振りかぶる。
「太極陣天命斬!!」
剣筋自体は至ってシンプルな斬り方でしかない。

だが、この技は相手に掛かった加護の類をキャンセルすることができるものであるらしい。

難点は掛かっている相手の加護をラフタリアが目視しないといけないこと。

俺やラフタリア自体に掛かっている呪いを解くとか……できたらいいのにな。

「シャアアア！」

オロチが反撃とばかりに炎を吐き散らかす。

俺はそれを受け止め、桜天命石の盾のカウンター効果、桜力光を作動させる。

作動中に俺の近くにいると、力が漲みなぎる効果があるらしいことが一応観測されている。

推測だけど桜天命石の妨害を緩和する効果があるんだろうと思われる。

「フィーロ！　このオロチの結界を刺激してください！」

「わかったー！」

ラフタリアの指示でフィーロが結界に素早く近寄り、蹴り飛ばす。

結界が大きく振動すると同時に、陰陽の紋様が浮かび上がり、オロチを取り囲んだ。

魔力で構築された重しが圧のし掛かったかのように、その紋様に押さえつけられてオロチが悶もん絶ぜつしている。

「シャアアアアアアアアアアア!?」

八つのオロチの頭が揃そろって悲鳴を上げる。
やがて陰陽の紋様が消え去り、フラフラとオロチが頭を上げて先ほどよりもゆっくりと俺達に激怒の声を上げた。
地味にタフだな。
「一時的に桜天命石の加護を破壊しました！」
「よし、畳みかけるぞ！」
「はい！」
「私の出番ですわ！」
そこでアトラが勝手に突っ込んできて、オロチに先制攻撃を仕掛ける。
おい！
「はぁあああああ！　ですわ！」
アトラがオロチの頭を突くと、その頭がピクリとも動かなくなる。
どこが急所なのかわかっているのか。
「胴体が弱点でしたわね！　行きますわ！」
「アトラ、勝手に来るんじゃない！」
「お兄様、攻撃の手を緩めてはいけませんわ！」
とか言いながらフォウルとアトラが争うようにオロチの胴体目掛けて駆け寄る。
「フィーロも行くー」

アトラ達にフィーロも続く。
「ふむ……？」
「あらあら」
ラフタリアも負けじと、というか一番早く駆け寄って胴体に向かってスキルを放つ。
「スターダストブレイド！」
ズバァ！　っと胴体に向かってそれぞれの必殺攻撃が命中する。
オロチはビクッと僅わずかに痙けい攣れんしたかと思うと、全ての頭が地面についたまま沈黙する。
これで勝ったか？　案外アッサリ勝てるもんだな。
「思ったよりも雑魚のようですね」
少し離れたところから樹が声を掛けてくる。
「そうだな。手応えがないな」
呆あっ気けないという表現がピッタリだ。
今までの感覚からもう少しタフかと思ったんだが……。
そう思っていると、アトラが眉を寄せて死体から距離を取る。
「皆さん、逃げた方がいいですわよ」
「何があるんだ？」

「おかしな反応が発生していますわ。まるで……自爆する人達と同じ反応ですわ」
「なに!?　総員撤退しろ！　今すぐだ！」
「はい！」
「わー！」
俺の指示に従い、全員がオロチの死骸から距離を取る。
するとみるみるオロチが膨れ上がり、大量の毒を放って自爆した。
町を守っていた結界がそれだけで破壊され、辺りに毒の霧が発生する。
間一髪のところでみんな避難できた。
ここでは毒の霧は俺の流星盾で遮断できるが、そのあとどうするか。
このままではこの霧で一般人にまで被害が出るぞ。
まあ俺は不特定多数に気を使うタイプではないが、今戦力を削られるのは困る。
何より封印の魔物、自爆、毒、と来ている。
これを理由にクテンロウの国民を煽せん動どうできるし、その毒から民を守った新たな天命、ということにしておきたい。
「フィーロ、風の魔法で毒の霧を吹き飛ばせないか？」
「やってみるー」
というわけで、フィーロが翼を広げて魔法を唱える。
「ドライファ・トルネイドー」

フィーロの魔法で巻き上げられた毒の霧が、町とは反対方向に飛んでいく……
けど、散らしきるには足りないな。
そもそも濃度は下がったけど範囲は広がってしまったようなもんだ。
「ぬ!?」
そこでガエリオンが驚きの声を上げて俺に囁きさやく。
「汝なんじ……どうやら敵は随分と厄介な化け物のようだぞ」
やがて……ゴゴゴと音を立てて、オロチがまた古墳から顔を覗のぞかせる。
なんか先ほどよりも鱗うろこに光沢があるように見えるんだが……。
「どういうことだ!?　さっき仕留めたんじゃないのか？」
「アレはいわば分身だ。本体を仕留めるのはそう簡単にできん」
思ったよりも弱くて助かったと思ったら、分身かよ。
しかも倒したら爆散して高密度の毒を発生させるって、厄介極まりない。
わざわざこんな化け物の封印を解いて……仮に俺達を倒したとして、天命派は
その後どうやってこれを止める気なんだ？
「しかも多少、強化されているぞ」
まあ、さすがは過去に封じるしかなかった化け物だけのことはあるか？
タイラントドラゴンレックスが可愛く見えてきた。
「どうにかする手はないのか？」

「一つ、汝が好みそうな手っ取り早い手がある」
「なんだ？」
「アレとてドラゴンの端くれだ。汝はドラゴンの生態を多少知っておるだろ？」
ああ……なるほど、どこかに核があってそれを取り除けとかそういう感じか？
「分身と我われが言ったのもそこに起因する。おそらく核を上手く奪えば、後は抜け殻だ。何度か復活する可能性はあるが……その方が手っ取り早いだろう」
「となると、あの古墳のアイツが出てきたところに本体がいて、分身した分の足止めもしないといけないいってことだよな」
「そうなる」
「あんな奴の核を奪うとして……その後は？」
「我が抑えつけるしかないな」
「できるのか？　最弱の竜帝」
「ふ……」
なに笑ってんだよ。お前が弱いから不安なんだろ。
あの錬れんにボロ負けしたんだぞ、お前は。
「核だけなら最弱でも抑えることなど容易たやすいわ」
うーん……どうも頼りにならなそうだな。
「わかった。分身を相手に戦って足止めをする班と本体のいる方へ乗り込む班を

決めよう」
　俺は今いる人員を確認する。
　分身が町に行くのを止めさせるべきだよな？　じゃなきゃ被害が増える一方だ。
「足止めは俺の役割のような気がするが……」
「ところでさっきから気になっていたんだけどー」
　サディナが手を挙げて発言する。
「なんだ？」
「あのオロチ、お姉さん達を狙っているのかと思ったんだけど、町かラフタリアちゃんを狙ってるように見えないー？」
　そういやラフタリアが攻撃をしようと接近した瞬間、八つの頭が揃ってラフタリアに狙いを絞っていた。
「天命とやらに似たラフタリアに深い恨みを持って狙ってる……とかか？」
「なんか嫌ですね……」
「お姉さんが分身の方を足止めしてもいいけど、ラフタリアちゃんを狙ってるんだったらあんまり意味はないわよね？」
「分身がラフタリアさんに狙いを絞るなら、分身相手にラフタリアさんを配置すればいいのでは？」
　リーシアがそう提案してくる。

「本体も分身と同じ能力を持っているとすると、ラフタリアなしじゃ加護の無力化ができないんだが……」

なんだかんだで桜天結界の使い方が難しい。

「本体とやらがどれだけ厄介かにもよるからな」

少なくとも分身よりも強いだろう。

というところに、町の方から人員がやってきた。

「これだけの戦力なら数に物を言わせて分身の足止めができるんじゃない？」

「そう、だな。じゃあ俺達は古墳の方に潜んでいる本体とやらに挑むか」

俺は増援でやってきたラルヴァ達やシルトヴェルトの連中に、作戦内容を伝える。

「私とイツキ様は分身の足止めをした方がいいですよね？」

リーシアの提案に考える。

古墳の中がどうなっているかわからないが、後方援護担当の樹とリーシアは……というか勇者は双方にいた方がいいかもしれない。

「わかった。リーシアは樹と一緒に分身の足止めをしておいてくれ。トドメを刺さず、できる限り時間を稼ぐように努めろ」

「尚文様、私はどう致しますか？」

「お前は武器がないから分身の方だ。その分フォウル、お前に任せるぞ」

「くっ……わかりましたわ」
何か悔しそうにしていたがアトラは後方にいた方がいいだろう。
「お兄様！　ちゃんとやるのですわ！」
「く……わかった！」
反応が妹と同じだな。こういうところは兄妹きょうだいか。
「フィーロはー？」
「お前は俺の方だ」
「はーい！　ガエリオンには負けないよー」
「じゃあササッと行くわよー」
そんなわけで、作戦を決めて二手に分かれ、俺達は古墳の方へ向かったのだった。

後方を確認すると、町の連中と樹いつき達が分身の方のオロチを相手に善戦している。
トドメを刺さずに時間を稼ぐのは意外と大変だからなぁ。
俺がいれば時間は稼げるが、本体の方の攻撃が苛か烈れつだったら俺が行かないと話にならない。
そう思いつつ、半壊した古墳の穴を確認する。
なんとなく邪悪そうな気配というか……魔力の流れを感じる。
これが龍脈法を習得した者が感じる気配なのだろうか？
「随分と禍まが々まがしいな」
こんなのを可哀想とかいう天命とやらの気が知れないな。
「ラフッ」
「ケホ……確かに、空気が悪いですね」
咳せきをするラフちゃんとラフタリアに濃度のヤバさを感じる。
素早く行動した方がいいだろう。
「ともかく、入るしかないか」
「行きましょう」
ラフタリアの言葉に頷うなずいて、俺が先頭に立って古墳の中へと侵入する。

内部は……崩落気味だけど元は石室みたいな場所だったっぽい。

「ここに本体がいるのか？」

「力の流れではそうなる」

変な力の流れが定期的に通り抜けていくのが俺でもわかる。

コレが龍脈の淀よどみってやつだろうか？

「徐々に国を守る結界とやらを侵食しようとしておる。早めに仕留めねば他の封印も解けるかもしれんな」

ガエリオンが言う。ヤケクソにしても性た質ちが悪すぎるだろ。

自分達が代々守ってきたものを壊してまでとか……封じられた化け物が全部復活したらこの国は勝手に自滅しそうだな。

もしかして俺達は逃げた方が早いんじゃないのか？

「お姉さんが国を出る前からだけど、随分と汚職が酷ひどいわねー」

「つーか、クテンロウって国はどれだけの歴史を持ってるんだ？　天命って奴も代々国の宝って扱いなんだろ？」

「お姉さんもある程度までしか知らないけど、少なくともメルロマルクやシルトヴェルトくらいには続いてるはずよ？」

そんなに長い間よくもったな。

「ん？　なんだ？」

石室の壁に何か文字が書かれている。
これ、読めるぞ？　カルミラ島で見た魔法文字に似てる。
「こんな所にも勇者の碑文があるのか？」
手を添えながら俺は書かれている文字を目で追う。
「盾の聖武器の……強化方法!?」
なんでこんな所に書かれているんだ？
カッと文字が光り輝き、俺の盾の宝石の部分が光る。
もう少し読み込んでみよう。そこまで長い文じゃないしな。
「何なんですか？」
「なぜか盾の聖武器の強化方法――と続く文字が読める。お前等は読めるか？」
俺の言葉にその場にいた奴等が揃そろって書いてある文字を目で追う。
「ダメですね。私には読めません」
「そうね。これがナオフミちゃんの国の言葉？」
ラフタリアとサディナがそれぞれ断念するように答える。
「魔力を感じる」
「俺は魔法にそこまで詳しくないから読めないな」
ガエリオンとフォウルも反応は似たようなものだな。
「んー？」

「フィーロ、お前には期待してない。とにかく、読み上げるぞ。盾の聖武器の強化方法その一、他の聖武器や眷けん属ぞく器の強化方法の共有」
……既にやっているんだが。
つーか、絆きずなも似たようなことをラフタリアに言ってたよな。
後は詳しい方法が載っているだけで、ご丁寧にもヘルプに同様の文が浮かび上がってきた。
どういうことだよ！
今更知ってる知識が表示されても意味なんてないだろ！
「知ってることが書かれていてもな……役に立たないな」
「場合によっては確認できるってことでしょうか？」
まあ……仮に錬れんとか樹とかがこの文字を読めたら役立つのか？
後で樹に読ませてみるか。
というところで紫色に光っている縦穴を発見。
俺達の接近を感知したのか石室がガタガタと揺れ始めた。
「この下か？」
「そのようだ。ふむ、なかなか面白い仕組みで作られているようだな」
ガエリオンが分析する。
「何が面白いんだ？」

「確かに、封印した者から力を吸い取るようにできている。同時に生かさず殺さずに結界の維持を務めるようにしていたようだ。しかも永続的に維持できるように修復機能まで備わっている。途方もない技術なのだぞ」

「経年劣化のない封印？」

「それが適切な表現だ。愚かにも封印を解くような真似さえしなければ永えい劫ごうに封印されていたということだ」

……紫色に光っているのでかなり下まで見える。

その下に一際光り輝く何かが見えるな。

なんかちょろちょろと穴から水が出てきているように見えるんだが。

「水脈と龍脈は深い接点がある……いや、違うか」

ガエリオンが穴の内にあった何かを指差す。

それは……何かの頭の骨に見える。

「封印時の肉体自体は既に朽ちていたようだ。封印が解けたことによって核を媒体に龍脈との交絡をしているのだろう」

「で、その核はどこだ？」

「あそこだ」

と、ガエリオンが指差した方角は、穴の底に紫色の煙が集まっているところだった。

何か瘴しょう気きっぽいものが漂ってるぞ。
挙句、穴自体が広がるようにひび割れて水が噴き出してくる。
「考えたな……分身に時間を稼がせて、核は新しい体を作っていたか……」
「面倒なことをしてやがる」
勢いよく水が噴き出して、みるみる水みず嵩かさが腰まで増えていく。
「いかんな。サディナよ、盾の勇者とその仲間を急いで抱きかかえよ。弾はじき出されるぞ」
「あら？」
「なに!?」
「フィロリアルも気を付けよ」
「フィーロ泳げるもん！」
ガエリオンがそう言うのとほぼ同時だったか、穴から水が噴出し俺達は思い切り流され始める。
「ガボボボ……」
どうしてこう、この国に来てから水に流されることが多いのかと嘆きたくなる。
なんて思いながら懸命にあがいていると、サディナが俺とラフタリア、ラフちゃん、フォウルを抱えたまま、一緒に流れに乗って来た道を戻される。
それほどに強い水の流れだった。

フィーロもガエリオンも合わせて、俺達は揃って古墳から弾き出されて落下する。
地上に激突する寸前のところでガエリオンが羽を広げて俺達をキャッチした。
「ふう……間一髪だったな」
「凄すごく無駄足だったぞ」
「そう言うな。ほれ……見るがいい。奴が本性を現したぞ」
と、ガエリオンが顔を向けた先には、分身の三倍くらいありそうなオロチが古墳を完全に破壊して姿を現していた。
「あのオロチの根元に見える紫色の光が奴の核だ。分身の比ではないぞ？　しかも少しずつ龍脈に溶けた力を集めて膨れ上がってきておる」
「短期決戦を心掛けろってことか」
「そうなる。全部出てくるまで待つなどと高尚なことをしたいのなら止めんが」
「そんな真似してどうするんだよ。つーか、魔竜みたいなもんだろ」
「アレは龍脈の表層だったわけだが……まあ、似たようなものであるが……規模が違う。他の封じられた化け物共にも力を与えているし、厄介な桜天命石の結界も所有しておる」
「じゃあ行くわよ。手早く最小限にってのがナオフミちゃんの信念よね」
「ああ！　こんな奴に国を荒らされたら、捨てた国とはいえ、嫌だろ？」

「……そうね。少なくともナオフミちゃん達が支配する予定なのに、なくなっちゃったら意味がないわね」

これもラフタリアのため、村のため、今後のためだ。

「じゃあお姉さんも、もっとがんばっちゃおうかしらー」

さて援護魔法を掛けようとしたら、またも盾が反応した。

対象に力を注ぎ、獣化させますか？

はい／いいえ

えー……これはシルトヴェルトで手に入れた獣王の盾に内包されていた技能だ。

条件は不明だけど、俺の仲間にいる獣人化可能な奴を更にもう一段階変化させることができるようになるっぽい。

前回はフォウルに施すことで強力な白虎に変身した。

まだ戦力的に頼りなかったフォウルが、そりゃあもうかなりの強さになって、シルトヴェルトで出てきた化け物をアトラと協力して倒したものだ。

これを俺の仲間の中でも上位に位置するサディナに施したらどうなるんだろうな？

「サディナー」

「なーにナオフミちゃん」

「お前に獣化ってのが指定できるみたいだぞ」

「あら！」
すっげーニヤニヤしてる。
何がそんなに嬉しいのかは知らないが、今使わないなんて選択肢はない。
「俺はできればラフタリアにやりたい」
「獣人にもなれませんし、やってほしくありません」
「なんでだ？」
「ラフちゃんみたいになりそうで嫌だからです！」
「ラフ？」
ふむ……それはぜひとも見たいところなんだがな。
もしくはもっと獣人っぽいラフタリアか……信楽しがらき焼やきの狸たぬきの雌っぽい感じかな？
ラフタリアなら愛あい嬌きょうがあるだろう。
「なんか嫌なことを考えてますね」
勘付かれたか。だが知らんな。
「それじゃあ行くぞ！　サディナ！」
「はいはーい！」
つと、これってスキルみたいなものなのかもしれないし、スキルに変質させるなら先にやっておいた方がいいか。

「桜陣結界！」
　を発動させてからの、サディナの獣化補助を発動させる。
　カッと俺の盾を中心に桜の花びらが舞って、サディナに向かって飛んでいく。
　フォウルを包み込んでいたのと同じくサディナを包み込み球状の光となって浮かび上がる。
　しかも近くにある折れたり、枯れ果てたはずの桜光樹からも何か光が飛び出して、援護するかのように纏まとわりついていく。
　そしてサディナを包んでいた光が飛び散り、しめ縄を纏った巨大なシャチが出現した。
「あらーすごーい！　全身から力が溢あふれてくるー！　これがナオフミちゃんの愛かしら？」
「気色悪いことを言うな！」
　サディナはシャチ形態になったというのに空中をまるで水中にいるかのように優雅に泳ぎ始める。
「あと、水竜様の声も聞こえたような気がするわね。今なら何だってできそうよ」
　そう告げたサディナが幾重にも魔法陣を展開させてオロチに向かって攻撃を仕掛ける。
「あら？　こう唱えるの？」

自問自答するな、わかりづらい！
「鳴なる神かみ！　それと海神わだつみ！」
オロチの上空に急速に雷雲が発生し、今までで一番大きな雷が降り注ぎ、その直後にサディナの前方から巨大な津波が生成されてオロチを押し流そうとする。
壮絶な攻撃だな。
「俺も一度変身したらしいが、あんなんだったのか？」
フォウルが、一方的にオロチの本体に猛攻を仕掛けるサディナを見て言う。
「あーそうだな。フォウルもシルトヴェルトじゃあんな感じだったぞ」
「凄いな……カッコ悪いところばかり見せてしまっていた俺だが、あの時ばかりはアトラが褒めたはずだ」
……自覚があったのか。
「というか私達も見てるだけじゃダメですよ！」
ラフタリアが俺達に注意してから、サディナの援護をするために走りだす。
「フィーロも行くー」
「我も負けてはいられんな。行くぞ！　キュアアアアア」
あ、ガエリオンの中身が入れ替わった。
「だそうだ。俺達も畳みかける手伝いに行くぞ」
「お、おう！」

「シャアアアアアアア……」
それでも引かないとばかりにオロチは叫び声を上げる。
そして負けじと炎、氷、毒等、八つの頭からそれぞれ別の息を俺達に向かって放つ。
「させるか！　エアストシールド！　セカンドシールド！　ドリットシールド！」
盾を出現させるスキルを放つと桜陣結界の影響で桜の花びらのような盾が出現し、攻撃を受け止める。受け止める度に花びらが砕けていくが、オロチの攻撃を広範囲に守ってくれている。
いや……壊れてないな？
随分と頑丈に……あれ？
俺の呪いで落ちた能力が随分と回復……じゃない、いきなり上がっている？
どうなってるんだ？
考えられるのは古墳にあった強化方法の文字……か？
もしかして今まで俺がやっていた強化方法は不十分だったのか？
強化の倍率が変わったみたいな感触がある。
「ナオフミちゃん、ナオフミちゃん」
「なんだ？」
「よく観察してみたんだけどやっぱり弱点部位は同じね。胴体のところで光って

いる、あそこ」
　魔力水と魂癒水を取り出して、獣化補助で消費していく力を回復をする俺にサディナが呟つぶやく。
　とはいってもな……あそこをピンポイントで攻撃するには八つの頭の攻撃を切り抜けないといけないし、上う手まく命中するかわからないが……。
「ラフタリア！」
「はい！」
　ラフタリアは分身を相手にした時と同じように、相手の祝福を無力化させるために太極陣天命斬の構えを取る。
「シャアアア！」
　やはりオロチの狙いはラフタリアか。
　獣化しているサディナが極太の雷を落とし、オロチがラフタリアに近寄れないようにとその前を遮るようにして空中に浮かんでいる。
「させないわよー！」
　こう……言ったらオタクっぽいんだろうなと思うが、刀を構えるラフタリアと、それを守っている雷を纏ったサディナは絵的に映える。
　しかもラフタリアは俺が指定した巫み女こ服を着用しているわけだし。
　もちろん俺も前に出て、オロチの猛攻を耐える。

「よし！　アタックサポート！　流星盾！」
アタックサポートをオロチに投とう擲てきして、動きを封じる。
「お前等！　時間を稼げ！」
「はーい！」
「わかっている」
「アトラに注意されているし、こんな化け物相手に引く気はない！」
と、フィーロ達が揃って襲い来る頭を薙なぎ払い、大きく隙すきを作る。
「これで攻撃のチャンスを作ります！　太極陣天命斬！」
何度か放って馴なれたのか、ラフタリアは前回よりも素早くオロチの結界に向かって斬りつけた。
が――ガツンと刀がはね返される。
「なに!?」
「コレは……攻撃が入ったはずなのに……？」
ラフタリアが俺の方に戻ってきて答える。
「ナオフミ様、どうやら私の攻撃で桜天命石の放つ結界を破壊されることを察して、オロチ自身が障壁を作り出しているみたいです」
そういえば……桜天命石の柱の光と、紫色の光が混在しているように見える。
分身には搭載されていないもう一つの結界が、奴の弱点を隠しているのか。

「変幻無双流の攻撃で破壊は？」
「なぜか入りませんでした……物理的に壊すのは難しいと思います」
「シャアアアア！」
再生した頭が一斉にラフタリアに狙いを定めて複数の息を吹きつけてくる。
俺が前に立ち、受け止める。
「ゲホ……」
ラフタリアが咽むせる。
「大丈夫か？」
「はい。大丈夫、です」
「ラフー」
ラフちゃんが咽るラフタリアの背中を撫でる。
それだけで自然とラフタリアの呼吸が整ったように見える。
「分身との違いもあるみたいね」
「みたいだな。面倒な奴だ」
後方の町の近くで暴れている分身にも目を向ける。
あっちを倒しても、すぐにこっちの本体が復活させる。
が、一度あっちを仕留めて戦いやすいようにするべきか？
結果的に……計十六の頭を持つオロチと戦う羽目になるかもしれんが。

「あの紫色の結界よね？　厄介なのは」
「ああ」
一番の問題はあの結界だ。
桜天命石の方はラフタリアが何とかしてくれるけれど、紫色の結界の方はまた別条件。
正直な話、桜天命石ってのはどうしてこうも面倒臭いのかと色々言いたくもなるな。
なんていうか勇者を相手にすることを前提に仕組まれているように見えるんだ。
クテンロウの天命とやらは、どうやら特殊な儀式で能力をパワーアップさせる装置程度に思ってるみたいだけどさ。
どれだけ厄介な状態にしているのやら。
「ただねナオフミちゃん、お姉さんが確認したところによるとね」
「なんだ？」
「あの紫色の結界が弱っているように見える瞬間があるわ」
こういう相手を倒すのに複数の条件があることくらいは元ゲーマーな俺にだって想像できる。
でなければ大昔に封印することすらできなかっただろうしな。
サディナはその辺りを察したってことか。

「お姉さんが攻撃した際に頭を何個も消し飛ばしたんだけど、その分、結界の密度が落ちてるように見えたわ」

頭を潰つぶしてもすぐに再生するが、そのタイミングで結界が揺らいでいるってことか。

おそらく、変幻無双流の攻撃で破壊できなかったのだから何か別の破壊条件があると考えた方が自然だ。

力技で突破できないみたいだし、正攻法でやるしかないか？

「全ての頭を同じタイミングで潰すことで結界が消えるのか。面倒臭せぇな！」

「再生がとても速いからタイミングが命よね」

「そうだな……」

正直に言えば樹達もこっちに来てもらって、数で一斉に頭を仕留める方がいいような気もする。

頭を同時に全て破壊後、背中の桜天命石をラフタリアが無力化することで仕留められるってところか。

「サディナ、今のお前なら頭を一度に何個仕留められる？」

「今のお姉さんはナオフミちゃんの愛を受けて無敵よ。しっかり狙ってナオフミちゃんがアタックサポートだっけ？　で縛れば四つはいけるんじゃないかしら？」

四つか……悪くはないか。

ラフタリアは太極陣天命斬を放つためのチャージが僅わずかに必要だ。
桜陣結界があってもそれは変わらない。いや、なかったらもっと時間が掛かるんだろう。
となると残りの頭はフィーロ、ガエリオン、フォウル辺りに一人一頭分がんばってもらうしかない。
俺は防御や敵の攻撃の妨害が仕事だしな。
あと一人欲しいところだが、残念ながらラフちゃんはラフタリアの援護中だ。
「フィーロがんばる！　タイミングバッチシ」
そう言ってフィーロがハイクイックのポーズを取る。
その手があったか。ハイクイック状態のフィーロなら二頭くらい倒せるか。
「前よりも長く動けるよ」
「任せたぞ」
「はーい！」
「その後はラフタリアがもう一つの結界を破壊し、核を肉体から弾き出せ」
「はい……いつでも行けます」
よし、準備は完了、行くか！
「アタックサポート！」
俺がアタックサポートを放ってオロチの首を三つ縛り上げて、サディナが巨大

な雷を降り注がせる。
「じゃあ行くわよー！　鳴なる神かみ！」
「シャアアアアアアア！」
オロチが呻うめいてサディナの一撃に抗あらがおうと息を空に吹きつける。
が、サディナはその程度では止まらない。
更に俺のアタックサポートで受けるダメージは倍だ。
「よっと！　チェインライトニングの応用！　連鎖鳴神！」
極太の雷が降り注ぐと纏めてあった頭が炸さく裂れつし、胴体が雷のショックで痙けい攣れんする。
そして、サディナが体を捻ひねると雷が曲がって、一つの頭を突き抜けて飛んでいった……器用だな。
うん、ちょうど四つの頭が消し飛ばせたみたいで何よりだ。
「キュアアアア！」
ガエリオンがタイミングを合わせて炎を吐きながら突撃し、頭の一つを叩たたき潰す。
「こっちも行かせてもらう！」
フォウルも拳を振るい、かかと落としをオロチの頭に放って消し飛ばす。
結構威力のある攻撃ができるようになってるな。

「じゃらじゃらー！　はいくいっく！　それとー！」
フィーロはモーニングスターを投げ付けた直後、高速なスパイラルストライクで突撃して、一瞬で頭を潰した。そのままハイクイックを維持した状態で最後の頭を力の限り蹴り飛ばす。
おお……この中じゃフィーロが速さで一段上か。
まあ、元々素早い奴だったからな。
フィトリアに能力の底上げをしてもらったと言っていたが、確かに速い。
基礎ステータスだけで言えばラフタリアに匹敵しかねない速度なんだしな。
「――!?」
全ての頭を潰されてオロチの胴体が痙攣を始め、胴体にあった紫色の結界が消失する。
「ラフタリア、今だ！」
「今度こそ！」
ラフタリアが走って近寄り、桜天結界に向かって刀を振りかぶった。
「太極陣天命斬！」
掛け声と共にスパッと桜天結界に斬りつけて、刀を鞘さやに収める。
「ラフ！」
そこへラフタリアの肩に乗っかっていたラフちゃんが、陰陽の玉みたいなのを

ポンッと投げつけると、あっという間に膨れ上がりオロチを包み込んだ。
「ふう……辛うじてできましたが、なかなか難しかったですね」
「これで加護を外せたか？」
「はい。ですが……トドメには足りないです。立て続けに行きます！」
「お姉さんも行くわよー！」
「龍脈の浄化もできるように合わせろ！」
サディナとガエリオンがトドメのために力を集約させる。
『閉ざされた天命の地、古き淀みを押し流す清流のような思いを、世界を救う願いを力に龍脈よ、海の清浄なる力よ！　汚れた流れを押し流せ！』
『我、ガエリオンが天に命じ、地に命じ、理ことわりを切除し、繋つなげ、膿うみを吐き出させよう。我の力よ、精霊の加護よ！　土地の浄化をせよ』
「「大海神おおわだつみ！」」
サディナとガエリオンは詠唱を終えると水を纏いながら、一度高々と上空に移動した後、落下するかの如くオロチに向かって突撃していく。
「うわ！」
「わー！」
その突撃にフィーロとフォウルが驚いて急いで退避する。
「桜神楽一ノ型・開花！」

サディナ達がトドメを放つよりも僅かに早く、ラフタリアとラフちゃんが二撃目を放っていた。

斬撃と共に桜の花びらが舞う。

ガキンと金属音が響き渡ると同時に……宙に何かが弾き出された。

あれは……竜の核石か何かか？

そしてサディナとガエリオンの攻撃によって残された肉体は消し飛ばされた。

「危なかったー」

「まったくだ……タイミングが重要とはいえ、命がいくつあっても足りないだろ」

「とはいっても……逃げ切る余裕はあったようだがな」

俺の言葉にフォウルが睨にらんでくる。

「まあ、アイツ等には後で文句くらい言ってもいいだろうな」

ラフタリアは雷神降臨の効果が残っているから一撃を加える余裕があったようなもんだし。

……しかし、地味に俺自身の能力が上がっている。

少なくともラフタリアの速度に追い付くことができたわけだしな。

「お姉さん達の勝利ね！」

スタッと、亜人姿のサディナが水しぶきの中から飛び出して俺達に背を向け、オロチに向かって叫んだ。

「キュアアアアアア！」
　ガエリオンも同様になんかカッコつけている。もう少し連携を煮詰めないと誤射しそうだな。
　後方を確認すると、樹達に任せていたオロチも霧散していく光景が見える。
　どうやら上手く仕留めることができたようだな。
「ナオフミちゃん、どうやら龍脈に根付いた方もお姉さん達の力で浄化できたみたいよー」
「そりゃあ凄いな……しかし獣化が解けたのに元気だな、お前は」
　獣化補助で変身をすると、フォウルの例からするとかなり肉体疲労が発生するらしい。
　少なくともフォウルは足腰が立たないくらいに疲労していた。
　にもかかわらずサディナは割と平気そうに立っている。
「いやーさすがにお姉さんもヘロヘロよ？」
「とてもそうは見えないが」
「はい。かなり元気に見えますよ？」
「あらー？」
　なんて話していると、戦いを終えたアトラ達が俺達の方へと駆け寄ってくる。
「尚なお文ふみ様ー！　やりましたわー」

「とりあえずは、どうにか処分できたみたいだな」
「おや？　何やら不浄な気配がしますわね」
そこでアトラは……先ほどラフタリアが飛ばした何かが飛んでいった方角に顔を向ける。
俺も気になっていたんだよな。
「ラフタリア。さっき、何か弾き飛ばしたよな？」
「え？　ですから当初の予定通りにオロチの核かと思うのですが」
ああ、そういえばそうだったな。
サディナ達が派手にやらかしたから忘れかけてた。
「キュアアアア」
って感じにガエリオンがその核と思おぼしきものを追って飛んでいく。
「あんまり放置していいものではないですわ。尚文様、急いで追いましょう」
「……そうだな」
リーシアと樹、町の連中が同行しているのを確認してから、俺達は封じられしオロチの核が飛んでいった場所へと向かった。

三話　呪われし天叢雲剣あめのむらくものつるぎ

その先で見つけたのはむき出しの地面に、今まさに落下した……剣だった。

剣の刺さった先がふつふつふつと紫色に侵食を始めている。

「剣？」

鍔つばの真ん中に核らしきものが嵌はまっている白い刀身の剣。

八岐大蛇やまたのおろちみたいな魔物だから剣なのか？

ドロップとかで出るならわかるけど……核が剣とか。

「早めに処分した方がよろしいですわ。大地を汚染して再生しようとしていますわよ」

「キュアアア」

「まあ核に関しちゃガエリオンがいればどうにかできるんじゃないか？」

一応、ドラゴン系の魔物らしいし、核さえどうにかすれば完全に沈黙させられるだろう。

で、ガエリオンが核らしき装飾の部分に口を当てると、バチッと弾はじかれる。

「キュアア⁉」
「汚染が激しくて無理ってことかしら？」
「役に立たないなー」
ホント、ここぞという時に頼りにならん。
「とりあえず引き抜いてどうにか処分するしかないが……触ったら呪われそうだな」
見るからに怪しい。
今の俺はまだ呪いが体を汚染しているから、近づくだけで地味に痛い。
肌を焼く感覚っていうのだろうか？
目を凝らして確認する。
呪われし天叢雲剣あめのむらくものつるぎ
目利きが上う手まく作動しないところを見るにかなり高性能な武器なのは間違いない。
まさか異世界で日本の三種の神器の一つにお目に掛かることになろうとはな。
俺の盾がそう翻訳しているだけで、実際は別の武器なんだろうけどさ。
「ふぇえぇ……あ、あの、剣なら剣の勇者様に預けてから処分してはどうでしょうか？」
ふむ、錬れんに持たせてからの処分か。

こんな呪われそうな装備を錬に持たせて大丈夫か？
かといって、もったいないという気持ちもある。
しかし……こんなものを放置していたらまたオロチが復活しかねないぞ。
盾に入れておく手もないわけじゃないが、こんなもの入れたら魔竜の二の舞になりそうで怖い。
「お？　倒せたみたいだな」
そこに武器屋の親父とその師匠……元もと康やす二号が来た。
「霊亀といい、相変わらずアンちゃん達の戦いは壮絶だな。遠くで見てたけど驚いたぜ」
親指を立てる親父に向かってこっちも親指を立てる。
「まあな。とはいえ、俺は守ってるだけみたいなもんだがな」
「あらー、ナオフミちゃんの力がなかったら勝てなかったと思うわよ」
サディナが俺に世辞を言う。
最近は見てることが増えてきたな。
まあ、エアストシールドとかを展開しているから一概に、見てるだけとも言えないけどさ。
もう少し……オロチの動きを抑えることとかできたんじゃないかくらいは考えている。

「で、何やってんだ？」

「ああ、あの化け物の核が飛んでったから追いかけてきてみたんだがな、剣の形をして呪われてるし、処分をどうするかって悩んでるんだ」

すると元康二号は地面に刺さった剣を見てから刀身を確認する。

「はー……結構な業物だな。これがアイツの本体ねー」

と、そこで愚かにも柄つかを握って引き抜く。

ぶわっと紫色の瘴しょう気きが立ち上って、元康二号を取り巻く。

これで呪われて第二ラウンドが始まるのか？　バカじゃないのか？

そう思いながら盾を構える。

「黙れ、騒ぐな」

カタカタ動く剣に向かって元康二号がそう怒鳴ると、剣が纏まとっていた瘴気が霧散する。

「え？」

「確かに呪われてんなー。使うのは無理だな」

「いや、お前アッサリ握ってるけど、大丈夫なのか？」

「なに言ってんだ。俺は鍛か冶じ師だぞ？　武器に呪われてたらやってらんねえだろ」

そういう問題か？

武器屋の親父の方を見ると「さあ？」とばかりに肩をすくめられる。
「さすがは師匠だな。そんな剣を平気で握るとは」
「は、鍛冶師が武器の呪いに汚染されるなんて三流もいいところだ。呪われないように持つくらい造作もねえ」
やべえ、女好きのバカだと思っていたが考えを改めるべきか？
確かに、腕は良いっぽいんだよな。
「とりあえず暴れ出さないように抑えられるか？」
「は？　知らねえな」
武器屋の師匠は何事もなかったかのように剣を地面に……刺し直すな！
「……お願いできませんか？　またあの化け物が出現しては大変です」
空気を読んだラフタリアが武器屋の師匠に手を合わせてお願いする。
「わかりましたよ、お嬢さん。この俺がどうにかしてみせましょう」
……この野郎、いい加減にしろよ。
「親父、このバカがやったようにあの剣をどうにかできないか」
「悪わりぃなアンちゃん。俺は三流みてぇだ。いずれは師匠みたいになりてえが……」
俺の中では親父は超一流なんだがな。
はぁ……しょうがない。

「つーわけでだ、エルハルト。頼まれたからにはこの剣を問題がねえように打ち直すとするか！」
「わかったぜ師匠。アンちゃん達も協力はしてくれよ。多分、色々と面倒な材料が必要になると思うからよ」
「まあ性能は高そうだしな。親父の武器作りの経験値になるなら手伝うさ」
「ありがとな、アンちゃん」
というわけで、オロチを倒した際に出てきた剣は親父達に預けることになった。
「後は……町や近隣の被害はどうなんだ？」
「港町の一部が崩壊しましたが、怪我人はごく少数で済みました。これも天命様と盾の勇者様一行のお陰です」
ラルヴァが町の方を確認して答える。
よし、怪我人は少数で済んだか。これで後々国民を煽せん動どうする下地ができたな。
「ただ……古墳近隣は多大な被害と若干汚染が残されており、修復に時間が掛かるかと思います」
「そこは諦めるしかないな」
そもそも重要な拠点だったわけでもないし。
「どちらにしても……封印された化け物を解き放って革命派に嘛けしかけようと

する国に大義などない。国民にどれだけの被害が出ると思っているんだ」

俺の言葉にラルヴァ達は力強く頷うなずく。

「このことは即座に近隣に、ひいては国中に伝達する所存です。上手く立ち回れば更なる切り口に、国の方針を不服に思う実力者の協力を仰げるかと思われます」

俺はラフタリアに目を向ける。

もうここまで来たからにはやるしかないぞ？

「お願いします。こんなことまでやる人を止めるのは私達しかいないようですから」

実にラフタリアらしい物言いだ。

しかしちょっと押しが弱いな。それでは煽動されない奴も出てくる。

「その通り！　こんなことを仕出かす天命に大儀などない！　奴等は人々のささやかな幸福などどうでもいいと考えている！　皆の者、これで本当にいいのか！」

などと、俺は大きな声でラルヴァ達を煽動する。

それを聞いて覚悟を決めたのか、ラルヴァ達は真剣な眼差しでこう言った。

「天命様の命じるままに！」

って感じでラルヴァ達クテンロウの革命派の連中は、酒が抜けて再度忠誠を誓ったのだった。

「……あえて何も言いませんが、ナオフミ様、それ好きですよね」

ラルヴァ達のやる気を見て、ラフタリアが呆あきれた表情で俺に言う。
「大義名分というのは少しくらい大おお袈げ裟さな方が気持ちがいいもんなんだよ」
自分達は正義であり、悪を裁く。
そういった感情は士気を高める。
誰だって悪人よりも善人でいたいからな。
「ラフタリアさんが信仰されるなんて悪夢のような国ですわ」
「別に好きで信仰されているわけじゃありません。なぜか巫み女こ服を着てると手を合わせられるだけで、お父さんとお母さんが関わってなかったら逃げてます」
アトラも相変わらずラフタリアに喧けん嘩かを売るな。
「しかしお兄様、よくがんばりましたわね」
「お、おう！　アトラ！　兄ちゃんがんばったぞ」
「その所せ為いで私が尚なお文ふみ様の役に立てませんでしたわ。お兄様、許しませんわよ」
「な——あ、アトラ!?」
活躍しても恨まれるって理不尽だな。
フォウルも大変だ。なんか同情したくなってくる。
「ところで天命様と盾の勇者様」

「ん？」
そこでフィロリアル姿でいるフィーロに革命派の連中が目を向けた。
フィーロはどうやらオロチに投げたモーニングスターを回収してきたところみたいだな。
「ん――？」
「出撃時から気にはなっていたのですが……」
「フィーロがどうかしたか？」
「喋しゃべるフィロリアル……いえ、確か羽の生えた少女。盾の勇者様の仲間だったかと思いますが」
「うん！　フィーロの名前はフィーロ！」
フィーロが微妙にガエリオンと睨にらみ合いをしたように見える。
「ああ、コイツはフィロリアルでな。勇者が育てると特別な成長をするんだ。それで……フィーロに何かあるのか？」
「はい。その白い姿、桜色の模様のフィロリアル。上手くいけば、更に有利に立ちまわれるかと思われます」
俺はフィーロに目を向ける。
クテンロウの連中が何を意図しているのか、その時はよくわからなかった。

## 四話　追い風

翌日には近隣の町々から、こちらの軍門に下りたいと顔役や権力者が頭を下げに来た。

どうも国が封じられた化け物の封印を解いてまで俺達を追い出そうとした事実は、連中からしてもやりすぎだと思ったみたいだ。

もちろん、国の連中は俺達が来たことで勝手に封印が解けたとか言い訳をしたらしいのだが、元々天命が化け物に何か祝福を施していたという事実と生類憐あわれみの令の所せ為いで信用を得られなかった。

それでも信じた勢力が戦争とばかりに軍隊を率いてきたが、革命派の先頭にいるフィロリアル姿のフィーロを見ると戦意が低下するのか、相手にならなかった。

「ねえごしゅじんさまー、相手がなんか逃げてくよー」

「そうだな」

俺も半信半疑だったんだが、どうやらクテンロウ国内にはいろんな言い伝えがあり、それが俺達の方に有利に働いているようだ。

フィーロの存在は一種の踏み絵みたいな効果があるようだ。

「異国の邪神に捕らえられた神鳥を取り返せー！」

「お？　元気な奴がやってきたぞ」

「フィーロがんばるー！」

「行きます！」

と、まあ、突撃してくる連中もいるんだが、これで敵の目的がラフタリアの命とフィーロの捕縛との二つになった状態だ。

そのラフタリアは桜天命石の祝福関連に大分対処ができるようになってきており、たまにいるアストラルエンチャントを受けて突撃してくる奴に対して、太極陣天命斬を当てることで即座に沈黙させられるようになった。

案外しょぼい連中が祝福を受けているっぽい。

うん。破竹の勢いで革命派の勢力拡張が進んでいっている。

国民も新たな天命を迎え入れる方針だからこその勢いだと思う。

しかも天命側は、俺達が侵攻する先の近くにいる封じられた化け物の封印を懲りずに解くので風評がすこぶる悪い。

あの後も封印が解かれた化け物との戦闘になることがあり。倒すと何かしらの

武器が出てくる。
必ず呪われているんだけどさ。
えーっと今のところ、剣、ツメ、槍やり、斧おのだったかな？
何体封印されているんだか。
最近では斥候に先に行かせて封印を解こうとする連中を捕縛できるほどだ。
天命派の内部事情はガッタガタ。やる気があるのかと言いたくなる。
さて、なんで敵はフィーロを捕らえようとしているのかというと……。
「ねえごしゅじんさまー、なんでフィーロばっかり狙われるのー？」
「ああ、それはな、相手の天命が掲げている大事な生き物がフィロリアルで、国の権威としての象徴が桜光樹なんだと」
「んー？」
やはりフィーロには理解できないか。
もう少しわかりやすく説明してやろう。
「要するになフィーロ。お前の種族とその身体の柄がらがこの国にとって貴重な権力、ひいては神様の象徴の一部とされてるんで、相手側の信仰が深いほどお前の相手をしづらいんだ」
江戸幕府に例えると家紋柄の動物……なんとなく犬が思い浮かぶがそんな扱いになるっぽい。

だから忠義があればあるほど、フィーロを傷つけることができなくなるってわけだ。
「ふーん……フィーロが欲しいの？　見世物は、やー！」
あ、フィーロが今更になって気付いたか。
絆きずな達の世界で見世物にされたトラウマを再発させている。
「大丈夫だ。見世物にされるんじゃなくて、捕まえて贅ぜい沢たく三ざん昧まいさせたいんだろう」
「そうなの？」
「とはいえ、捕まったら囚とらわれの身となってメルティには会えないぞ？」
「やー！」
「ともかくフィーロ。しばらくは人化せずにフィロリアル姿で出歩け。それだけでラフタリアの巫み女こ姿並みにこの国では効果がある」
「それもどうなんですか？」
しかし……利用しない手はないだろう。あっちの天命はどこまで墓穴を掘るんだろうな。
話によると生類憐みの令の始まりは天命がフィロリアルを溺愛したことから始まったそうだ。
こう……俺の知る日本の生類憐みの令だとお犬様だったけど、こっちはフィロ

リアル様ってことなんだろう。
　なんて快進撃を続けていると。
「やっと追いつい――」
「あ、お久しぶりです」
　セインが俺達と合流した。
　セインとは商人と傭よう兵へいの国ゼルトブルで出会った。この世界とは別の異世界出身の眷けん属ぞく器持ちだ。
　セインの本来いた世界は既に滅んでいるらしく、異世界同士を繋つなぐ災害である波に乗じていろんな世界を渡り歩いているらしい。
　確かウィンディア達と一緒にシルトヴェルトの調査をするよう頼んでいたはずだ、そこではセインの宿敵である勢力の匂いがしていたからな。
　他にも何かあったらと、村の方も任せていた。
いざって時には馳はせ参じるみたいなことを言っていた気がするが……結界に邪魔されて転移できなかったってところだろう。
　俺も悪いとは思っていた。するとセインは俺に抱きつく。
「な、何をしているんですか？」
「そうですわ！　尚なお文ふみ様を抱擁するとはどういうつもりですか！」
　ラフタリアとアトラが驚いて注意してくる。

セインはなんか俺に妙に懐いている。
　ただ、元いた世界が滅んでしまっている所為で眷属器が破損しているのか声が音飛びしてうまく喋しゃべれない。
　だからか、宿敵の一人が所持していた翻訳機能を持つ道具を使い魔のぬいぐるみに付けさせて通訳をさせているわけだ。
　使い魔は疑似人格が内蔵されているのか割と流りゅう暢ちょうに喋る。
　この使い魔、最初はラフちゃんと獣人姿のサディナの外見だったが、人語を流暢に喋るラフちゃんには違和感しかないと伝えると獣人姿のキールのぬいぐるみに作り直して喋らせるようになった。
　モデルよりは礼儀正しいな。
　村にいるふんどし犬は今頃何をしているんだろうか。
　ちなみにラフちゃんのぬいぐるみは俺がもらって部屋に飾っている。
　ともかく、セインは俺の護衛をしたいようなのだけど、タイミングが悪く事があってもすぐに駆けつけられない事態が発生している。
「二人とも落ちつけって、というかお前はどうやって来た？」
　ラフタリアは潔癖でアトラは嫉妬深いからな。まずは落ちつかせてセインに尋ねる。
　少なくとも転移系のスキルでは外界との仕切りがあるクテンロウに入ることは

できないし、セインにはシルトヴェルトと村を任せていた。
「無茶ばかり――」
「イワタニさんがあまりにも無茶ばかりするのでシルトヴェルトで話をして船を用意してもらいました」
「ああ、後続の船が到着したわけか」
「はい」
「今度こそ――」
「今度こそ、護衛として役に立ちたいと仰おっしゃっています」
「まあ……なんだかんだで頼りにできないことが多かったからなー」
だが、セインのお陰でシルトヴェルトの近くまで転移スキルで行けたことは大いに評価している。
アレがなければ今頃、やっとシルトヴェルトに到着していたって頃だろう。
大幅に時間を節約できたんだから、十分すぎるほどの活躍はしている。
ただ、セインはそれだけじゃ嫌なんだろう。
「ともかく、セインが追いついてきたが……」
もうあんまり苦戦らしい苦戦はしちゃいないな。
相手の祝福も今のところはラフタリアが断ち切ることができているし、桜天命石の武器のお陰で武器の強化の無効化もある程度カバーしているからこのままいけ

ば勝てるだろう。
「それでも警護をしたいと仰っています」
うーむ……献身的な態度を見せてくれているなぁ。
まあ、満足するまで近くに配置しておけばいいか。
自身限定だが、転移でいろんなところへ飛び回れる身の軽さから色々と頼んでしまったんだしな。
「わかった。気の済むまで護衛をすればいい」
「わかった――」
「了解したとのことです」
前々から思っていたが、セインは音飛びはするけれど実際にはそれ以上に結構喋ってるんだな。
外見からは無口だと思っていたんだが、どうも違うっぽい。
「む、強敵の匂いがしますわ」
「何か奇襲でもされそうなのか？」
アトラが何か察したのか呟つぶやくので顔を向ける。
「尚文様を狙うライバルですわ」
「セインが？」
あ、セインも首を傾かしげている。違うようだ。

そんなこんなでセインが合流して俺達のクテンロウ攻略は進んでいく。
支配域を拡張させつつ、合間を見て狩りに出かける。
もちろん、メインの目的は治安向上……かな？
「しかしクテンロウってホント独自の生態系をしていて、狩りで入る経験値が地味に多いな」
人々に害を成す魔物に集落が襲撃されているのに返り討ちにできない。
魔物の生息域が拡大しているが、その領域を取り戻すこともしなくちゃいけない。
なのに生類憐みの令で魔物を狩れないという理不尽な状況が続いていた。
役人の目を盗んで狩るとかできなかったのだろうか？
そう尋ねると密告が容認されていて、下手な真似ができなくなっていたって話だ。
だから俺達の軍門に下った勢力は挙こぞって魔物狩りをしていて、倒した魔物の一部を素材として俺達に献上してくれている。
クテンロウの魔物はまあ、妖怪みたいなヤツが多い。
鎌かま鼬いたちとか妖よう狐ことかそういう類たぐいの魔物だ。
「そういえばそうね」
サディナが雷の魔法で秒殺していくので苦戦もクソも基本はないのだけど、経

験値が地味に多い。
強さとしては勇者の強化なしでLv50台で勝てるだろうというくらいの相手なんだけど、手に入る経験値がもっと強い魔物を倒した時と同じくらいある。
ゲーム風に言うなら効率が良い魔物……だな。
「でも海で戦う魔物とあんまり差がないわよ？」
「そうだったか？」
あんまり海での戦闘はしたことがない。
そういえば、サディナがLvリセットした際に一人で海に行って随分と上げて戻ってきたことがあったな。
「なんならお姉さんがつきっきりでナオフミちゃんのLvを引き上げてあげましょうか？　って前にも言ったわね」
「……そうだな」
サディナと一緒に海に狩りに行ったらそのままどこかに連れ去られて、とんでもない目にあわされそうで怖いんだけどな。
「サディナ姉さん、よそ見しないでください」
「そうですわ。隙すきさえあれば尚文様を狙っていますわね」
「お前が言うのか？　無駄話をする暇があったら狩りをしておくんだぞー」
狩りをするのも久しぶりな気がするな。

「そう――」
「そういえばシルトヴェルトの方で、盾の勇者様のために魔物の素材を集めるようにと、ラトティル様とウィンディア様が働きかけていましたよ」
セインと使い魔が教えてくれる。
「ほう、それは助かるな」
村の開拓で盾の解放が滞っていたんだ。
クテンロウで手に入る魔物の素材を含めてありがたくもらっておくに越したことはない。
後で樹いつきや錬れんにも渡さないとな。
ちなみに樹は狩りだと勇者の武器同士が反発するのでリーシアと一緒に別行動中だ。
「こんなもんか？」
フォウルが魔物を仕留めて俺の方に顔を向ける。
「アトラよりも真面目にがんばるな。評価するぞ」
「……ふん」
「お兄様、尚文様に評価されて調子に乗らないことですわ！」
「な……」
真面目にがんばってるから評価したのに嫉妬されるとか理不尽だな。

「ではいきますわー！　ラフタリアさんにもお兄様にも負けませんわよー！」

そう言いながらアトラはどこかへと走り去っていく。

「お、おう！」

あ、なんか嬉しそうにフォウルが答えた。

それでいいのか。うん、この二人の扱いが大分わかってきたぞ。

どっちかというとフォウルを評価しておけば、アトラがその分がんばって前に出るみたいだ。

「あら？　狩りの勝負？　お姉さんもがんばってるわよ」

「まあ……魔法の使用を含めてサディナが一番狩りをしてるな」

土地勘があるのか、サディナが出てくる魔物を一番駆逐している。

そんなふうに狩りによって近隣の治安を向上させると、占拠した町や村の連中が俺達に揃そろって頭を下げた。

「ありがとうございます！　革命派の天命様一行のお陰で魔物の被害が抑えられると思います」

「そう簡単に生態系を弄いじることはできないとは思うが、当分は大丈夫だろうな」

魔物の被害には目を瞑つむり、人が魔物を殺したことばかり罰するというのもどうなんだろうか……。

国民もそのことを大いに考えさせられただろう。
なんて感じに数日が過ぎ、クテンロウの三分の一を支配下に置くことができた。まだクテンロウに入ってそんなに経っていないというのに……このスピート支配ぶりには俺も驚きを隠せない。直接潜入して敵天命の首を取る作戦よりも早く進んでいる気がするぞ。
「絆きずなの世界で国外脱出のために旅をしていた時のことが思い出されるな」
和風系の国って意味では共通点が多い。
「桜光樹があるかないか……和風ラフタリアランドであるかないか、か」
「ラフー」
「まだ言うんですか？」
「だってラフちゃんみたいな置物が結構あるじゃないか。そう思わずにはいられないだろ」
「ナオフミちゃんはホント、好きねー」
あの置物、土産にしたいな。割と本気で考えている。
「ただ、旧都とやらに近付くにつれてフィーロみたいなのが増えてきたな」
「そうね。フィーロちゃんみたいな、天命の掲げる神鳥様の像ね」
「実在しないと思われる色合いがってことなのか？」
フィーロって珍しい色合いなのか？

本人の購入金額は銀貨一〇〇枚だぞ？
サディナがフィーロを見ながら答える。
「いないわけじゃないけど、各地の伝承とかで伝えられてる姿が実際のフィロリアルとはちょっと違うのよね。そういう意味ではフィーロちゃんの姿と色がピッタリなんでしょうね」
その実態は勇者が育てたフィロリアルってことなんだがな。
「フィトリアが過去にこの国に到来したことがあるとかじゃないのか？」
あれだ。過去に姿を見せているからとかで絵には残ってて、桜光樹の花の色から白と桜色に色変更された感じ。
「フィトリアの声は聞こえないよ？」
フィトリアはフィーロを媒介にこちらを見ている時がある。
それが今は発動していないようだ。
国の結界の所為か？
どちらにしてもフィーロの姿と色合いが、相手にとって非常に困るってことなのは変わりないしな。
「絆達とはもう会わない可能性が結構高いんだよな。機会があったら、連れてくると面白そうだ」
グラス達なら顔を出すこともありえなくはない。

その時にラフタリアが支配した国を見せてやるというのもいいかもしれないな。
グラスのスキルの逆式・雪月花とか雰囲気があってるし。
「景色は良いですしね」
アイツら元気かなとは思う時はある。
なんていい気分での帰り道、女好きのバカこと元康二号がナンパしてる光景が目に映る。
「お？　お嬢さん、お茶をしませんか？」
コイツは一体何なんだろうな。
「ゲ！」
俺達が奴に近寄ると、ナンパされていた女が頭を深々と下げながら立ち去り、奴がこっちに目を向ける。
「親父はどこだ？」
「は！　エルハルトの目を盗んで抜け出すなんて造作もない」
「お前な――……ツケで遊んでたら縛り上げるぞ？」
「ふふん」
つと、元康二号はクテンロウの通貨を俺の前に掲げた。
金は持ってますってか？
サッとかすめ取る。

「あ、何すんだ！」

「どうせ親父の財布からかすめ取ったってところだろ」

金遣いの荒そうなコイツが金を持っているというのは大いに怪しい。

話によると港町で随分とツケをしていたらしいし。

俺の指摘に元康二号は視線を逸らしながら口笛を吹く。

やっぱりそうか。後で武器屋の親父に返しておこう。

「とりあえず……」

俺は引き連れている面子を確認する。

女にやらせるとコイツが喜びそうだな。

「フォウル、ガエリオン、コイツを連行しろ」

「キュア！」

俺の命令にガエリオンが敬礼して頷うなずく。

「なに!?」

フォウルが不快そうに答える。ついでに元康二号もだ。

「女に連れていかせないとはどういうことだ！」

その反応にフォウルは事情を察して頷いた。

「わかった」

「帰ってきたらアトラと遊びに行っていいぞ」

「行ってくる」
そういや、先ほど出店でかんざしを売っていて、それを凝視していた。
きっとアレを買おうと考えていたんだろう。
買えるくらいの金額は小遣いとして渡している。
「キュアア」
ガエリオンが元康二号を羽交い締めにして襟首を咥くわえ、歩き始める。
「くそ！　放せ！　仮に盾の野郎に捕まったとしても美少女が連行してくれるからいいやと思ってたら、野郎かよ！　あの野郎、男もいけるのか！」
「なに言ってんだ！」
まったく、元康二号は懲りないな。そんなにも女が好きか。
「お兄様が帰ってきても尚文様と一緒にいますわ」
「いや、フォウルと遊んでこい」
「嫌ですわ」
……こっちはこっちで面倒だな。
「まったく……」
「ん」
セインが元康二号を指差しながら自分の武器を見せる。
ああ、桜天命石のハサミを作ってもらったんだったか？　コピー技能はあるら

しい。
　元々は桜天命石の刀だったんだっけ？
　セインがハサミを見ながらうっとりしている。
「腕はとても良い方だと仰っています」
「まあな……」
　確かに武器屋の親父の言う通り、作る武器は一級品で手も早い。
　奴が持っていた桜天命石はもう在庫がないので盾として使っている分が最後だ。
「ラフー？」
「そういえば――」
　セインがラフちゃんを指差して何かを呟く。
　最近音飛びが酷ひどくなって、ぬいぐるみなしじゃまともに話ができないな。
　眷属器の調子が悪くなってきているんじゃないかと不安になってくる。
「巨大ラフちゃんぬいぐるみの作成をどうするかと仰っていますよ」
「うーん……」
　あ、そういえばラフタリアに言い忘れていたな。
「あの？　何を作ろうとしているんですか？　初耳なんですけど」
「もう少しラフちゃんが大きくならないかという俺の願望だ。セインの必殺スキルにある非常用の使い魔の造形をどうするかって話が出ていてな」

巨大なぬいぐるみを操作するスキルがあるらしい。
喋らせないことを条件に俺は許可を出そうかと思っている。
「却下です！」
「ラフー？　ラフラフ」
ラフちゃんの方はそんな俺達のやり取りを見て可愛らしく首を傾げている。
「ともかく、そろそろ次の作戦のために町の司令部に戻るとするか」
強引に話題を逸らす。
俺達はその足で町で一番大きな屋敷に戻る。
「修行もちゃんとしないといけませんしね」
ああ、そういや変幻無双流の修行も中途半端な状況だったもんな。
いい加減、俺自身も修行とかしておきたいのは山々だけど、こんなにあれこれと問題が付いて回ってくるんだからしょうがないだろ。
「リベレイションクラスの魔法の習得ができればもっと戦闘が楽にはなると思うんだが……」
オストと一緒に唱えて以降、全く使えた例ためしがない。
いや、もう少しで掴つかめるんだが……何かが足りない。あの感覚に近づければいいはずなんだが。
どちらにしても来るべき鳳ほう凰おう戦までには習得しておきたい魔法だな。

なんて話をしていると革命派の首脳陣が来たので今後の方針の打ち合わせを始める。

「旧都がもう目前です。そこに至れば、戦況は更にこちらの優位に傾くかと思われます」

「前にも言っていたな」

ラフタリアに正式な天命の継承の儀を行うことができる場所なんだったか。

「ラフタリア様が祝福を施せば、傘下の者達は一騎当千の活躍を致すと思われます」

「そうか」

「ただ、問題点ともいえるのですが、異なる桜天命石同士の結界は反発し合うと

の記述が過去の争いの記録にありますので、相手も必死に妨害をしてくるでしょう」
「もともとあっちだけが常に展開していたのを無力化できるんだから悪い手じゃない。そもそもラフタリアに祝福を無力化されていて実質意味はなくなりつつあるわけだしな」
勇者の武器の力を無効化させる武具の類たぐいさえ警戒すれば、後はごり押しができそうな分、戦いやすくなる。敵専用だったから面倒だっただけだ。
「しっかし……それだけ大事な拠点を捨てて東に首都を構えるって、どんな発想なわけ？」
「一応、東にも立地的な長所があり、過去の天命様の跡目争いで使用された地なので損失自体は……」
うーん……どうも頭の中で日本の歴史と被かぶってしまうな。
旧都が京都に思えてきた。概おおむね間違っていないのかもしれない。
何度も思うけど、国の形がかなり違うけどな。
「これまで破竹の勢いで進んでこられたのも首都となっている地から離れていたためで……旧都を支配してからが本番となります」
「どっちにしてもやることは変わらん。このまま進んでいく」
「は、はい……」
ラフタリアは困った顔をして頷うなずいた。

自分の所せ為いで大きな争いが起こっているとか思っているんだろう。
あのな？　攻め込んだのは俺達だが、ラフタリアの命を狙い続けるなんてふざけたことを仕出かし、いつまでもやめないのはあっちなんだぞ？
「停戦交渉の類をする気はあっちにないんだろ？」
「はい。どうやらあちらの首脳陣のほとんどがこちらのことを与くみしやすい相手と認識しているとのことで」
「現実が見えていないいんじゃないのか？」
「ラフタリア様を血の薄まった天命様と侮っているためであると思われます。これも全てあちらの天命の後見人をしている毒婦、マキナの愚かなやり方の所為でしょう」
「そういや毒婦って言っていたな。随分と愚かな奴みたいだな？」
俺の言葉に司令部一同が頷く。シルトヴェルトの連中もなんか同情してる？
「元々はシルトヴェルトから布教のためにやってきた宣教師でしたが、先々代の……ラフタリア様の祖父に当たる方に気に入られ、妾めかけとして政まつりごとに口を出すようになり、やがて国の実権を握り始めたのです」
「シルトヴェルトから来たというのに、愛国心の欠片かけらも今はなく、交易に重い税を課していました」
うわー……嫌な女の気配が。シルトヴェルト側も面白くないみたいだ。

「天命様の一族が暗殺された事件の陰にいたのではないかと囁ささやかれましたが、証拠もなく……唯一残された、今の天命の後見人に……」
「天命の拠点を東に移したのもそのマキナの鶴の一声だと言われております。旧都は地形的に空気が悪いと……」
「で？　そいつの子供とか孫とかなのか？　今の天命は」
「……いいえ、マキナの子供も毒物で暗殺されて……なので犯人ではないであろうと……」
「不謹慎だが天命の一族を全滅させればこんなことにはならなかっただろうに……」
「ナオフミ様」
ラフタリアに睨にらまれてしまった。
まあ、王族がいなくなって鎖国が廃止されたらその毒婦も困ったんじゃないか？　遠縁のラフタリア一家が天命の座につけば、自分が排斥されるのは目に見えているしな。
うーむ……ま、バカ天命の内情なんて知らんがな。
「お姉さんをよく蔑さげすんでいた人よね。覚えてるわー。今でも国を牛耳ってるのね」
サディナも知ってる相手か。

「後は……現在の水竜の巫み女この存在でしょう」
ああ、確かサディナが先代の巫女とか何とかだったか？
「天命に祝福を施された水竜の巫女であり、殺さつ戮りくの巫女が刺客として現れることは間違いないでしょう」
「あらー？」
元水竜の巫女であるサディナが声を出す。
「先代としてはどうする？　というか……水竜が俺達側についた手前、立場的にどうなんだろうな？」
「相当、怒ってるんじゃない？　信じていた神様の一柱に裏切られたって感じで」
完全に他ひ人と事ごとだな。
「にしても、天命様の祝福を受けているってことは当代の水竜の巫女は優秀のようね。お姉さんはしてもらえなかったし」
へえ……サディナは施してもらえなかったんだったか？
今の天命は大盤振る舞いをしてるから別に羨うらやましがる必要はないと思うぞ？
「ある程度情報くらいはあるんだろ？」
「は、はい。当代の水竜の巫女様は先代の巫女様の妹だと知られております」
「あら？」

　サディナが何かキョトンとした顔で首を傾かしげている。
「初耳ね。あの人達がお姉さんの妹を産んだの？」
　あの人達……随分と距離のある親子関係のようだな。
「先代の国外追放後に生まれた方です。ただ、巫女の里に関しては情報が乏しいので何とも……僅わずかな証言では先代に匹敵する人材を作り出すために人道的ではないことをしたとも……」
「あの人達、がんばっちゃったわね」
　……がんばっちゃったわねって、妹がいることに対しての表現にしては悲しいな。
　どんな家庭環境だったのだろう？
　あれ、なんだろう。
　俺も弟相手に似たような感情を持っていた気がしてきた。
　まあ、弟の方が学歴も良いし、親の期待を背負っているけどさ。
「妹は兄を超えてなんぼですわ」
　……アトラは無視だ。考えが逸それた。今はサディナの妹の話を優先しよう。
「優秀すぎる姉の代わりか？」
　歪ゆがみ切った一族だな。まあ、水竜に裏切られて風前の灯ともしびだろうけど。

「強さで先代の水竜の巫女様に負けないよう、弛たゆまぬ努力を続けている方だと言われております」
「ふむ……」
年齢を逆算するとラフタリアと近いんじゃないか？
サディナに詳しく聞かないとな。
「経歴で判断するとサディナの方が上か？」
「武勲や国の仕事に関しては先代の巫女様の方が優秀です。ですが、神事に関して言えば先代よりも優まさるところもある方だとも……言われております」
「あらあら」
「例えば？」
「天命様の元にいた神託を司つかさどる巫女と神主達が虚言を弄ろうしていることを見抜き、排斥に成功しております。今では数少ない真の神託の所持者だと」
「あら～凄すごいわね。お姉さんの後任は神託持ちですって」
「神託？」
初めて聞く単語だ。
「巫女や神主が感じることのできる……特殊な才能とでも言うのかしらね？」
「はい。クテンロウでは神託の技能を持つ者が優遇される傾向がありますが……先代の水竜の巫女様は所有しておりませんでしたね」

「先祖の声を聞くこととかできるらしいわ。天命様に従う巫女や神主が結構持ってる能力でねー、当時、お姉さんは才能がないことを気にしてたわね」
「へー……霊感か何か？」
ラフちゃんを頭に乗せれば幽霊とか見えるぞ？
「お酒を飲むと一種のトランス状態になって普段は行使できない力を発動させられるのよ。とっても強い合唱魔法を一人で唱えられるらしいわ」
そりゃあ凄いな。でも霊感じゃないんじゃないか。
ただ、サディナが才能がないというのはおかしいだろう。
「ただの妄想だろ。それこそ酒を飲んで頭のネジが飛んだ状態で魔法を偶然上手く使えたとかさ」
酒類には魔力の回復効果がある。
何かしらの要因で意識的に威力が跳ね上がる暴走状態になれる奴がいたんだろう。
「なんですかその怪しげな能力の話は……」
「ラフー？」
ラフタリアも眉を寄せて尋ねてくる。
「私もナオフミ様と同意見です。それこそお酒を飲んで泥酔した時に変なことを口走っちゃう状態なんじゃ？」

「あら｜、二人とも。ラフタリアちゃんのお父さんと同じことを言ってるわ」
「天命の血筋の奴が言ったんなら間違いないな」
「そう言われると、何か安心するわね」
サディナが持っていない怪しげな才能を所持した完璧な巫女ってか？
ただ、クテンロウの重鎮の話から察するにサディナも負けず劣らずの活躍をしていたようだな。
しかし……こんな疑い方をするなんて、ラフタリアも俺に似て疑り深くなってしまったのかもしれない。
嬉しいような、汚れてしまったような、悲しさがあるな。フォウルの気持ちが痛いほどわかるぞ。
「なんでナオフミ様がそんな切なそうな顔をしているんですか！」
「これも成長と思うべきなのかもしれないな」
「私、何か変なこと言いました!?」
ラフタリアが疑り深く育ってしまった。反省しなきゃいけないかもしれない。
かといって俺はそう簡単に信じないけどな。
「ともかく、そいつらと交戦することになるってことだな」
「はい。どうかご注意を」
「とっても楽しみね｜」

「できれば話し合いが通じる相手だといいな」
本当は国の腐敗を憂いていて、協力してくれることを祈るしかない。
水竜に裏切られたのではなく、陰で水竜の方針に従っているとかな。
「まあいい。俺達は進むしかないんだ。やるしかない」
正直、こっちの傘下に加わろうとする連中が多すぎて、リストを作るのが大変な状況だ。
追い風って凄いな。相手の天命派閥が愚かなだけだけどさ。
「攻城戦とかを想定していたんだが、内部分裂による開城が多いこと多いこと……」
国民や領主は戦争を望んでないのに、国の上層部が封印された化け物を解き放って国民からの信用を失っているとか……愚かにも程があるな。
もし相手が腰を据えた持久戦に持ち込んでれば、俺達は波に挑まないといけなくなる分、強引な進撃が必要だったのにな。
「ま、今のところはラフタリアとフィーロのコンビに敵かなう者はいないって感じだな。サディナの妹とやらが出てきたら要注意だけど」
「けれどナオフミちゃん、この先が厳しくなるのは本当なのよ？」
「わかっている。ともかく旧都とやらに赴けばいいんだろ」
「そうね、ラフタリアちゃんの両親の思い出の場所とか、色々とあるから一度は

行くといいわね」

「お父さんとお母さんの思い出の場所……」

ま、嫌なことも多いが、ラフタリアのルーツを知ることができるのは嫌なことじゃない。

それこそ、ラフタリアが望めば世界が平和になった後にこの国を任せていくのも視野に入れるべきだしな。

「さて、じゃあ夜まで稽古をした後はラフタリアの威光を広めるために夜間のパレードとしゃれこむぞ。アトラはフォウルが帰ってきたら買い物に付き合えよ。俺の命令だ」

「く……お兄様、あの鍛か冶じ師を取り逃してどこまでも追いかけるといいのですわ。そうすれば私は尚なお文ふみ様と楽しい時間を過ごせます」

兄の失敗を願う妹というのは見たくないなぁ。俺も弟がいるから切に思う。

まあ、外そと面づらを気にする弟だったけどさ。

というわけで、俺達は会議を終わらせて稽古を始めた。

## 六話　気の運用

最近では毎日朝に少しずつは稽古してるけど、本格的なのは久しぶりだな。
稽古をしていると樹いつき達も帰ってきて加わる。
そういやリーシアは変幻無双流を大体マスターしているから稽古を見てもらうのも手か？
ババアはいないし、師範代くらいの知識はあるだろう。
俺はアトラとラフタリアの稽古を見ていた。
サディナはフィーロを相手に組み手をしている。
フィーロは俺の命令を聞いてフィロリアル形態、サディナも獣人姿だ。
「はぁ！」
アトラが両手に魔力っぽいものを凝縮させてラフタリアに放った。
それをラフタリアが弾はじく。
魔力の塊だと思っていたけど、何か違うものだな。
アレは魔力じゃない。
気か？……まさか、あのアトラから出ている力の流れが気なのか？

「行きます！」
　ラフタリアが木刀に力を込めて何かで膜を張って、アトラが放った何かを弾いて飛ばした。
　……おい。なぜか、気とやらがわかりはじめてきた。
　ど、どういうことだ？
　俺は他人の戦いを見て、強くなる！
　なんて言うと思ったか、ボケ。何回アトラに突かれたと思ってんだ。きっとそれが原因だ。
　アトラと一緒の方が習得が早いとババアが言ったのはこれか!?
　確かにアトラを見ているとわかりやすい気はする。
　これまではゲームみたいに盾で色々と習得できたけど、こうして修行で技能を習得するとか、俺の身体の方も案外、ゲームっぽく成長している。身体によくわからない変化が起きているのは不安でもあるが。
　ともあれ、いきなりは無理そうだが訓練すれば防御比例攻撃への対策が取れそうだ。
　重要なのは、体内に力の流れを作ることだな。
　柔らかいもクソもない。
　相手の攻撃が暴れ出す前に流れている力を乗っけてやればいいだけだ。

柔らかい部分を作るのは初心者の方法だな。
ババアもわかりづらいことを言いやがって……。
「アトラ、ラフタリア」
「はい？」
「どうかしました？」
二人に声を掛けて、気が見えてきたことを説明した。
なんか負けたような気がするのはなぜだろう。
修行で習得しようと思っていたのに、いざその入り口が見えたら何かを失った気がする。
「それは良かったですわ」
「リーシアさんに確認してもらいましょうか？」
「そうですわね」
ババアに太鼓判を押されたリーシアに見てもらうのが、今のところ確認する唯一の方法か。
「ふえ？」
そのリーシアは樹の訓練の手伝いをしている。
屋敷の庭にある大きな岩を樹が一心不乱に指で突いている。
そういや以前そんな練習したことあったな。

一応、命力水を確保はしているから習得は早まるとは思うんだけどさ。

「あら？　ラフタリアちゃん達の組み手は終わったのかしら？」

「と――！」

ガツッとフィーロの蹴りを往いなしているサディナが尋ねてくる。

「ああ、なんか……周りの連中からもやっとした何かが見えてきた」

「へー、お姉さんも覚えようかしら？」

「お前が覚えたらとんでもないことになりそうだな」

「サディナさんは見えはしないですが、無意識に使ってますわよ？」

「あら？」

アトラがさりげなくサディナに教える。

そうなのか？

「意識的にできるようになったら……強敵ですわ。絶対に教えたくないですわ」

「それもどうなんですか？」

「ラフタリアちゃんが教えてくれるかしら？」

「あ、はい」

なんて話をしているとリーシアが俺の方にやってくる。

「えっと、では師匠から教わった力の使い方をある程度教えますね。とはいってもアトラさんが大分見て覚えてしまっていますが」

そう言ってリーシアが俺に向かって半透明の武器を構える。
俺はその武器に混ぜられた力の流れをできる限り受け流そうと試みる。
「……回避はあっても守りの型がないな」
おそらくは変幻無双流はこの力を攻撃と察知に使っているんだろう。
避けることはあっても、防御に気を使っていない。防御比例攻撃も逃す方法でしかなく、大きく受け止める術ではない。
受けた場合も逃がすことに重きを置いていて、受け止めることを前提にしていない。
俺の戦い方で利用できるモノは少ししかない技術になりそうだ。
スキルにも応用が利くらしいけどさ。
「じゃあ行きますね……よく確認してくださいよ？　エアストスロー！」
リーシアが投とう擲てき具に力を込めて俺に投げてくる。
おお！　投擲具の中に気が混じっているのが見える。
俺の盾に命中すると同時に盾を伝って俺の体の中に流れてくる。
まだ未熟な俺はそれを強引にＳＰや魔力を使って体外へ放出した。
衝撃が俺の体を伝う。結構きついな。
ちなみに気の流れが見えるようになってから周りの連中を観察していたのだが、おかしい奴は俺以外にもいる。

弓の勇者の樹だ。後はラフタリア、リーシアだな。
ん？　リーシアは……凄すごく微妙。
言ってはなんだが、気の流れがない。いや、ないわけじゃないんだが……薄い。
リーシアが無双活性をしている時は、気がよく見えなかった俺にも何かを纏まとっているように見えたにもかかわらず今は薄いのだ。何か謎があるのだろう。
似たようなのだとセインもか？
いや……セインの場合、武器の方が弱々しいだけで本人は力がある感じだ。
どうなってんだ？
でも、リーシアはあのババアが逸材とか喜んでいたんだから、どうなんだ？
自身の能力を強化する無双活性だったかがあるんだしな。
見えるようになったということは、ラフタリアやリーシアからもある程度は教わることができる。
それから、俺は防御力が極端に突出している所せ為いで気の流れが変だということがわかった。
守るための力が集約していて、下手に押し込めば破裂しそうになっている。
これでは狙ってくれと言っているようなものだぞ。
気、というか魔力や力の流れ、とも言えるが。
なるほど、変幻無双流が強いと言われる意味が少しは理解できた。

会得すれば今後に役立つ。
けれど、まだこれは入り口に過ぎないのはヒシヒシと感じる。
「先ほど、ナオフミさんが守りの型がないと仰っしゃっていましたが、はい。師匠から教わった変幻無双流には守りではなく回避、受け流ししかありません」
「やはりそうか」
「師匠の話では存在したかもしれないのですが、伝わっていないそうで……ナオフミさん用の技は編み出すしかないと思われます」
「なかなか不便だな」
やっと気が見えるようになったというのに……まだ先は長いということか。
「凄いですね。後はアトラさんとラフタリアさんとで色々と実験できるようになると思いますよ。イツキ様もいずれはできるようになりますよね？」
「はい……がんばりましょう」
相変わらず樹は台詞に抑揚がないな。早く呪いが解けるといいんだが。
クテンロウには呪いに効くものとかないだろうか？
後で聞いてみるか。
「じゃあ……まだ時間があるし、稽古を続行するか」
「アトラー！」
「キュアアア！」

そこにフォウルがやってくる。ガエリオンもだ。
どうやら俺の命じた仕事を終わらせてきたみたいだな。
「あの野郎、少しでも目を離すと器用に逃げるから連行するのに苦労した」
「最悪、死なない程度に痛めつけてもよかったんだぞ?」
それくらいしなきゃ逃げそうだ。
「いや、それでも逃げるなアレは……間違いない」
フォウルの返答に俺もなんとなく同意してしまう。
逃げ足はかなりのものだ。あと、地味に強いのがな……。
親父相手に息抜きと称して稽古して遊んでいたのが印象深い。
「さ、アトラ、買い物に行くぞ!」
「嫌ですわお兄様。今稽古がいいところなので後にしてくださいまし」
「な、アトラ! 約束が違うぞ!」
確かに……今、いいところだから稽古の仕上げをしたい。
約束したのは事実なので、後で絶対に行かせるけどさ。
「お兄様も見ておくといいですわ。師匠の教えだけで強くなどなれませんわよ?」
フォウルは一瞬、ムッとしたが黙って座りこんだ。
こいつもなんだかんだで戦うのは好きみたいだから、稽古自体をやめさせる気はないみたいだな。

例えは変だが、勉強している子供に遊びに行こう！　などという大人はそうい
ない。
「少しだけだぞ」
「お兄様にしては殊勝な心がけですわ。では尚なお文ふみ様、行きますわよ！」
「よし！　来い！」
「はいですわ！」
アトラの突きが俺の盾に命中する。
膨らんだ風船を内側から爆発させるような気の流れだ。
これを体内から流せるように訓練していく。
そうして何度もやっているうちに、ほぼノーダメージで受け止めることができ
るようになった。
やり方さえわかれば応用の幅は広いし、精度を上げられそうだ。
これでやっと、ラルクやグラスの防御無視や比例攻撃を無効化できるようにな
ったと思っていいだろう。
あとは……力の流れを上う手まく使う方法はないだろうか？
攻撃手段として模索してみたのだけど、どうも俺の攻撃力のなさは折り紙つき
で、一向に上手くいかない。
アトラと同じく、相手の体の中に魔力を凝縮して放ってみたのだけどやはり意

味がなかった。

……俺の場合、攻撃にだけ使えない可能性が高いな。

おそらく俺の、盾の勇者の気、あるいは魔力がそういう性質を持っているんだろう。

なので戦闘判定をされない状態でも色々とやってみる。

「……確かにかなり変則的な戦いだな。師匠のところじゃ見れない」

「そうですね。ナオフミ様は攻撃ができないので守るために力を捻ひねるしかできません」

「キュアアア」

「ラフー」

なんて感じに夕日が沈むまで俺達は稽古をしたのだった。

「さて、そろそろ稽古をやめるか」

「そうですね。ナオフミ様も大分使えるようになったんじゃないですか？」

「まあな。これで何があっても多少は戦えるようになっただろ」

「やりますわよ！」

どうにか習得できたのは収穫だな。

「じゃあ行くぞ、アトラ！」

「ああ、尚文様！　お兄様の魔の手から救ってください」

「アトラ、フォウルから逃げたら明日は近寄ったら怒るぞ？」
「そんな！　く……わかりましたわ、お兄様、どんなところであろうと私がぶち破りますわよ」
「何を言っているんだ、アトラ⁉」
フォウルに連れられてアトラが歩いていくんだが……どうしてこうもアトラは血の気が多いんだろうな。普通に観光してこいよ。
「で、次はラフタリア達だが……まずは汗を流したほうがいいだろうな」
夜のパレードらしいので、それまでにラフタリアとフィーロは着飾らせよう。
「あの……毎日やらされていますが、今日もやるんですか？」
「そうだ。というわけでラフタリアとフィーロは優先的に体を洗ってから着替えるように」
「はーい！　さ、行こ、ラフタリアお姉ちゃん」
フィーロが頷うなずいて人化しラフタリアを屋敷の風呂場に連れていく。
「お姉さんもご一緒するわよー」
「ああはいはい。行ってこい」
「ラフー」
ラフちゃんとサディナがそんな二人についていき、樹とリーシアはまだ訓練を続行している。

「キュア？」
「ガエリオン、お前もな？」
水竜の眷けん属ぞくって扱いで大義があるように見せかけるためにガエリオンも同行させている。
まあ、稽古をしていたわけじゃないし、フィーロのような手間をかける必要は……ないか。
とはいっても、ガエリオンもある程度察したのか、身繕いを始める。
ウィンディアがいれば手伝ってやれるんだろうがな。
それから……セインがジッと俺を見ている。
なんだ？
「なるほ――」
「何を鍛錬しているのかはわかっていましたけれど、開眼しようとしていたんですねと仰ってます」
開眼……確かに、そう言った方が正しい気がする。
「セインはできるのか？」
「にてい――」
「似て非なる力だけどできるそうです」
そう言ってセインはハサミを取り出して気を込めている。

ん？　僅わずかにハサミの力が増しているな。
もしかしてそうやって騙だまし騙し使っているのだろうか？
……かなり大変そうだな。
実は強いんだけど武器の劣化で弱っているってことなんだろう。
「守りの型、知り――」
「守りのやり方を知りたいかと聞いています」
「知っているのか？」
俺の問いにセインが頷く。
「こう――」
ハサミを守るように構えている。
いや、それだけじゃわからないんだが……。
「では実践してみせますね」
と、キールぬいぐるみがセインに向かって突撃していく。
セインはキールぬいぐるみに向かって手をかざし、その手を薙なぐように動かす。
それだけでキールぬいぐるみが釣られて突進が逸それた……？
「受け流し――」
「ラフタリアさん達が習得している、ナオフミさんの使う力でもできる基礎の回

避の型だと思うのですが、どうでしょうか？　だそうです」
「言ってることがかなり違うような気がするんだが？」
　攻撃の受け流しを気だけでやるってことか。
　確かにアトラ辺りがやっているのを見るな。
「後は――」
　で、今度はキールぬいぐるみが凄く弱々しいけどアトラと同じように気を放つ攻撃をしてみせる。
　ただ、明後日あさっての方角に飛んでいってるぞ。
　セインはそこじゃない。
　が、気の玉が不思議な軌道を描いてセインの方に軌道修正して辺りを飛び回る。
　その玉が一ヶ所に集まった後、セインがそれを掴つかんで投げ返し、その玉はキールぬいぐるみの脇を飛び越えていった。
「魔法も――」
「魔法さえも同じように集められます」
「ほー……」
　そんな手段があるとは知らなかったな。参考にしておこう。
「まだまだあるけど――これを覚えてから――」
　ふむ、セインからも色々と教えてもらえそうだ。

まだ入門階段だけど、大きく踏み出したような気がする。
「ふぇぇ……未知の技を見せられましたぁ」
リーシアが驚いた表情でこっちを見ている。
確かにな。セインは色々と知っているみたいだ。こっちの世界ではできないことがあるかもしれないけどな。
「それじゃ、夜のパレードの前に飯でも食うか」
ぐー……とセインの腹が鳴った。食いしん坊な奴だ。
そういえば俺の村に来た時も飯をもらおうとしていた。
俺はそう思いながら苦笑いをして屋敷に向かって歩いていくのだった。
フィーロが、パレードに参加することの条件として俺のお手製料理が食いたいと駄々をこねるので、ここ最近は俺が料理を作っている。下した拵ごしらえは屋敷の手伝いの者が色々としてくれているけどさ。
「今日は良い魚を仕入れていますよ」
と、まだ桶おけで暴れる魚を見せられる。クエみたいな大きな魚だな。
先日は鯛たいみたいな魚が出てきた。絆きずなが釣りたいと騒ぎそうだ。
ビチビチと桶の中で魚が暴れている。これは元気すぎるな。
「とりあえずトドメを刺して……」
キリで頭を突いて絶命させる。

そういえば釣った魚とかは仕留めることができるんだよな。
経験値は入らないけど。
「血抜きをしてから……」
ぼんやりと何を作るか考える。
目利きとか毒物鑑定とかの技能を所持しているから危ないものではないことは判断できる。
イカとかの正しい処理の仕方も知っているし……。
クテンロウは和風な国だからシンプルに刺身とかが好まれる。
とはいえこれだけ大きいと刺身以外にも色々と作れそうだ。
やっぱ鍋とかがいいか？　兜かぶと焼きとかもできそう。蒸し物もいいな。
包丁を滑らせて切り分け、骨は煮出して出だ汁しを取ろう。
って料理をしていると屋敷の料理人達が俺を凝視している。
村の料理担当の奴隷と同じ目で見ているな。
確かラフタリアの話では俺のやり方を観察して真似しようとしているんだったか？
クテンロウは米食も主流なんで米を研いで炊き上げるか。
一連の流れを確認して、うん……この辺りは手伝いの者に任せられるな。
火の魔法があるのは便利だ。

これだけだと面白味もないから、何か変わった料理を作りたいが、どうしたものか。

持ち帰った魔物の肉の脂肪分を深めの鍋で溶かした油で……フライでもするか。

そういえば、気を覚えたんだから何かできないものかな？

包丁を持つ手に……気を纏って切ってみた。

「わ！」

俺の料理を見ていた屋敷の料理担当が声を上げる。

そりゃあそうか。なぜかまな板まで切れた。どこかの通販番組かってーの。

「凄い……まな板まで料理の材料に」

「するわけねえだろ！」

何？ 俺は木材まで料理するとか思われているわけ？

確かにフィーロなら机まで食いそうな気はするけど、さすがにそこまではできねえよ。

しかし……これ、僅かに切っただけで結構な気と魔力が持っていかれた。

ラフタリアやアトラ、リーシア達はこれを常時使っているのか？

これを使いこなせるリーシアは……エクレールもそうだが、変態染みているな……。

体に気を流す練習に良さそうだと調理中に色々と試した。

やがて料理を終えて、風呂から上がって待機しているフィーロ達の方へ持っていかせる。
「それじゃあ食えよ」
「いただきます」
「いただきまーす！」
大きな部屋に料理を持っていき、部屋にいたみんなに振る舞う。
飯を食い終わったらパレードだな。
「わー！　今日のご飯、凄く美お味いしいよー！」
「キュアキュア！」
フィーロとガエリオンがこれまでにないくらい目を輝かせて言った。
「確かに……普段に増して美味しいですよ」
ラフタリアさえも示し合わせたみたいに同意している。
「お酒が進みそうね」
「大事なイベントが控えているんだ、飲むなよ」
「わかってるわよー」
サディナも楽しげに飯を啄ついばんでいる。
「美味しい」
セインもだ。

なんか今にも泣きそうな顔をしている。音飛びせずに聞こえるって珍しいぞ？

「そうか？」

「ええ、何かしたんですか？」

「一応、実験をな。だが……かなり疲れるからこれからは難しいぞ」

「集中しているように見えました」

料理を見ていた奴がラフタリアにそう報告する。

「その……失礼を承知で言いますと……えっと」

「適当に作っているように見えるんですね？」

ラフタリアが何か察したように答える。

「にもかかわらず、よく観察するときめ細かく料理をしている。見ている分には簡単にできそうなのにできない……それがナオフミ様の料理です」

「そりゃあ普段は手を抜いているからな」

俺は手を抜いていい部分は基本的には抜いている。

「料理に関してはナオフミ様の手を抜いているは、私達の手抜きとは違います」

「そうですね。確かに尚文さんの料理はとても上手だと思いますよ」

樹もパクパクと貪むさぼりながら応える。お前もか。

というか、自分の意見を言うってことはカースの後遺症が多少回復してきたのかもしれない。

「手を抜いていいところと抜いちゃいけないところの区別くらいは付けれるだろ」
「そんな次元じゃないと思いますが……って問題はそこじゃないです。そんなナオフミ様がもし集中して作るとなると、どれほどのものができるのか」
「いや、集中っていってもそっちの集中はしてないぞ」
手抜きなのは変わらないぞ？
「むしろ料理に……」
気を入れ込んでると言ったらどんな顔されるんだろ？
よく考えたら自分の体から溢あふれる何かを食い物に流し込んだことになるんだよな。
場合によっては食中毒とか色々な意味で危ないんじゃないか？
あと、単純にちょっと汚い気もする。
「な、何をしたんですか？」
ここでやめたら不吉に思われるか。
「美味しくなる魔法の薬とかがあるのでしょうか？」
「わかりません。ですが……尚文さんなら持っていても不思議じゃない……かもしれません。あるのかな？」
リーシアの質問を樹が俺に聞き返してくる。
しょうがない。素直に白状しよう。

「気を入れてみた」
「料理に応用したんですか？」
あ、ラフタリアに呆あきれられてしまった。
とはいいつつ、パクパクとラフタリア達は貪っていく。
食いたくないとか言うかと思ったけど……。
「箸が止まりません……どんな魔性の腕前になったんですか！」
この反応だと、フォウルやアトラ達の分はもう一度作ることになるな。
「素直に腕が上がったと評してほしいんだがな……」
「美味しいー！　あ、それフィーロのー」
「キュアキュアー！」
フィーロとガエリオンが食事の奪い合いを始めた。
騒がしい連中だな。
「ラフー」
ラフちゃんも気に入っているのか、普段よりも食べている。
ふむ……気って凄いな。
そんなこんなで飯を食い終えた後は、ラフタリアとフィーロが革命派の旗頭であることの証としてめかし込んで町を一周するパレードに出発する。
フィーロもクテンロウのフィロリアル用の専属衣装と変わった馬車を与えられ

て……牛車に似てるが違うぞ？　その馬車にラフタリアを乗せてゆっくりと引く感じだ。

変わった馬車を手に入れたからか、かなりご機嫌だ。

その後ろにはガエリオンが続いている。

で、ラフタリアは馬車の窓から手を振っている。

「新たな天命様万歳ー！」

「うおおおお！」

みんな揃そろってラフタリアの姿を見て興奮している。

ちなみに商人辺りの話を聞くに、ラフタリアの姿絵が大量に描かれていて売れているそうだ。

一応、革命派の資金源になっている。

可愛い子供の晴れ姿を見るみたいな感覚を毎日味わえて、誇らしい気持ちだ。

あ、ラフタリアが俺のことを恨みがましい目で見ている気がする。

見世物にされた気分だと毎回言っているもんな。

本人も自分の巫み女こ服姿に何の魅力があるのかと首を傾かしげてるし。

で、俺とサディナが護衛とばかりに両脇に立って同行している。

樹とリーシア、セイン辺りは時々配置が変わるけれど、俺の近くにいる。

ともかく、ラフタリアを旗頭に、次点をフィーロとガエリオンで組んで護衛し

ている感じかな？
　シルトヴェルトからの出兵組の者達……ヴァルナールとかがたまに参加するけど、この陣形に若干不満そうだ。
　というかアトラとフォウルが来ないな。いつまで買い物をしているのやら。
　そんなゆっくりとしたパレードで町を一周して俺達は屋敷に戻った。
　すると屋敷内でアトラがかんざしを髪に挿してぐったりとしている。
　逆にフォウルは、こう……凄く楽しそうだ。
「明日は閉まっていた店に服を買いに行くぞ！」
「まだ買うのですか!?　お兄様！」
　よく見ると服が何着かある。
　どうやらアトラを着せ替え人形のようにしていたようだ。
「おつかれさん」
「く……これがお兄様ではなくて尚文様でしたら幾らでも付き合うというのに、そもそも何が楽しいのかわかりませんわ」
「珍しく同意しますね。私も同じ気持ちですよ。服に関してだけですが」
　ラフタリアが若干棘とげのある言い方をするなぁ。
　しょうがないだろ。これでこっちの連中の戦意を高揚できるんだし。
「ラフタリアさんは贅ぜい沢たくですわ。尚文様に気に入られる衣装があるとい

うのは何よりも喜ばしいことなのですわよ」
あ、アトラの台詞にラフタリアが深い溜め息いきをついている。
「ともかく、今日は十分稽古や仕事をしたからな。ラフタリア達はゆっくりと休めよ。サディナは護衛をしておいてくれ。アトラ達は飯だな」
「ナオフミ様は？」
「寝る前に色々と用事があるから出かけてくる。武器屋の親父のところとかな」
あの師匠に付き合わされて大変な目に遭っていなきゃいいが……。
「では一緒に……」
「フィーロもー」
「いや、ラフタリアとフィーロがついてくるとそれだけで騒がれるだろ？　留番していてほしいんだよ」
ぶっちゃけると、革命派の総指揮は俺が執っているはずなんだが、ラフタリアの方に意識が向いていて割と俺はおざなりにされているんだ。そういう意味では俺の方が動きやすい。
「キュアア」
「ガエリオン。お前もだ」
「キュア……」
とはいえ、子ガエリオンモードならばどうにかなるような気もしなくもない。

だけど連れていくとフィーロが黙っていないだろうから留守番をさせよう。

「フィーロ、もう眠いー」

「なら寝ておけ。明日も早いからな」

「はーい。メルちゃん今頃何してるかなー？」

「書類の山と格闘してるんじゃないか？」

メルティのことだから心配はないと思いたいところだな。

出発前に褒め倒したが……さすがに効果は切れているだろう。

「では私が同行いたしますわ。ラフタリアさんは留守番ですわね」

「却下だ。兄貴と一緒に飯でも食っていろ。風呂もまだだろ？」

「そんなことよりも尚文様とのひと時ですわ」

「何を言っているんですか！」

「というわけでラフタリア、アトラを……サディナやフォウルと一緒に見張っていてくれ」

「わかりました。さ、アトラさん。言われた通りに休みますよ」

「く……絶対に出し抜いてみせますわ！」

なんて感じでアトラは渋々ラフタリア達に連行されていった。

# 七話　方向音痴

　そんなわけで俺はパレード用の装備ではなく、クテンロウに合わせた衣装を着て夜の町に出かける。
　ああ、何も言わなくてもセインが後ろについてきてる。
　そんなにも目が離せないのだろうか？
　まあ、セインなら特に騒がれることはないか。クテンロウは亜人も獣人も人間もいる国だ。
　町の雑踏は内戦中だってのに昼間とあんまり差がないように感じる。
　江戸の夜って早めに休むって感じで静かだったと聞いたことがあるけど、クテンロウはその辺りは違うみたいだ。
　桜光樹とか照明代わりになってるから夜でも地味に明るいし。
　この薄い桜色の光は風情があるな。月の光と混ざるし、日本人が好みそうな雰囲気だ。

で、なんで俺が親父のところへ行こうとしているかというと、気を習得したからだ。
先ほどの料理の例を参考にするに、物作りにも応用が利く可能性が高い。親父が気を習得するのは難しいかもしれないけど、使えるようになれば更なる領域のものを作ってくれるかもしれない。
だからその報告がてらに顔を出してみようと思っている。
そう思いながら親父のいる鍛か冶じ場への道を歩いていると。
「あの——……すいません」
「ん？」
何かちょっとテンションが低めの声に呼び止められる。
声がした方角を見ると、ぼーっとしたような顔の女が立っていた。
顔は割と整っている。だぼだぼの服装で亜人か人間か見分けがつかない。
なんとなくどこかで見たような顔つき……初対面だよな？
うん、間違いなく初対面なのに、見たことのある顔の女が申し訳なさそうに俺を見ていた。
セインが若干警戒するように武器に手を伸ばした。
「つかぬことを伺いますが、表通りってどっちでしたでしょうか？」
「表通り？　あっちだぞ？」

俺が今歩いているのは職人通りだ。町を突っ切る大きな通りが表通りらしいのだが……。

「ありがとうございます」

俺の指差した方角を見た女は深く頭を下げた後、その方角へと歩き出したかと思うと三歩進んだ辺りで空を見上げて、別の方角へと歩き出した。

「なんだアイツ？」

セインと一緒に首を傾かしげる。

俺が指差した方角とは別の曲がり角に入っていったぞ。

人の話を聞いていたのだろうか？

まあいいや、親父のところに顔を出そう。

親父が厄介になっている鍛冶場へと向かう。

ここは革命派の武器の修理とか一手に引き受けている。

もちろん、現地の鍛冶師も一緒で、親父達が手伝いってかたちで参加しているそうだけどさ。

元もと康やす二号はクテンロウのその界かい隈わいじゃ有名人なので、顔パスで仕事を見ることができるとか何とか。

鍛冶場には人が入れ替わり立ち替わり常駐して武具の作製をしている。

あ、親父を発見した。

元康二号は……縛られて転がされている。気にしたら負けだな。

「おーい」

「お？　アンちゃんじゃねーか。こんな夜遅くにどうした？」

「昼間は稽古で忙しくてな。色々と進展があったから報告がてら来たんだが……」

「エルハルト！　夜だぞ！　飲みに行く時間だ！　町の飲み屋に行かなくてどこへ行く！」

昼間アレだけフォウルと追いかけっこをした奴が、遊ぶことしか考えていないようなことを言っている。思わず溜め息いきが出てくるな。

「それで、あの呪われた剣の経過はどうだ？」

「下準備はしているが……もう少し腰が落ちつけられるところじゃねえと無理だとよ」

「そうか」

まあ、あの剣がちゃんと使えるとして、今の俺のところの面子で一番使いこなせる奴がいない。

錬れんがいないと難しいか。

「数日以内には旧都とやらを占拠する予定だから、そこで打ち直しをすればいいだろ」

「あー師匠の専属の工房があるところな。確かにそこがいいだろうな。しっかし

師匠の故郷に来るっていうのはまた良い経験ができるもんだぜ」
「昔、親父に免許皆伝を与えたのって実は厄介ばらいだったのかもな」
転がっている元康二号に嫌味を含んでぶっ放す。
「ありえるんだよな……」
あ、親父も薄々勘付いてるのな。
そりゃあなぁ。腕が良いのはできあがる武器を見れば一目でわかるし。
「十分叩たたきこみはしたに決まってんだろ！　後は本人の努力次第、そこまで責任持てねえよ！」
「それも一理あるか」
感覚的に変幻無双流に近い気がする。
ってそうだった。さっき手に入れた情報を親父に教えよう。
「そうだ。親父、気の流れとかは見えるか？」
「なんだそれ？」
俺は親父に料理で魔力やＳＰ……気を込めると質が良くなることを説明してみた。
少なくとも、それ以外心当たりがない。
「見えはしないな。だが、力を込めろというのはわかるぜ」
「そうか」

「ま、アンちゃんほど明確に力を使えはしないがな。集中することには意味はあるだろ？」
やはり親父も知らず知らずのうちに使っているとみてよさそうだ。
「あとな、素材の声に耳を傾けなきゃダメだ。押すのもいいが引くのも重要だぜ」
ふむ……魔力や気を込めるのも大事だけど、それを導かないといけないということか。
「お前は知っているのか？」
蔑さげすむ目で元康二号に目を向ける。
「んだその態度。いいだろう、俺の腕前を見て驚くんじゃ……美少女！」
あ、セインに気付いた。元康二号に視線を戻すと……いねえ！
いつの間にか縄を解ほどいてセインに向けてキザったらしく声を掛けている。
縛られていたはずなのにどうやって抜け出した。
「ああ、貴方あなたはこの前のハサミを注文した美少女ですね」
年齢差考えろ、変態。
「うん、なかなか――」
セインがハサミを見せて応じようとしているが、音飛びしている。
「その個性的な声をいつまでも聞いていたい」
「何を言っているんですかこの人？」

あ、キールぬいぐるみが的確な指摘をしている。
それはセインも同意しているみたいだ。
「良い仕事をしてるのだから真面目に――」
「真面目に鍛冶をしている時が一番魅力的に見えるから鍛冶をしたらいいんじゃないですか？　と仰おっしゃってますよ」
「フッ！　そこまで言うのならしょうがない」
ゆらぁっと元康二号が鍛冶場に向かって歩き始める。
「お嬢さん！　ちゃんと見ていてくれよ！」
そう言いながら、親父が鍛冶をやっていた武器にハンマーを打ち始める。
お？　よくよく見ると親父の時よりも……気の流れを感じる。
「さっき盾が気とか言っていたが、集中した時に消費する力だろ？　そんなもん誰だってやるんだ。意図的に物に込めてナンボのもんだっての」
「あ、ああ……」
カンカンとハンマーを振り下ろすその一挙一動が煌きらめいていて、気が見えるとそれだけ相手の技量がわかるような気がした。
確かにコイツ、普段の態度はバカそのものだけど仕事中は天才的だ。
みるみる武器に輝きが宿っていく。
やはりそうか！　これはアイテム作成にも適応できる！

「さっきＳＰって言ってたな。そりゃあ勇者由来の力だろ？　気ってのが同じもんか少し考えてみな」
……そういえば命力水は魔力水と魂癒水の中にある成分を抽出したものだ。
魔力ともＳＰとも異なる要素が気だとするならば、品質を引き上げているのが別の要素であるのも頷うなずける。
「魔力付与の先にあるアマとプロの大きな壁だろ。ま、気が何のことを指しているかなんとなくわかるがな。これだろ？」
ゆらぁっと元康二号が手をかざして気を集める。
「見えはしないが感じられる。これを込めなきゃ良いものなんてできるもんか。これは素材の声を聞くのにも使う。素材の品質だけに頼るのは二流だぞ？」
それからナンパ野郎は親父に目を向ける。
「お前はまだその辺りが甘いところがあるのが音を聞きゃあわかる。みっちり叩きこんでやる」
「そうこなくっちゃな！」
親父も集中して師匠の仕事を観察している。
これで親父の腕前が上がればいいんだがな。
「素材の声に耳を傾け、屈服させる。無理を通す時だっておんなじだ。忘れたのか？」

「忘れちゃいねえけど……なるほど」
何か心当たりがあるってところだな。
「早くメルロマルクの俺の店に戻って色々とやりたいところだぜ。いろんなレシピが頭に浮かぶ」
「楽しみにしている」
「さー完成だー！」
ジュッと、熱した武器を水に突っ込んで元康二号は作っていた武器を掲げる。
刀だったのか。親父が打っているのを見ていたから剣だと思っていた。
「なんで刀になってんだ師匠！　剣だよ！」
「あ？　エルハルト、素材を見ろよ。剣じゃなくて刀になりたいって言ってるじゃねえか」
うわー……凄すごくバカっぽい問答だ。
受け取った刀を見て親父が、怒るか惚ほれぼれとするか迷っている顔をしているぞ。
「さーて、今日の仕事は終わり！　飲みに行くぜ」
「まだまだあるだろ」
剣はどうしたんだよ？
「知らねえな。エルハルトに教えるにしても、素材を見たうえで素材に作るもの

を教え込むことができなきゃ話にならねえ」

「く……」

あ、親父が悔しそう。

「更に先へ行きたかったらやってみせろ。話はそれからだ」

ここで助け船を出してもいいが……。

素材に作るものを教え込む？　食材が何に向いているのかを見極める勘か？

教え込むってのも包丁や器具で弄いじるのに似てるし。

微妙に心当たりがあるのが嫌だ。

「あの——……すみません」

そこで声がして振り返ると——

「美少女！　お嬢さん、何のご用でしょうか」

元康二号が接客……ナンパ交じりに、さっき俺に道を尋ねた奴へ声を掛ける。

「表通りにはどうやって行けばいいんでしょうか？　あら？」

あっちも俺の顔に覚えがあるのか首を傾げている。

「お前……さっきも道を尋ねていたな。数歩で別の方角に歩いていったが」

「そうでしたか？　星がきれいだなと思って見とれてしまいまして……」

「あ？　またてめえは美少女を手て籠ごめにしようとしてんのか？」

「ふざけるな」

元康二号はいつもこれだ。いい加減にしてほしい。セインに命じて縛り上げるか？

「アンちゃん、俺はまた練習で剣を作らねえといけねえから師匠を見ててくれねえか？」

そう言いながら親父は酒を飲む仕草をする。

「アンちゃんなら得意だろ？」

ああ、酔い潰つぶせばいいのか？

親父も俺の噂くらいは知ってるだろうし。

サディナに相手をさせればよかったか？　あ、でも数日前に酔い潰したとか聞いたな。

「わかった。後で送り届ける。で……」

俺は方向音痴っぽい女に目を向ける。

「表通りだったな。どうせコイツの監視のために移動する予定だったし、ついでに連れてってやるからついてこい」

「ありがとうございます」

方向音痴っぽい女は礼儀正しく頭を下げる。

「気にすんな。じゃあ行くぞナンパ野郎」

「それって俺の渾あだ名なか？　ふざけんなよ！」

「うるせえな。じゃあ元康二号」

「誰だよそいつ！」

「うるさい。お前なんて親父が腕を上げたらお払い箱だ」

「なんだと！」

「あの……」

「気にしないでいいですよ。お嬢さん」

その態度が元康二号だって言いたくなるんだよ。もしくはナンパ野郎だ。

「じゃあ行ってくる。セインも来るか？」

セインは無言で頷いた。

大分夜も更けてきているから、ラフタリア達に心配させないようにしないとな。

「じゃあついてこい」

そんなわけで鍛冶場から出て表通りの方へ向かったのだが……。

「お嬢さん。とてもきれいな肌をしていらっしゃる。月の光に照らされて、更に美に磨きが掛かっていますね」

「はぁ……」

元康二号が方向音痴女に再三、声を掛けている。

……よくやる。

そんな中、セインが俺の肩を指で突つつく。

「なんだ？」
見ると方向音痴女が脇道に逸それていき、その後を俺に気付かれないように元康二号が追いかけようとしていた。
「連れ去りか？」
「ちげえよ。ふらふらと別の道に行こうとしているからエスコートをしようとだな」
「え？　あ、いい匂いがしたのでぼんやりとしていました」
あ、方向音痴女はまったく気付いていなかったみたいだ。
「そっちは別の道だ。いいから黙ってついてこい」
いつまでも道に迷われてたらたまったもんじゃない。
「はい」
そうして数歩歩いたところで、またセインに肩を突かれる。
見ると今度は逆方向に歩こうとしている。
「いいからついてこい。少し先の道を右な？」
何かイライラする女だな。人の話をちゃんと聞いていたんだろうか？
振り返ると、なぜか左に曲がる。
「右と言っただろうが！」
「え、だけどあの虫がそっちに曲がったから」

「虫を目印にするな！」
　確か方向音痴って、無意識下の目印に動くものとかを指定していて、それが移動することで道を間違えるとか聞いた覚えがある。他にも頭の中で適当な地図を描いて変な道に入るとか。
　とりあえず変なところに行かれたら厄介だし、元康二号の毒牙にかかりそうだからと手を繋つないで引っ張る。
「あちゃー……強引な人」
「うるさい」
　この会話のテンポ、誰かに似てて非常に嫌な感じだ。
　まさかと思うがコイツがサディナの妹とかではあるまいな？
　そう思いながら表通りに出る。
「ここが表通りだ。目的地に着いたな」
　潜在的な方向音痴なのか、それともバカなのかは知らないが、変な奴を二人も連れていたらいつまで経っても目的地になんて辿たどり着けない。
　で、方向音痴の女は表通りの人通りを見る。
「天命様のパレードがあるって聞いたのだけど……」
「とっくに終わってんぞ」
　なんだ。ラフタリア達を見るために表通りに来たかったのか？

「あちゃー……」
「で、どうするんだ？」
「うーん……」
「ご一緒に酒なんてどうですか？」
元康二号がそのまま酒に誘う。
「お酒？　いいの？」
「ええ、奢おごりますよ」
送り狼おおかみになりそうな顔をしてんな、元康二号。
相手の女も酒と聞いてその気になっているし……どうしたものかな。
ま、どっちにしろ酔い潰れるのは元康二号の方だし、適当なタイミングで別れればいいか。
「セインは……酒を飲むようなタイプじゃないか」
俺の問いにセインは頷く。
やはり酒を嗜たしなむ趣味はないらしい。
「とりあえず……奴に酌をしてどんどん勧めろ。手短に潰して帰るぞ」
「わかったそうです」
「じゃあ行くぜ！　俺のお気に入りの店を紹介するぞ」
なんて言いながら元康二号は方向音痴女とセインを連れて酒場へと入っていく。

それとなく俺をハブにしようとしているがそうはいかないからな。
で、店内に入って座り、メニュー表を見る。
……読めない。メルロマルク公用語じゃないからな。
適当に注文するか。とはいえ、会計時に俺が全額払うことになることは避けたい。
「酒代を出せるのか？」
だから念のために元康二号に尋ねる。
「は！　その程度造作もない！　オメーは金持ってんだろ。俺は女性二人の酒は奢るがオメーには奢らねえよ」
そう言いながら元康二号は、勝手に決めた俺の分を含めて酒とツマミを店員に注文する。
「えーっと、これとこれとこれ」
で、方向音痴女も結構注文するな。
こっちも酒好きなのか……どうしたもんかな。
「セインは酒を飲まないぞ」
「じゃあジュースでいいだろ。ツマミ食うか？」
セインは特に喋しゃべりもせずに頷く。
その表情から実は喋りたいってのが伝わってくるな。

「お待たせしましたー」
酒が運ばれ……水みず樽だるとルコルの実まで運ばれてくる。
「ほら！　オメーにはこれがお似合いだろ」
と、元康二号はルコルの実の房を俺の目の前に置く。
これは遠まわしにサッサと俺だけ出ていけとか言いたいのか。
うぜぇ野郎だな。
まあ、俺も日本にいた頃にはこういうタイプに会ったことがないわけじゃない。
ネットゲームのオフ会とかで気に入った女がいると、強引に野郎と引き離して独占しようとする不届きな奴がいる。
雰囲気が悪くなるから適当に相手をして、酔い潰してやるのが恒例だったけどさ。
というかこの手の奴は酒が強いアピールをしたがるのが多いんだ。
そういう肉食系ってのは直ちょっ結けつ厨ちゅうとか言われる奴等だな。俺はちゃんとその辺りは覚えていて、オフ会終了時に問題を起こしそうな奴はマークしていたけどさ。
人間関係のイザコザほど面倒なものはない。
それとなくグループ分けを変更して問題がないように配置しておくのが定石だった。

「じゃあ出会いにカンパーイ！」
と、元康二号がジョッキに口を付けて飲んだ瞬間、隙きを衝ついて俺の目の前にあったルコルの実を一個潰して、奴が飲むはずの酒の中に雫しずくを忍ばせる。
かなりヤバイらしいからな、死なない程度に調整しておいてやろう。
「カンパイ」
方向音痴女はジョッキを持ってグビグビと酒を飲み始める。
所謂いわゆる一気飲みだ。
危ない飲み方をしているな。
「ふう、もう一杯」
「プハー！　いやー、いい飲みっぷりですね！　こっちも楽しくなりそうだ」
そんなことを言っていられるのは今のうちだぞ？
悟られないように合わせておくか。
セインは運ばれてきたジュースを受け取り、飲み始める。
「それでお嬢さん、貴方あなたは何の用でこちらに？　住所はどこでしょうか？　後で送り届けますよ」
どこまでガッツクんだ、元康二号は！
「えっと、天命様を一目見に……住まいは北部の海辺の村です」
「じゃあ宿を取っているわけですね？　どこに泊まっているんですか？」

「えーっと……」

「根掘り葉掘り聞いてガッツクなよ」

ホント、コイツは女好きだな。だが、こう……いろんな意味でナンパは下手っぽい。

昔の元康の方がこの辺りは上手なんじゃないだろうか？

ま、外見や年齢の差ってのもあるだろうがな。

「うるせ――え……お前、何やってんの？」

「ん？」

ルコルの房から実を毟むしって頬ほお張ばっている俺を指差して元康二号が絶句している。

「お前が注文したもんだろ。美う味まいよなこの実」

味は凄くいいから出されれば食う。

ちなみに高密度の酒のもと、場所によっては悪酒として知られる代物らしい。

魔力とSPが回復する効果があるんだよな。

魔力水とか魂癒水がもったいないから俺はこれで回復するかな？

回復倍率もかなりいい。大量に持ち運べるならいいかもしれない。

地味に高いけど。

「おえ……気色悪いものを見せんじゃねえよ」

元康二号が口元に手を当てて顔を逸らす。
いや、お前が持ってこさせたんだろ。
周りの客で気付いた奴が蒼あおい顔をしている。
店員は戦せん慄りつしているな。
「わあ……」
方向音痴女が俺を見て目を輝かせてる。
「お酒強いんですね。羨うらやましい」
「酔ったことはないな。つーかお前と同じ反応をする女を知っているんだが……」
疑惑が再浮上したぞ。
「凄い！　凄い！　こっちも負けられない」
そう言いながら方向音痴女はグビグビと酒を更に飲み始めた。
徐々にテンションが上がってきてる？
サディナの関係者かと疑っていたが、常に酔っ払ったみたいな性格のサディナとはなんか違うっぽいから気の所せ為いだな。
「おーっと、そんな変人の話なんかせずに俺と話をしましょうよ。北部の海辺の村出身でしたっけ。あの辺りは美人が多いですよね」
「美人？」
あ、これは無自覚なタイプだ。まあ、適当に相あい槌づちを打っておくか。

早めに元康二号を酔い潰さないといけない。
まだ奴は俺が仕込んだ酒には全く手を触れていないからな。
「個人的には――」
方向音痴女が俺に視線を向ける。
「貴方は何種の人ですか？　凄くお酒が強くて羨ましい」
ああ、なんだかんだでクテンロウって国は亜人獣人が多い国ってのは変わらない。
人間もそれなりにいるけど割合は少なめだ。
俺の外見に関してそこまで不思議がられないのは、この世界の特徴みたいなものなんだけどさ。
ちなみにクテンロウでは亜人の特徴を隠しているって奴もいる。
お家柄とかいろんな理由があるらしい。シルトヴェルトにはない風習だな。
この女はサディナの住んでいた地域の近くに住んでいたのかもしれない。
だから感性が近いのだろう。酒に強い奴に惹かれるってやつ。
「人間だが？」
「え？　人間でここまでお酒に強い？　遠縁にいるんじゃない？　お酒に強い種の人」
異世界召喚された日本人だから絶対にないと断言できるけど、亜人系の国には

そういう考えがあるらしい。

本当のことを言うのはそれはそれで面倒だしな。

あ、元康二号が無視されて不機嫌だ。

「男は酒が強いだけが全てじゃない。何かゲームをしようぜ！」

そう言って元康二号はサイコロを取り出す。

「チンチロリンをしようぜ！」

うっわー……異世界に来てそんなのやるとは思わなかった。

セインに目を向けるとゲームならとばかりにトランプを出す。

さすがはゼルトブルの闇コロシアムでも有名なプレイヤーのマーダーピエロ。

トランプなんかも持っているのな。

うん、個人的にそっちの方がいい。

「トランプで何かゲームをする方がいいだろ」

「このお嬢さんが知らねえんじゃねえか？　そういやお嬢さん、名前を聞いていませんでしたね。お名前は？」

「えっと、ゾディアといいます」

毒々しい名前だな。

何か魔神とか呼び出せそうだとは思うのは俺がゲーム好きだった所為だろうか？

「ゾディアさん。トランプは知っていますか？」
「カードゲーム……札遊びなら少々……」
「札遊びね。花札か？」
少しくらいしか知らないけどさ。
「古い遊び？　そうじゃなくてマスズ札」
「あーそっちね。役作りが面倒だし地味に分厚いから札とかどうしたらいいかな」
なんて元康二号が面倒そうにしているとゾディアとやらがドンと腰のホルダーからカードの束を取り出してテーブルに置く。
「お、おう」
「嗜んでるので……」
趣味っていいわないかそれ？　マイカードって雰囲気あるぞ？
俺は束を確認する。
……麻雀のカード版って感じっぽいな。
「これってこうすれば何か役あるか？」
と、麻雀の役を配置してみる。
「ああ、って知ってるのか？」
「似たのを知ってるだけだ」
ゲームセンターとかで少しかじった程度だな。

後はミニゲームくらいか。本気で打ちこんだことはない。
「初めてやるから盛り上がるかわからないぞ？」
「大丈夫、教えていくから」
「はいはい」
なんて感じに札が配られて俺達はプレイをすることになった。
セインの態度は……なんだか様になっているな。
「大丈夫なのか？」
俺の問いに頷く。
「旅の最中――」
「旅の途中で似たような遊戯をしたことがあるそうです」
いろんな世界を渡り歩く間に、酒場とかで覚えたとかだろうな。
まずは手札は十三枚で、引くごとに一枚捨てていく……そんなルールだったな。
基本は麻雀だ。時間が掛かりそうだな。
「初心者もいるから、今回は五枚の別ルールで――」
「それってトランプでよくないか？」
セインがバラバラと器用にシャッフルを始める。
札の形も似たり寄ったりなんで、ある程度できるだろ。
「ゾディアさんに合わせてやらないとは無粋な野郎だ」

「はいはい。わかったよ」
同じ札が四枚もある大規模なトランプでポーカーをする羽目になったぞ。
まあ一戦ごとの試合時間は異様に短い。
少しずつ覚えさせて本格的なものを教えようって魂胆なんだろうな。
正直に言えば初心者がやっと勝負をしているように見えるって感じか？
そんな勝負を十回ほどした頃。
「楽しくなってきたー！」
勝負の合間にグビグビと飲んでいたゾディアがテンションを上げて、強力な役を出す。
ポーカーでいうところのストレートだな。
なんか酔っ払ってキャラが変わってきていないか？
「サンダンザン！　どうだ！」
「ほい」
四枚同じ札が来たので無地札と合わせてオープンする。
これは麻雀じゃなくてポーカーの変則だよな？　役がわからん。
「あちゃー……負けちゃったー！」
「空気を、読まねえ……野郎だぁあ」
常に何の役もない札を出す元康二号に言われるのはどうかと思う。

捨てた札を見てもだ。

コイツ、ものすごくギャンブルが弱いんじゃなかろうか。

で、元康二号はかなり酔いが回り始めている。

「お前は連敗しすぎだろ。酔いすぎだ」

「俺は酔ってなんか……いましぇん！」

頭ふらふらしてんぞ？　潰れるのはもう少し掛かりそうだな。

「……これは？」

ポッとセインが無地札三枚に同じ矢印札二枚を出す。

ポーカーだったらフルハウスみたいな感じかな？

「二人揃そろってツヨ！　楽しくなってキター！」

酔っ払ってテンション高いな。

うん。サディナの妹の疑いは限りなく低くなった。

アイツの妹ならばもっと強いだろ。

「野郎……てかげん、しりょ！　さ、お酒」

なんて態度で元康二号がゾディアに酒を勧める。

それくらいにしておいた方がよくないか？

「はーい！　もっと飲みまーす！」

ゾディアがドンドンテンション上がってきているぞ。

セインは頑かたくなに拒んでるけど……。

「これ――」

と、セインはさりげなく元康二号の近くにある俺が飲ませようとしていた酒を勧める。

「うおっ、可愛い、女の子からのしゃくとはありぃいがぁあたい」

なんて感じに元康二号はコップに酒を受け取り、一気に飲み干す。

「ぐ……」

ポロッとコップを落として元康二号はセインを見る。

誤解を与えたら面倒なので、俺がその視線を遮って自分を指差して笑ってやる。

「て、てめえ……謀りやがったな」

「悪いがそろそろお開きにしたいんでな」

抱き寄せるようにして小声で囁ささやく。正直言って、なんで親父のところに顔出しに行っただけでここまで寄り道しないといけないんだよ。

「くぅうう……せめて女子の胸の中で失神してぇ……」

どういう遺言なわけ？　まあ数滴だから死にゃあしないだろ。

「あー酔い潰れちゃったか。そろそろ解散にするか」

と演技がかった態度で、若干泡を吹いてる元康二号を抱きかかえる。

会計は……コイツの財布からでいいな。

「えー……もっとやりたいー」
ゾディアが駄々を捏こねる。
「旅をしているのはわかるけど、あんまり遅くなると明日に差し支えるぞ」
「もっと遊びたいー」
「ワガママ言われても困る」
「うー……じゃあお名前おしえーて？　今度あそぼー？　いつ遊んでくれる？」
酔っぱらってるからか子供みたいな態度だな、この女。
できればこの場限りの関係にしたい。
「またどっかで会えたらな。その時に暇だったら相手してやる」
「ほんとーだよ？　で、名前ー」
「ああはいはい。岩いわ谷たに尚なお文ふみだ」
「なおふみちゃん」
「ちゃん付けはやめろ」
酔いどれ女であるサディナと重なるだろ。いったんは薄まった疑惑が深まる。
「なおふみちゃん。あははー。絶対、また会おうね！　あははー明かりキレー」
ふらふらと歩きだしたゾディアが、俺が支えていた元康二号の肩を背負う。
案外怪力なんだな。
で、会計を終えて酒場を出る。

「ほんじゃ……また、会いましょう！　凄く、楽しかったです！　こんなに楽しいのは、初めて！」
「ああ、はいはい」
あっちも泥酔寸前だな。酔いどれ女ほど酒は強くないか。
アイツはここまで酔っぱらうことはない。
一度俺と飲み比べをして酔い潰れたことはあったけど、すぐに立ち直って普段の態度に戻っていた。
というか常時酔っ払っているようなもんか。
「う―……あつ―い！」
「コラ！　脱ぐな！」
ゾディアが服を脱ぎ始めたので注意する。何の亜人かわかりそうだから確認するか？
「じゃあ風を起こす―……ツヴァイト・ウインド―」
割と速い詠唱でゾディアは風を起こす。
「往来で魔法を使うな！」
強風に晒されて埃ほこりが舞う。酔っ払いの面倒は見切れないぞ。
って、まだ酒を持ってやがる。その持っている一升瓶をラッパ飲みしたかと思うと、スタッと背を伸ばしてゾディアは振り返る。

なんだ？　酔っ払っているようだったのにいきなりシラフになったみたいだぞ？

「じゃ、今日の記念に」

と、腰の……別のホルダーから真ん中に宝石が嵌はまっているカードを渡してくる。

裏の絵柄が随分と変わってるな。シャチの絵が描かれている。

「……不思議な気分。うん、貴方のこと気に入ったかも。お婿さんになってくれない？」

「何を言ってんだ？　俺の知り合いにも似たようなことを言う奴がいるんだが……」

やはりこの女はサディナに重なる。潜伏中の当代の水竜の巫み女ことかじゃないだろうな？

「あははーダメ？」

「ふざけているのか？」

「ここまで気に入って固執するのは初めて……ま、物語みたいな恋愛をしたいから帰るー」

そう言ってスキップ交じりに、どことも知らない路地へと入ってしまった。

宿とか大丈夫なのか？　方向音痴っぽいのに。

脳みそがアルコールで汚染されてしまっているのではないだろうか？
一人で帰して大丈夫だったか？
そう思って行った方角を軽く追ったのだが、いなくなっていた。
「大丈夫――」
「あの方、大丈夫なんでしょうか？」
「さあな」
追いかけていっても捕まえられるかわからない。
女の夜歩きはかなり不安だが、俺達もこの酔っ払いの面倒を見なきゃいけない。
クテンロウの治安の良さに期待するしかない。
「ともかくコイツを親父に預けて、サッサと屋敷に戻ろう」
そんな感じで俺達は元康二号を親父のところへ連れていってから足早に屋敷に戻ったのだった。

「おかえりなさい」
屋敷に戻るとラフタリアが出迎える。
「寝なきゃいけない時間だろ？　肌に響くぞ」
「村じゃ、アトラさんの迎撃に出る私を止めたことがないのによく言います」
あ、帰りが遅くなったことを気にしているっぽい。
セインに使いに行かせるのを忘れていたからな。
「あの女好きに付き合わされてな。セインと一緒に奴を罠になに掛けてやったぜ」
「できれば聞きたくありませんでした……屋敷の人に親父さんに聞きに行ってもらいましたし」
「そういや親父が言ってたな」
屋敷の使いが俺がどこへ行ったのか確認に来たとか。まあすぐに帰る予定だったからいいだろ。
「ともかく、ラフタリアは先に休んでいてくれ。明日も忙しくなるだろうから」
「……わかりました」
「じゃあ――」
「それではこちらも休ませていただきますね。何かあったらすぐに駆けつけます

ので」
　セインも屋敷に上がり、そそくさと休みに行ってしまった。
「そういやアトラは？」
「入浴後にナオフミ様の作った食事を食べた後、一騒動ありましたが……一応、休んでもらっています」
　一応ってところが不安だが、こっちはこっちで騒がしかったみたいだな。
「姉貴！」
　と、フォウルがラフタリアを慕うように駆け寄ってくる。
　ん？　姉貴？
　フォウルがラフタリアを姉貴と呼んでいる？　一体何があったんだろうか？
　俺がフォウルを指差すと、ラフタリアが若干溜め息いき交じりに答える。
「ワガママで暴れるアトラさんに翻ほん弄ろうされるフォウルさんについイラッとして説教をしたら、こうなってしまいまして……」
「何があったんだ？」
　ラフタリアは概要を話してくれた。
　要するに食後に屋敷から飛び出して俺の後を追おうとしたアトラとの攻防があり、フォウルがいつもの通り負けそうになったそうだ。
　時々勝てるけど、それって誰かの助力が必要だもんな。

「お兄様、お願いしますわ。今日は散々一緒にいてあげたんです。どうか道を開けてください」

そんな口調でアトラはフォウルを籠絡して味方に付けて屋敷を脱走しようとしたらしい。

で、相対したのはラフタリアとフィーロとサディナだったそうだ。

「アトラさんのことが大事なのは今まで一緒に行動していて知っています。ですが、その大事なアトラさんがワガママを通すために暴力を振るうのを黙って見ているのが……本当に優しい兄のすることなんですか！」

「うあ……俺は、俺はアトラの味方だ！　今日は沢山俺に付き合ってくれた。だから俺もその分応えなきゃいけない！」

フォウルがラフタリアに向かって拳を振るう。

だが、拳は届かず、逆にラフタリアが乱暴に拳を振るうフォウルの頬ほおを強く平手打ちした。

もちろん刀の眷けん属ぞく器の補正でダメージはあんまり出ない。

「私はもしナオフミ様がおかしなことを言ったら、それを正すため注意します。最悪……体を張ってでも止めますよ」

そうだな。ラフタリアは俺が間違いそうになると体を張って止めてくれる。

憤怒の盾を初めて使った時がそうだ。

暴走する負の感情を今でも覚えている。
絶対に飲みこまれるわけにはいかない。
そうだ。ラフタリアはいつでも俺が間違えないように止めてくれる。
「ですがあなたはなんですか？　妹を腫れ物のように扱って……それでは何も解決なんてしません」
「う……」
「ナオフミ様だって時には困っているんです。兄のあなたが注意しなければ大事なアトラさんがナオフミ様に嫌われてしまいますよ!?」
「アイツにアトラが嫌われる？　そんなはずはない！　アトラだぞ！」
「アトラさんは無条件にみんなに好かれる……と思っているんですか？」
「お兄様、そんな言葉を受け入れてはいけませんわ！」
フォウルに注意しながらアトラはラフタリアの隙すきを窺うかがう。
「あ、アトラは……みんなが大事にする俺の大切な妹だ！」
「それが妹のことを思ってのことですか、と聞いているんです！」
ラフタリアに怒鳴られてフォウルがビクッと脅おびえを見せる。
「時にはアトラさんの暴走を注意しないと、いつかアトラさんが泣く羽目になるんです」
「な、何!?　アトラが!?」

「ナオフミ様が嫌いなタイプがどんな人か知っていますか？　人を利用して踏みにじり、その人が苦しむのを楽しむ女性なんですよ？」
「そういえば……アイツ、俺がアトラに踏まれた時に不快そうな顔をしていた」
「ええ、アトラさんを思うなら、手綱を握り、ちゃんとした女性に育て上げてこその兄なんじゃないですか？」
ラフタリアも何か変なことを言ってる自覚はあるのだろうか？
兄にそんな権力があるのか？　とはいえフォウルはアトラの兄であり親代わりなのだから間違ってはいない気もする。
「あら――……ラフタリアちゃんも大概よね？」
「んー？　フィーロ眠いー……ごしゅじんさま、まだ帰ってこないのー？」
外野の雑音も何のその、ラフタリアはフォウルに正面から苦言を突きつけた。
ハッと我に返ったかのようにフォウルはラフタリアを見る。
「……その通りだ。俺は……俺はアトラを大事にするあまり、アトラのことを何にも考えてなかった。少しは認めていたけど、間違ってもあんな奴に、アトラを渡すわけにはいかない！」
認めていたのか？
俺がいたらそう尋ねていたな。
そうしてフォウルはバッと反転し、アトラの方に向けて技を放ったそうだ。

それを見切って紙一重で避けるアトラ。
「……お兄様、これは何の冗談ですか？」
「アトラ、お前が間違った道を進もうとしているのを俺は全力で阻止してみせる！」
「裏切るのですか？」
「裏切る？　俺は常にお前の味方だ。ワガママなお前では、お前が望むアイツには好かれないことがわかった。兄ならばこそ、俺は……お前を立派な女性に育て上げてみせる！」
「フ……お兄様は私に歯向かうのですわね。では容赦しませんわ！」
って感じでフォウルとアトラの攻防が始まり、結果、今夜はフォウルが勝利したってことらしい。
微妙に頭が痛いことになっているな。額に手を当てて呻うめく。
「些いささか脳のう味み噌そ筋肉的じゃないか？」
「まあ……その、私も藪やぶを突つついてしまった気はします」
「姉貴は悪くない！」
「実年齢はお前より年下だぞ？」
「そんなことは関係ない！」
うーん……まあ、これでアトラに関する問題がある程度解消するならいいか？

シルトヴェルトの重鎮の前で神＝俺とかを宣言した挙句、俺は間違えないとか言い放ったからな。

説教しても俺に説教してもらったとかで喜んでいたし。

フォウルが上う手まくアトラを教育できればいいのは確かだ。

正直、もう少し教養を身につけてほしい。

病弱だった時のアトラは教養があるように見えたんだけどな……恋は人を変えるというが……。

「ともかくみんな疲れていますし、私も寝ますね」

「ああ、お休み。フォウルはアトラの監視か？」

「そうだ。お前に従っているわけじゃないからな」

「ああ、はいはい。お前の妹が暴走しすぎないなら俺は文句は言わない。程々に相手をしてやるから」

「アトラに何をする気だ！　まさか手を出す気じゃ――」

俺が不快そうに思い切り睨にらんでいるのを見てフォウルが黙りこんだ。

「俺が言った意味が、一緒に行動してたらわかるよな？　程々というのは話し相手という意味でだ」

「わ、わかった」

そう言いながら不満げにフォウルは去っていった。

アトラを縛っているところにでも行ったのか？
疲れたし……そろそろ寝るか。
なんて感じに俺はその日は就寝したのだった。
翌日。
昼間は旧都を目指して移動し、明日には旧都に攻め込める、というところまで来た。
会議が終わった後、宿泊している宿でのこと。屋敷が狭いので町で一番の宿に泊まることになった。
昨日の続きとして風呂までの間に稽古をしている。
俺はスキルに魔力を込められないかを試行錯誤しながらエアストシールドを放つ。
そしてジッとエアストシールドを見ると、所々で魔力の流れが弱い箇所が見受けられる。
「アトラ」
「なんですか？」
「俺が出した魔法の盾を壊してみろ」
「はい」
俺が命令するとアトラはやはり、魔力の弱い箇所を突いた。

バキンと音を立てて、盾は簡単に破壊される。
やはりそうだ。
ということは……体の中にある魔力と気を集中させてスキルを発動させる。
「エアストシールド！」
出現した盾をまたアトラが突いて壊した。
確認するとこれも力の流れが弱い箇所を突いている。
やっぱり叩たたくべき場所がわかっているんだな。
「あんまり変わりませんわ」
「そうだな……失敗だな」
というかこの方法って魔法を唱える時の魔力の込め方とあんまり変わらないんだよな。
『力の根源たる盾の勇者が命ずる。理ことわりを今一度読み解き、彼かの者を守れ！』
「ファスト・ガード！」
魔力を練って、通常必要な分を消費するところで、更に込めて放ってみる。
……予想よりも魔力が減っている。しかもＳＰまで低下した。
一応成功はした。
効果は……自分のステータスで確認。

普通のファスト・ガードよりも威力が目に見えて向上している。
やはりそうだ。
普通の魔法を唱える時に込める魔力の加減で強弱を調整できるのは魔法書でわかってはいた。
常に一番強く撃っていたつもりだったが、まだ上があるということだろう。
う～ん、魔法を習得する時よりも難しい予感がする。
セインやリーシアの話を総合すると、気はＳＰとも異なる要素なのは間違いない。
ただ、ＳＰにも類するものなのか。
この感覚を理解し、魔力を込められるようになれば、もっとスキルを強化できるような気がする。今のまま盾の防御力だけで相手の攻撃を防ぐのでは、いずれ限界が来ると思う。
とりあえずは魔法の威力向上ができるようになったのを喜ぶとしよう。
「こう――」
セインが実践してみせている。
なんだ？　手をかざしているだけに見えるんだが……キールぬいぐるみが何かにぶつかったようなパントマイムをしている。
「こうするのですか？」

アトラがそれを真似すると、セインよりも高出力の……壁みたいなものが出現している。

「尚なお文ふみ様の力に似ていますわ！　やりましたわ！」

パッと見だとエアストシールドの再現に見えなくもない。

「セインさんはなかなかの腕前のようですわね」

「知ってる――」

当然のように見せているけど、なんで俺達との戦いでやらなかったんだ？

そう思うが……セインの放った壁の耐久力を見るとあんまり頼りにならない程度のものしかできないってことなのかもしれない。

「リーシアさん、僕はいつになったら覚えられますか？」

「もう少しの辛抱ですよ」

このやりとりを見て呟つぶやいた樹いつきに、リーシアが答える。

「この力があればラフタリアさんやお兄様に後れを取ることはないかもしれませんわ」

「させませんよ」

「そうだ。俺を止められるものなら止めてみろ！　アトラ！」

なんかアトラに対してラフタリア達の闘志が燃え上がっている。

いい傾向ではあるんだけど……止めるべきか？

「ラフー」
ラフちゃんがラフタリアの肩から俺に飛び乗る。
「そういえばセイン、注文したものはできたか？」
「ここに――」
と、セインが俺の注文していた……ラフちゃん用巫み女こ服を取り出して渡してくる。
「おお！　よくやったな。ささ、ラフちゃん。これを着るんだぞ」
「ラフー？」
ラフちゃんに巫女服を着せてから改めて確認する。
うん。ラフタリアが似合うようにラフちゃんもしっくりくるな。
難点といえば服を普段着ていないラフちゃんが着るとコスプレっぽいところか。
「ラフーラフラフ」
ラフちゃんがラフタリアの真似をして木の棒を持ってポーズを取っている。
「おー、いいぞ！　ラフちゃん。巫女服ラフタリアに負けないように人々を魅了していくんだぞ」
「ラフー！」
天命への信仰心が強いクテンロウなら、ラフちゃんの魅力を理解してくれる人達がいるかもしれない。俺は俺で布教をやめる気はないぞ。

これでもかとラフちゃんを撫なで回す。巫女服ラフタリアに同じことをしたら怒られそうだしな。

「あらあら」

サディナがそんな俺達を見て微笑ほほえんでいる。

何がおかしいんだ？

「キュアアア」

「フィーロもその服、着てみたーい」

「ガエリオンは既にしめ縄を装備してるだろ。フィーロは……似合うか？」

洋風美少女のフィーロに巫女服ってチグハグな気がする。

少なくとも今のワンピースほどは似合わないだろ。

「多分、人の姿だと似合わないぞ」

「えー……じゃあラフちゃんみたいにフィロリアルの姿で着るー」

想像してみる。

ん──……似合うかもしれないが……フィロリアル姿のフィーロがクテンロウの町を歩く時の姿が頭に浮かぶ。

「フィロリアル姿の時は化粧回しとか着けてるだろ」

フィロリアル姿でのフィーロは土佐犬のような化粧回しを装着して町を歩いている。

そういう意味ではガエリオンとお似合いだな。
「でも着てみたい」
「ああ、はいはい。後でな。変わった服装ならフィロリアル姿でふんどしでも着けるのはどうだ？」
どっしりとした体形に非常に似合いそうだ。
「キールくんの格好でしょ？　なんか変じゃないー？」
「巫女服よりは似合うかもな」
メルティ辺りに怒鳴られそうな格好とも言えるけど。
しかし、遠回しにキールを変だと言っているような……。
「そうなのー？」
「な、なんでラフちゃんが巫女服を着てるんですか!?」
しばらくして、そのことに気付いたラフタリアが声を上げたのはまあ気にしないことにしよう。
やがて日も沈んできた。
今日は夜のパレードはしない。昼間の間にやったようなもんだからな。
「ああ、尚文様、今日こそはご一緒したいです」
「散々稽古しただろ」
「まだ足りませんわ。ずっとずーっとお供したいです」

「風呂にまで一緒とか言われてもな。フォウル、これくらいの意味は、わかるだろ？」
「あ、ああ！」
フォウルに手綱を握られたアトラは相変わらず抵抗しようとがんばっているようだが、状況が悪いな。
「じゃ、風呂に行ってくる」
「旧都やこの辺りには呪いに効く温泉もあるそうですよ。ここの風呂も温泉だそうです」
ラフタリアの言葉に頷うなずく。
カルミラ島の温泉みたいな場所があるのか。
いいな、呪いを受けた今の俺達には丁度良い！
「混浴でご一緒したいですわ」
「そんな真似をさせるわけにはいかない！　アトラの裸体を見せられるものか！」
アトラの言葉に若干ギクリとする。
ラフタリアやフィーロと一緒に混浴で入ったことがあるんだよな。
まあラフタリアは娘みたいなものだから気にする必要はないんだがな。
「お姉さんはナオフミちゃんと混浴もいいかなー」
「ここにもいるな、痴女が」

「えー？　お姉さんとの混浴は嫌かしら？」
と、サディナが後ろから抱きついてくる。
「悪いが興味ない」
「クテンロウって混浴の銭湯多いわよ？」
そういえば銭湯があったな……江戸も似たようなものだったとか。
「絆きずなさんの世界の方でも場所によってはありましたよ。ラルクさんが入ろうとしてグラスさんに怒られていました」
「おかしくなる前の元もと康やすと一緒に覗のぞきをしようとしてたしな。確か、アイツはロマンとか言ってたな」
ラルクの立場だったら女なんてより取り見取りだろ。本人はテリスが一番みたいな態度だったけど。
「それはそれこれはこれ、と言っていました」
アイツらしいな。その光景が目に浮かぶようだ。
「ともかく、風呂に痴女共が入ってこないように監視しておけ」
「わかりました」
女が男湯に入ろうとする……なんか間違っているような気がするが、気にしないようにしよう。
てな感じで俺は温泉に入りに行った。

「ああ、尚文様！　お兄様、今日こそは許しませんわ！」
「許されなくていい。好き好んで野郎と一緒に入浴しようとするアトラを俺は止めねばならない。そんなはしたない女性ではダメだ。妹を立派な女性に育て上げるためにも俺は心を鬼にしているんだ」
「私は既に立派ですわ！」
いやー……少なくとも男湯に突撃しに行く女が立派だとは思えないぞ。
相変わらずドッタンバッタンと騒がしい連中だな。
絆か……あの頃と比べると騒がしくなったな……嫌ではないけど、程々にしたいもんだ。

## 九話　殺さつ戮りくの巫女

「ふう……」

宿の浴場に入って溜め息いきを漏らす。
湯煙が濃いな。とりあえず体を洗ってから入浴するか。
「あちゃー？」
……凄すごく不吉な声が聞こえた。
声の方を見ると、ゾディアがなぜか先に風呂に入ってこっちを見ている。
服を着たままとか斬新だな。
「こんばんは、なおふみちゃん。こんなところで会えるなんて偶然ね」
「……男湯に偶然なんてあるのか？　なおふみちゃん言うな」
「男湯なの？　いろんなところを迷ってたらここに出ちゃって」
すげー……方向音痴だとは思っていたが、男湯に間違って入ることができるのか？
ただ、昨日のことを考えるとありえないとも思えないのが凄いな。
「そういえばお湯ね。水だと思ってた」
「まだアルコールが抜けてないのか？」
「もう酔ってない……」
「あっそ」
ゾディアが湯船から出て俺に近づいてくる。
「なんなら背中洗う？」

「男湯だから出てけ」
「あちゃー、湯上がりの私が気にならない？」
何を言ってるんだコイツは？
こんなところを他の連中に見られてみろ、どんな騒ぎになるかわかったもんじゃない。
方向音痴で迷い込んだなんてどう見てもありえない状況だってのに。
迅速にゾディアをここから追い出したい。
「興味ない」
「身持ち堅いー。もっと柔らかくしないの？」
「しない」
「んー……湯上がりに遊ばない？」
「昨日の約束か？」
俺の質問にゾディアが頷うなずく。確認のために警備の連中を呼んで罠わなに掛けるか？
「負けたら脱いであげる」
「脱ぐな。カードゲームだぞ？　あと、変な話題に持っていくな」
「じゃあ札だけ。もっと教えて遊びたい」
俺を信じて遊びに来たって感じだ。これで本当にサディナの妹とかだったら

……裏切る形になってしまうのか？
できれば間違いであってほしいが……妹だった時は畳みこんで生け捕りにしよう。
「……ともかく、脱衣所の椅子に座ってろ」
「はーい」
「一応確認だが、今日はどうしてここに来たんだ？」
「天命様を見に」
「まだ見てないのか」
どこまで方向音痴なんだよ。
俺の読みが違ってたら、風呂上がりにゲームをするついでにラフタリア達を紹介してやるか。
そう考えているとゾディアは脱衣所の方へ歩いていった。
まったく……そう思った直後、風が吹く。
もう出ていったかな？
そう思って早めに風呂を上がったのだが。
「ふう……ほら、風呂から上がったぞ。相手してやるから……」
ゾディアの奴がいない。
「おーい」

いくら呼んでも出てこない。女湯にでも勝手に入っているのか？
そもそもこの宿は貸し切りだし、変なところに見知らぬ奴がいたら騒がれるはずだ。
「あ、ごしゅじんさまお風呂から出たのー？」
「ラフー」
フィーロとラフちゃんがやってきた。
まだ騒がしい音が聞こえてくる。アトラ達の攻防が続いているようだ。
「ああ。ところでフィーロ、ラフちゃん、女湯を見てきてくれないか。ゾディアっていう女がいるかもしれないんだ」
「え？　わかったー」
「ラフー」
フィーロとラフちゃんが女湯を見に行って、すぐに戻ってくる。
「いないよ？」
「ラフー？」
「む……なら、どこへ行ったんだ？」
まさかさっき風が吹いた時にどこかへ行ったとかか？
きっとまた道に迷っているんだろう。今度会った時に注意しないとな。
神出鬼没の方向音痴女に注意しよう。寝てる時とかに出てきたら怖い。

「尚なお文ふみ様ぁあああああ！」

「まだ騒いでいるのか、やかましいな……」

「セインお姉ちゃんに教わった技でラフタリアお姉ちゃん達と遊んでる」

ふむ……アトラが着実に強くなっているというのは事実なんだろうな。

ラフタリアやフォウルも負けちゃいないはずだけどさ。

「サディナお姉ちゃんが面白そうってアトラちゃんの助太刀とかしてるよー。ごしゅじんさまと混浴が楽しそうって」

「あの酔いどれめ、余計なことを……」

決戦が近いというのに、こんなしょうもないことで遊んでいるんじゃない。

「ともかく、さっさとそんな争いは止めに行くか」

「うん。ごしゅじんさまとお風呂入りたかったら柵を乗り越えるだけでいいのにね」

「ラフー」

……今回フィーロはやらなかったけど、アッサリと突破される方法を教えられた。

こっちも後で注意しておかないとな。

なんて感じに、アトラ達のところに戻ったところで騒ぎは静かになった。

「今日も楽しかったわね、ナオフミちゃん」

「よくもまあ抜け抜けと言うな」
湯上がりのサディナが団扇うちわであおいで涼みながら庭を見て言った。
ラフタリア達は疲れたのか先に休んでいる。
アトラは縛られて転がされた挙句、フォウルの監視下で眠ることになった。
最近暴れっぱなしだな。いい薬かもしれない。
で、サディナはしれっと湯上がりの酒を飲み始める。
ここ数日の強行軍や稽古で、ラフタリア達も大分疲れが出ているからなぁ……むしろ疲れてない方が異常か。
俺か？　俺は思ったよりも疲れがない。
気の使い方も大分わかってきたし、守り専門だから大きく動きまわる必要がない所せ為いかもしれない。今度ラフタリア達に栄養剤を支給すべきかもしれないな。
「それでナオフミちゃん、お姉さんに何かご用？」
「まあ、色々とな」
「じゃあお姉さんは服を脱いでスタンバイすればいいのかしら？」
「どうしてそうなる！」
まったく……なんか最近、この手の奴に絡まれることが増えてきた気がするな。
俺はこの世界で所帯持つ気はないっての。
「考えてみればラフタリアの家柄に関しちゃある程度聞いたが、他にも知らない

ことが沢山ある。いい加減聞いておかないといろんなところで問題が起こりそうだと思ってな」

「あら、そういうこと？　革命派の人達に聞けばある程度わかると思うのだけど？」

「それにしたって断片的すぎる。サディナ、お前もだ。お前の経歴自体も謎が多い。妹がいるみたいだしな」

「ナオフミちゃん、ミステリアスな女性は男を引き寄せるのよ」

「ふざけるのも大概にしろ。ラフタリアの問題を片付けるためにクテンロウにまで乗り込んできたんだぞ」

俺の問いにサディナは酒を一杯飲んでから俺に視線を向けて、トンと酒瓶を置く。

ん？　俺とは反対側に盃さかずきがあるぞ？

「そうね。ここまで来たらもっと詳しく説明しておいた方がいいかもしれないわね」

その声は普段のふざけた様子とは違っているようだった。

ちょうどクテンロウからの襲撃の前、ラフタリアを酔い潰つぶした時の声と重なる。

やっと真面目に話をする気になったか。

「まずは何を知りたいのかしら？　ラフタリアちゃんのご両親に関してはもう知ってるでしょ？」

天命の血筋で、跡目争いに嫌気が差して国を出た……までは知っている。

「それをお前の口から知りたいとは思うが……まずはサディナ、お前のことを聞いてからの方がよさそうだとは思っている」

サディナはなんだかんだで顔が利くし、時々水竜の巫み女こ、殺さつ戮りくの巫女等の呼び名で呼ばれることがある。

いろんな役職名を持っていたことくらいはわかるけど、それ以外にも聞かねばならないことが多い。特に同族が相手として出てきても微み塵じんも加減をしないところとかな。

最近では生け捕りにできることが増えてきたが、クテンロウに入るまでは自害する者も多かった。

「お前は同族内でも極端に強いし、同じ魔法を使っている奴を見たことがない」

今までサディナの同族らしい連中と何度か交戦しているけれど、サディナと同じ雷の魔法を使う奴は見たことがないんだ。

サディナクラスの連中がぞろぞろ出てくるかと思ったが、さすがにいない。

それでも勇者の武器を無力化させられた上での、技術に物を言わせた戦いは厳しいものだったがな。

「あらー、確かにそうかもしれないわね……ここまでがんばったナオフミちゃんならお姉さんのことを話してもいいかしらね」

ふざけた調子は完全に消して、今度こそサディナは話し始めた。

「特にお姉さんのいた村というか集落は同種族内でも色々と複雑でねー」

「同族でも違いがある的な感じか？」

シャチという生き物には分類が存在する。見比べると色々と違うようにな。

魚を主食にするレジデントと哺乳類も食べるトランジェント、他によくわからない分類のオフショアとか合計四種類は観測されている。そんな感じで似ていても異なる種族ってことだろう。

「亜人と獣人の姿に妙にこだわる時があるよな？　何か理由でもあるのか？」

「できる限り有能に見せるために獣人姿でいることがあるのよね。亜人の姿は人目を避けるためにしか極力使用しないとか、シルトヴェルトでもあったでしょ？」

ヴァルナールとかその辺りの連中が気にしていた覚えがある。

亜人姿だと敵意がないことを表しているみたいな扱いだった。

サディナは獣人姿を普段の姿と印象付けさせて、亜人姿は潜伏用とかに使い分けているのだろう。

「クテンロウ内じゃサカマタ種は近隣種と種族的には同じなんでしょうけどね」

先ほどのシャチ談義だな。

亜人へ変身する能力を持っていないのがルカ種とかいうらしい。近い別種扱いで、サカマタ種とも別扱いらしいけど。

「……お姉さんのところはもう少し血筋にこだわってたかしら。人間なら人間で血筋にこだわるところ、あるでしょ？」

「まあな。メルロマルクとか露骨じゃないか？」

女王とかメルティとか家柄は良いだろうし、血筋に関してはこだわりを耳にする。

勇者の血筋を━って感じでヴィッチが俺に濡れ衣ぎぬを着せたのを女王が怒った際に言っていた。

盾の勇者の子供を宿したんなら━━みたいな話をな。

「お姉さんはね、水竜様を祭る家系であり、天命様の裁きの代行者、つまり処刑を司つかさどる家系なのよ。要するに汚れ仕事の家系」

「そこだ」

サディナの代わりに妹を産んで補ったとかどんだけ歪ゆがんだ家なんだろうな。

「あら？」

「水竜を祭っているのにラフタリアの家の代行者ってのに違和感があるんだが」

「まあさっきも言ったけど、高貴な立場の人達のために汚れ仕事をする役目ってことね。一応、神様の裁きって扱いになるんだけど」

うーん？　なんとも複雑な役職だな。
「要するに水竜と天命の雑務担当？」
「あらー言われてみたら確かにそうね。二つの神様を信仰する巫女って位置付けなら間違いないわね」
「それで？　サディナ、お前が雷の魔法が使えるのは特別な加護を授かっているからとか……か？」
サディナは近接戦闘も魔法も両方使えるし、合唱魔法まで唱えられる万能戦士って感じだ。
戦闘に関しては元からある能力的な面を除いても、スペックがあまりにも高い。
「いやーん、ナオフミちゃんがお姉さんのことを知ろうとしてるー」
「ふざけるな」
こうしてふざけた会話で煙に巻くのが得意なサディナだが、逃がしはしないぞ。
「……お姉さんが雷の魔法を使えるのは生まれつきよ。珍しいみたいだけどね。代々続く家の中にはいるみたいだからそういう家系なんじゃないかしら？」
「ふむ……生まれつきか」
「サカマタ種やルカ種だと水系の魔法の資質が基本なんだけどね。お姉さんのところだと別属性の資質持ちが結構いるわ」
「家系的資質？」

「そうかもね。とはいえ、お姉さんは飛びきり珍しいそうよ。ナオフミちゃんがーお酒に酔わないのとおんなじ」

そう言われると答えようがない。

ルコルの実を食ってると気色悪がられる。悪食に見えるらしい。

「物心ついた頃には雷の魔法の資質があるのがわかって、もう使えたのよ」

……水中で高電圧の雷が意のままに操れるんだったら、強いだろうなぁ。

現にサディナが追い詰められたことって、俺達と戦った時以外ではほとんどない。

あの時でさえ、本気だったか怪しいしな。

魔竜戦の時くらいか？　手も足も出なかったのは。

「家も代々水竜様に従う家系でしょ？　割とすぐに巫女の仕事をやらされ始めて、お姉さん幼い頃に急成長させられちゃったの」

亜人獣人はLv上昇で成長を加速することができる。

ラフタリアだって外見と実年齢に大きな差があるしな。

サディナは幼少の頃から英才教育を受けていたってことなのか？

「それで、後はまあ村や国の仕事もするようになっていったのよ。だからお姉さん、同世代のお友達とかあんまり知らないのよね」

「ああそう……」

「んもー、ナオフミちゃんのいけずー」
「はいはい。そんな境遇でどうしてそんな性格になったんだ？」
「さあ？　お姉さんもその辺りはあんまり自覚ないのよね」
……その性格、天然物なのか？
「後はまあ、武術に関しては覚えたいと思ったら国の武人が集まる現旧都の天命様のお城で幾らでも稽古できた所為でしょうね。いろんな人に稽古を付けてもらったのよ」
「アッサリと言うな」
「お姉さん、アトラちゃんみたいな天才なんじゃないかって自うぬ惚ぼれちゃっていいのかしらね？」
「自惚れていいのかと聞いてくるのはどうかと思うが……」
確かに戦闘センスから何から高スペックの化け物に見えなくもない。
何が苦手なのかってのを逆に聞きたいくらいだ。
見て覚えるアトラと同じことができるって点では、確かにサディナはアトラ並みの戦闘センスを持っているとも言える。
「確かに戦闘センスはずば抜けているかもな」
「ナオフミちゃんに褒められちゃった！　えへ！」
「えへ！　じゃねえ！」

「ま、稽古後のお酒目当てだったのだけどね」
「結局は酒か。つーかその頃から酒飲みだったのかよ」
「そうね――……今にして思えば、現実逃避だったのかしら？　家柄のプレッシャーとか色々とあったし」
「その頃の方がまともな話ができそうだな」
俺の言葉にサディナは苦笑いを浮かべる。
「その頃にナオフミちゃんに会ったら、アトラちゃんみたいになっていたかもしれないわね」
今もあんまり変わらないんじゃないか？　とは思ったがグッと堪こらえる。
サディナが本気で突撃してきたらラフタリアやフォウルじゃ止められない気がする。
「話が逸それたわね。お姉さんがやっていた仕事は三つ。まずは水竜様の巫女としての仕事ね。こっちは水竜様の声を聞いて、加護を受けて神社の行事を行うこと。まあ神社の仕事は親がしていたから水竜様との話くらいかしら」
サディナが巫女ね。不良巫女ってイメージだな。
お神酒とか盗み飲みしている光景が思い浮かぶ。
「今でも祝詞とか言えるわよ――」
「へー」

「お姉さんの巫女の仕事ぶりに興味ないの？」
「ぶっちゃけ経過さえ聞ければいい」
「過去にこだわらないナオフミちゃんったら、素敵ね」
「何が素敵なんだよ……」
かなり酷ひどいことを言ってる気はするぞ？
「次に天命様の巫女役ね。こっちは他にも色々と司る巫女や神主がいたのよ。お姉さんは正直、種族代表？　いざって時には権威の象徴として色々と戦う役どころよ」
「巫女というより将軍？」
「間違いないわね。神様に付き従うから巫女や神主って扱いなんだし、あのナオフミちゃんが贔ひい屓きにしている武器屋の師匠がいるでしょ？　あの人も役職でいえば神主ね」
あのナンパ野郎が神主ねぇ。
つまり国の有能な将軍や職人が授かる爵位みたいなものなのか。うーん。やっぱ独自の文化体系なんだな。
「で、その延長線上で国の暗部を司っているのが水竜の巫女を担うサカマタ種の代表ってわけ」
「執行人だったか？　罪人を処刑するポジション」

「そうよ。お姉さんの役目には執行人があったの。だから殺戮の巫女なんて言われたりもするのよ」
「なるほどな」
サディナが国内にいた頃のことを察するに、相当歪んだ地位にいたのは理解できる。
色々と俺の知らない話も多いみたいだし。
「雷の魔法で感電死させたり、刀で斬首にしたり、銛もりで一突きにしたり……いろんな処刑方法をしなくちゃいけないのよ」
「……」
「どう処刑するかは罪に応じて色々と細かい指定があってねー、小さな国でも結構あるのよ。しかも国の問題に狩りだされるし」
処刑に関して、俺はせいぜい残酷描写のあるマンガやゲーム、後はネットで大昔にあった資料を見たくらいだ。だから拷問されていたラフタリア達の苦しみに関しては察することしかできない。
「お姉さんの裁量で死罪の相手と勝負ってこともしたわね。お姉さんに勝てたら無罪って感じで。そっちの方が相手も納得してくれたのよ。死ぬ前に決闘で片付けられるからって」
サディナのポジションは、やりたくもない処刑を仕事だからとやらされていた

ということだ。だから勝負事にして罪悪感を軽減していたんだろう。
それらを肯定するつもりはないが、誰かがやらなければいけなかったんだろう。
正しい汚れ仕事ってやつだな。
ある意味、サディナはどこか人間として壊れてしまっている。
けれど、それを自覚しながら乗り越えてきたんだ。
なんとなく、年上だけどサディナには弱々しいところがあるように感じた。
「そうか」
安易な同情をして察した振りをすることは簡単だ。
だが、それではサディナを慰めることにはならない。
ただ、黙って隣に座って話を聞いてやるくらいしか俺にできることはないだろう。
「……」
サディナは酒の入った瓶を振ってみせてからコップを出して俺に注ぐ。
同情なんて求めちゃいない。聞くだけでいいってことだ。
俺は酒を注がれたコップを受け取り、飲み干す。
ケラケラと笑うサディナは虚勢を張っているわけでもなく、素直にこの時を楽しんでいるように見えた。もしかしたらサディナは俺の苦労をそのまま追体験しても、今みたいに笑っているのかもしれない。

俺もいつまでも過去の冤罪を引き摺っているのがバカバカしく感じるな。
まあ、そう思っても、割り切れるものではないが。
「随分と悩みが多そうな職場だな」
「そうかしら？」
「ああ」
「お姉さんの悩みって神託がなかったことくらいかしら？」
「ああ、あの怪しげな資質か」
俺がそう言うとサディナはケラケラと笑った。
酔っ払っているのとは少し違う感じだ。
「その頃のお姉さんは演技をするのが下手だったから、真面目に悩んでいたのよ」
今は本心を全然見せないじゃないか！
「天命様の祝福を施されると、もっと凄いことができるんですって。それが桜天命石だったんでしょうね。お姉さんのいた頃はこんなにばら撒いていなかったけど」
天命に少ない祝福しか授けてもらえていなかったことが、サディナにとってのコンプレックスだったってことなんだろうか？
「その所為で親からお姉さんへの風当たりは結構強かったわねー。親らしいことは全然してもらえなかったわ」

「親はサディナに仕事を丸投げしてたっぽいしな」
「ええ、物心ついた頃には既に力じゃ勝てると思っていた相手よ？」
「親が弱いんじゃなくて、お前が強いんだろうな。神託とやらがないのはサディナの酒の強さの所為で心が暴走できなかったに過ぎん」
「あらー」
　俺の言葉にサディナが笑っている。
「そうね。特に仕事でヘマとかしたことないし、神託の才能さえあれば歴代で一番の巫女だったろうって言われていたわね」
「下戸であることが才能だったら、俺は突き抜けて才能なしになるぞ？」
「そうね。今にして思えばバカバカしいかしら。酔って先祖が降臨したーとか言いながらありもしないことを言ってる人達ばかりだったと思うわよ？」
　狂った環境だな。広い視野を持つことで見えてくる異常ってやつだろう。
　何か可哀想な奴に思えてきたぞ。
　俺も割と親には放任されて育った方だ。
　まあ、自覚していたからしょうがないけどさ。
　この歳になればそれなりに世の中がわかってくるから言えることだが、親と子供にも相性がある。
　どちらか一方が悪いわけではないんだろうが、合わなかった経験というのは多

少あるつもりだ。
　だが、サディナの家はかなり歪んでいる。
　……サディナは、子供としての幸せってのを知らずに大人にさせられてしまったのか。
　俺がラフタリアにしてしまったこともそうなのではないかと思ってきてしまう。
　ラフタリアにはもっと子供のようにはしゃいでいる時間が必要なのではないだろうか？
「その頃の天命様はラフタリアちゃんからするとお祖じ父いさんね。よく病に伏せっていたわ。私のことを神託を持たない汚れた巫女だと、マキナと一緒に罵ば倒とうしてきたわねー」
「嫌な奴だな」
「しょうがないのよ。どっちにしてもね、そんな日々が死ぬまで続くんだろうなーって思った頃かしら、ラフタリアちゃんのお父さんに出会ったのは」
　サディナは思い出を懐かしむように夜空を見上げる。
「次期天命ってことだな」
「そうね。責任感がとても強くて、利発で、常に周りに人がいるような人だったわね」
　とか言いながらサディナは俺を見る。

「なんだ？」
「ナオフミちゃんが村の子達の面倒を見ている時の姿に似た感じの人だったわね。もう少し柔らかい感じかしら。優しいところが似てるわね」
「そう言われてもな」
まあ、ラフタリアの親代わりをしているんだし、自然と重なってしまうのかもしれないが。
優しくはないだろう。俺は独裁者だからな。
「罵倒されたお姉さんを励ましてくれて、何かあると声を掛けてくれたのよ。いろんな話をしたわね」
出会いか。
割と何でもそつなくこなすサディナにも苦労していた時期ってのはあるんだな。
「そんで、とってもお酒が強かったわー。お姉さんとそれなりに飲み交わしていられるくらい」
なんかテンションを上げてサディナが俺に笑い掛ける。
「ナオフミちゃんと出会うまで一番だった人なのよ」
「ああ、酒飲みが好きなんだっけか？　つーことは異性として好きだったのか」
「んー……そんな関係じゃなかったわね。もちろん、好きって気持ちはあったわよ。だけど、全然振り向いてもらえなかったし、お姉さんもそんなことを言うのは

稀まれだったわね」
　そうか？　何かあると誘惑してくるくせに、ラフタリアの父親には言わなかったのか。
「ラフタリアちゃんのお父さんは天命様の子供の中で一番継承権が高かった人でね、他に腹違いの弟姉妹が何人かいたはずよ」
　確か暗殺とか色々とあったんだったか……ラルヴァがそんなことを言っていた。
「まあいい。話を続けろ」
「ラフタリアちゃんのお父さんは、旧都のいろんなところにお姉さんをこっそり案内してくれたのよ」
「ほー……」
「気が利く人だったけど、その分、色々と悪さも経験してるって感じだったわね。お姉さんに声を掛けたのも執行人ってどんなことをするのかを知りたかったからみたいだったし」
「好奇心は猫を殺す。余計なことに巻き込まれそうな奴だな」
「かもしれないわね。だからこそお姉さんは助けてもらえたんだけどね。あの頃のお姉さん、相当張り詰めていたと思うわ」
　随分と酷い生まれみたいだもんな。
　多少性格が捻ひねくれたとしてもしょうがないだろう。

「お姉さんの仕事を聞いて、軽率なことを聞いて申し訳ないって謝ったのが印象的だったわ」
「そんな返答をしたのはラフタリアの父親が初めてってことか」
サディナは普段のふざけた様子はなく、空を見上げている。
「やっぱり好きだったんだな」
「んー……ちょっと違うかしら。こうしてナオフミちゃんと出会って比べてみるとね」
あのな……とはいえ、サディナ本人がそう言うのなら間違いないのだろう。
「それにラフタリアちゃんのお父さんには好きな人がいたし」
「ラフタリアの母親か？」
サディナは静かに頷いた。思うところとかあったのだろうか？
「一応天命様からは凄く遠い血縁のラクーン種だったかしら？　そんなの関係なくラフタリアちゃんのお父さんはお母さんを選んだんでしょうけどね」
「どんなきっかけで知り合ったんだ？」
「城で女中の仕事をしている人だったわね。料理が上手で他の家事もできる。頭も良くて優しい……凄く家庭的なお母さんだったわ。ラフタリアちゃんのお父さんの方が熱を上げてて、口説き落とすのに苦労していたわ」
サディナの答える様子から、何か微笑ほほえましい光景だったんだろうなって

感じられる。
「そんな日々が結構経った頃かしら。天命様の容体が悪くなっていく中で、誰が次期天命になるのかって話になってね――……どうも直系のラフタリアちゃんのお父さんは、素行の悪さから相応ふさわしくないとか色々と因縁をつけられるようになったのよ」
アレだ。江戸時代とかのイメージだと大奥みたいな争いがあったのかもしれない。
俺は女の醜い権力争いの縮図みたいな大奥が嫌いだ。
大奥というより、長い戦いが終わって平和になった世界を食い潰している、そういう連中が嫌いといった方がいいのか？
だからラフタリアの親父が権力争いから逃げ出すことになるのも理解できた。
「表向きは何も悪さをしていないのに、因縁をつけられていたわね。ラフタリアちゃんのお父さんが会う時に限って天命様の容体が悪化したし」
……何か陰謀を感じるぞ？
「ラフタリアちゃんのお父さんの話じゃ、このままじゃ次期天命争いで自分は殺されるかもしれない。要らぬ争いに巻き込まれるくらいならと……お姉さんに国を出る相談をしてきたのよ」
「厄介な問題に巻き込まれたな」

「その頃にはお姉さん、ラフタリアちゃんのご両親くらいしか親しい相手がいなかったし、派閥争いに関しては蚊帳の外だったもの」

神託とやらの怪しげな才能がなくて地位が低かったらしいしな。

サディナに才能がないとか、目が節穴だろう。

「で、他にも協力者に相談したみたいなのよ。お姉さんはどうしたらいいか水竜様にも相談したわ。そうしたら、お姉さんも護衛としてついていくのがいいだろうって水竜様から声が来てね――……」

「結局は国を出たわけか」

「ええ。水竜様や一部の協力者、ラルヴァとか今の革命派から、表面上の罰としてLvリセットを施されて、ラフタリアちゃんのご両親を守るために遣わされたのよ」

護衛ってポジションなのは変わらなかったのか。

「逃亡生活中、ラフタリアちゃんの両親がお姉さんの親代わりとしていろんなことを教えてくれたわ。普通の家庭ってこんな感じなんだって。お姉さんからしたらラフタリアちゃんの両親が、育ての親みたいなものなのよ。お姉さんの何よりも大切な思い出よ」

なるほど、だからサディナはラフタリアの両親とラフタリアを大事にしていたってことなのか。

「後は流れに身を任せるように、いろんな国を巡りながら亜人を排斥していたメルロマルクに辿たどり着いたわけ。で、丁度亜人の国との融和政策をしている領主様と知り合ったの」

「色々と大変だったんだな。ところでラフタリアはお前のことを姉さんと呼ぶが、少し関係が遠く見えないか？」

姉妹みたいに育ったってのとはちょっと違う気がする。

近所のお姉さんってポジションだろ。

「そこはラフタリアちゃんのお母さんが妊娠した辺りでお姉さんも自立して、距離を少し取ったからに決まってるじゃない。ラフタリアちゃんのお父さんは気にしてなかったけど、お姉さんに似たら大変でしょ？」

「似せようがないと思うがな」

「あらー」

それだけ大切にしていた者達が最初の波で亡くなった、か。

ラフタリアを大事にするはずだ。

実の親にはまともに愛情を注がれず、ラフタリアの両親が親代わりに色々と愛情の類たぐいを教えた。

ある意味サディナがラフタリアの姉ってのは正しいんだろうな。

「サディナの出生とラフタリアの両親に関してはある程度わかった。後は……天

命の血筋に関する話か」
「さすがにその辺りはお姉さんも報告以上のことはわからないわよ」
「そうだろうな」
ラルヴァから聞いた話を整理すると跡目争いで随分と暗殺等が横行し、クテンロウには天命の血筋は今では一人しか残っていない。
それも、子供だそうだ。
フィロリアル好きで生類憐あわれみの令を出して、配下には出し惜しみせずに桜天命石の祝福を施している。
実質実権を握っているのは国の幹部達で、天命はただの旗印でしかない。
察するに、背後にいるマキナとやらが黒幕だ。
「まあ、またクテンロウに戻ってきて、国を乗っ取ろうとするなんて夢にも思わなかったわねー」
そう言いながらサディナは酒を飲む。その先には誰もいないにもかかわらず杯がある。
これはラフタリアの親に手向けているってことなのかもしれない。
「しょうがないだろ。文句があるなら、この国の連中に言うんだな」
「文句は言わないわよー。だけど、改めて思うとくだらない立場に固執していたのよねーっておかしくなっちゃうわね」

「ふむ……」
俺は珍しく能弁なサディナに近寄り、抱き寄せて背中を叩たたく。
「ラフタリアの両親もお前のことを褒めていると思うぞ。むしろ無茶しすぎだ。少しくらい気を抜け」
ヘラヘラしちゃいるが、かなり気を使って無茶なことをしているんだな。
きっとアトラと一緒に悪ふざけするのもラフタリアの実力を確かめているとかなんだろう。
「でも、お姉さん、守れなかったのよねー、村のみんなやラフタリアちゃんのお父さん達を」
「俺が言っても気休めにしかならないだろうな。だがあえて言ってやる。お前は全知全能の神様にでもなったつもりか？　そりゃ助けられるなら凄いだろうが、残念だが俺達は神じゃない」
少なくとも魂を見ることができるラフちゃんを頭に乗せた時に村には亡霊はいなかった。
ラフタリアも悪夢に苦しんではいたみたいだけど、乗り越えたんだ。
「無責任なことしか俺は言えないけど、『サディナ、絶対に助けてくれるはずなのに！　この嘘うそつき！』なんて他力本願なことを言う奴がいるんだったら、俺はそんな奴見捨てろと言う」

だってそうだろ？
他力本願の極みだろう。
俺は盾の勇者だ。
何が悲しくて他力本願の連中を守らねばならない？　と何度考えたか。
だが、守らねば進めないからこそ、守るんだ。
「ラフタリアの両親は、お前にそんなことを言う奴等か？」
「……言わないわねー。率先して少しでも誰かを助けるために相手の注意を引いたと思うわ」
「そういうことだ。サディナ、お前はラフタリアを助けるためにゼルトブルでルロロナ村の奴隷捜しをしていたんだ。それだけで十分だったと思うぞ」
奴隷狩りの経緯から調べたとしてもクズが統治していた状態のメルロマルクでは、亜人獣人のサディナだとラフタリアや村の連中を回収するのは難しかっただろう。
だからゼルトブルで間接的に助け出していたんだ。
できることはやり尽くしていた。
運が悪かったのはラフタリアを俺が買ってしまったことだろうな。
もしかしたら俺はラフタリアにとって余計な存在だったのかもしれない。
「まあ、今はラフタリアの親代わりは俺が継いでいる。お前は気にしないように、

変に力を入れずにがんばれよ」
　抱き締めるのをやめて俺はサディナを見る。
「じゃあ、お姉さんはナオフミちゃんのお嫁さんでラフタリアちゃんのお義か母あさんを目指せばいいわね」
「……はぁ」
　サディナにあれこれ説得したのは無駄だったか。
「さーて、ナオフミちゃん。お姉さんがんばるわよ」
　今にも飛びかからんばかりに立ち上がろうとするサディナを強引に押さえつけて、先に俺が立ち上がる。
　急いで逃げなきゃ危ないな。完全に発情状態に見える。
「がんばらなくていい！　酒に逃げずにさっさと寝ろ！」
「いやーんナオフミちゃん、逃げちゃダメよー！」
「なんですか騒がしい……サディナ姉さん！　何をしているんですか！」
　騒ぎを聞きつけて起きてきたラフタリアと一ひと悶もん着ちゃくあったが、それはいつも通りの光景だった。
　サディナの妹かもしれないゾディアの話をする間がなかったな。

## 十話　盾の強化方法

翌朝、俺達は旧都目掛けて進軍しながら最終的な打ち合わせをしていた。

「今日こそは旧都とやらを占拠しないとな。相手は本腰で事に挑んでくるんだろ？」

「先発隊が確認したところ、旧都の前に軍を展開、いつでも戦を始められる配置だそうです」

相手も今度こそ本気で挑んでくる気満々ってところか。

「籠城とか面倒なことはしないだろうな？」

「ナオフミちゃん達相手に通じるの？」

桜天命石の結界があればあるいは……自分が敵だったら難しいと考えるだろうな。

勇者ってこういう時に便利だな。特に俺は。

桜天命石の盾のお陰で安易に壊されなくなってるし、ラフタリアや樹いつきの

火力は高い。
　各個撃破できる優秀な将軍とかがいないと難しいだろうな。
　しかもラフタリアが掲げる方針、生類憐あわれみの令の廃止に賛同する国民を抑えるには並々ならない能力が求められる。
「報告です！　こちらの領地と化した町村に対して天命派の者達が奇襲を仕掛けているとの情報が来ました！」
　……やりやがったな。
　守りが手薄な箇所に対して攻撃を仕掛けて、進撃を遅らせる算段か。
　こっちは禁忌を犯した間違った天命を倒すって名目だから、国民の支持をある程度集めないといけない。襲われた町や村を無視したら頭が代わるだけだと思われかねないな。
　……しょうがない。最近限度を超えてやかましい連中を送り出そう。
　アトラとガエリオン、フォウルも入れるか。
「なんでしょうか、尚なお文ふみ様！」
「キュア？」
「あ？」
　他に樹とかにも頼んでもいいが……まあ、いいだろう。
「俺達の占拠した町や村で暴れる国賊を捕まえてこい。何日掛かってもいいから、

俺が呼ぶまで治安維持に努めろ。もちろん後続のシルトヴェルトの連中と上う手まく連携を取れよ」
　アトラはなんだかんだでシルトヴェルトの連中からの評価が高い。
　俺達革命派にはシルトヴェルトからの増員も結構な数がいるしな。
「わかりましたわ！」
「キュア！」
「なんでお前の言うことを聞かなきゃならん！」
　フォウルは相変わらず反抗的だな。
　そこでラフタリアがフォウルに声を掛ける。
「フォウルくん。お願いできませんか？　アトラさんはナオフミ様の命令でやる気ですし、やり過ぎを止めるのはフォウルくんが適任だと思います。それに前線から離れるので多少は安全だと思いますし」
「あ、姉貴が言うのなら……わかった」
「キュアアアア！」
　で、ガエリオンは子竜モードから成竜モードに変身してアトラとフォウルを背に乗せる。
「では尚文様の勅命、完遂してきますわ！」
「キュアア！」

「行ってくる」
そんなわけでアトラ達はガエリオンに乗って飛び立っていったのだった。
「さて、後続の問題はこれである程度、どうにかなるだろう。どっちにしても優秀な拠点が目の前にあるんだ。行くぞ」
旧都……結構大きな城と城下町が見えてくると、その城下町の前に軍が陣取っていて、いつでも戦争ができるような態勢で待ち構えていた。
こちらが攻めていくまでは相手をしないって感じで統制が取れているな。
こっちも戦いやすいように陣形を組みながら近づいていくと、あっちの部隊が敵じゃないことを伝える意味の旗を掲げながら近付いてきた。
「伝令部隊です。無益な血を流す戦いではなく、双方の代表が前に出て戦うことで全てを解決できないかとの提案のようです。代表はあちらの水竜の巫み女こです」
「あら？」
「後方の町や村を襲撃してるくせに何をほざいているんだと追い返せ！」
俺の指示を伝えると遠くにいた敵兵が驚きの表情を浮かべて、一度戻っていく。
もしかして……あっちの命令系統はガタガタなんじゃないか？
やがて軍が旧都の守りを放棄して退散していく。
「再度伝令が来ました。あちらの落ち度により、素直に旧都を明け渡すと宣言して水竜の巫女は去ったと」

水竜の巫女の軍隊は統率が取れているみたいだな。
義理堅い……か。
一度顔合わせして確認を取りたかったぞ。ゾディアとかいうんじゃないだろうな？
追撃してもいいが、素直に引き下がった奴を追いかけるのは、外聞が悪いからやめておこう。
そんな感じで余りにもアッサリと旧都を占拠することに成功した。
旧都入りした俺達は手厚い歓迎を受けた。
というのも、旧都では国民の方は歓迎態勢を取っていて、兵士の一部も革命派に傾いていたらしい。
この歓迎もむしろ現在の天命派の連中が愚かすぎるからだって指摘したいくらいだ。
そんなわけで俺達はその足で旧都の城へと向かった。
重要拠点のはずなんだが、旧都駐在の敵重鎮共は全て東へ逃げた後だった。
バカじゃないのかとは思うが……。
「真なる天命様に敬礼！」
旧都を占拠したことを皮きりに地方に左遷させられていた国内の優秀な将軍とかが俺達の傘下に加わり、凄すごい速度で支配地域が拡大していっている。

不自然なほど人材が集まってくるな。
どんだけあっちの天命派はバカなことをしているんだろうか。
その後、ラフタリアは天命就任の儀式として、聖域とやらに案内された。
こう……城内から続く、青々と茂る綺き麗れいな大樹のある森に通され、その中にある陰陽の刻印が描かれた地へと辿たどり着く。
整備された小川が木の合間から流れていて……うん、凄く芸術的な作りをしている。
「天命様就任の儀を執り行います。ラフタリア様……どうかこちらへ」
ラルヴァやサディナ、革命派の重鎮共が揃そろって円陣を組んで物々しい儀式を始める。
ラフタリアは……空気に飲まれて委縮してるように見えるな。
巫女服、似合ってるぞー。
祝詞のような呪文が唱えられると、大樹……あ、桜光樹なのか、桜光樹の放つ光がラフタリアに向けて降り注いでいく。
「あ……何でしょう……不思議な感覚がします」
ラフタリアが光を浴びてそう呟つぶやいた。
おお、尻尾がなんか光って見えるぞ。
獣化か？　ラフちゃん化するのか？

「ナオフミ様、目を輝かせないでください。その目は何か嫌です」
「儀式に集中しろよ、ラフタリア」
「はぁ……わかりましたって……何か視界に浮かんできます……これは……祝福ですか？　桜天命石の起動能力？」
ラフタリアは俺を手招きする。
「どうした？」
「えっと、ナオフミ様、手を……」
ラフタリアに言われて俺は手を差し出す。
するとラフタリアは俺の手を両手で掴つかんでから祈るように掲げて額に当てる。

調停者の祝福を授かりました！
精霊拘束限定解除２　封印耐性（中）を習得！
と、文字が浮かび上がる。
「あれ？　それ以外にも施せるかと思ったのですが、弾はじかれました」
「相性的な問題かもな。で？　桜天命石の結界とかも発動させることができるようになったのか？」
「はい、そのようです」
「あらー」

「とりあえず、協力してくれている皆さんに掛けましょう。この先には絶対に必要なものですから」
「そうだな」
そんなわけで俺達はラフタリア経由で天命の祝福を受けた。
これで相手の妨害に対しても対抗手段を得たことになる。
敵が結界を展開しても、こっちの結界で無効化できるらしい。
「ところで気になったんだが」
俺は儀式をしている場所の奥にある大樹の真下に見えるものを指差して尋ねる。
「アレって……龍刻の砂時計じゃないか？」
「私もそう思っていました」
大樹の根元に埋まる形で龍刻の砂時計が鎮座していた。
ただ、作りがちょっと違うようにも見える。
砂時計として機能は……してるのか？
「そうでしょうねー、お姉さんも国にいる時はここでしてもらったわ」
「やはりそうなのか？」
「ええ、水竜様の加護を授かった特別なクラスアップをしてもらってね。あの頃の強さに戻るにはナオフミちゃん達の協力がなかったらできなかったわー」
よくよく考えてみればサディナはクラスアップ経験とリセットの経験を前にも

していたみたいな様子だった。
なるほど、ここでやっていたのか。
「龍刻の砂時計があるって知っていたなら早く教えろよ、まったく」
これでラフタリアの帰路の龍脈でメルロマルクに一発で帰れるだろ。
「村を随分と空けたからな。少し気になっていたんだ」
「そうですね。クテンロウも大分占拠できていますし、一度帰って確認したいです」
「え……ラフタリア様、何の話をしているのでしょうか？」
ラルヴァをはじめとした革命派の重鎮達が尋ねてくる。
「ああ、あの龍刻の砂時計はクラスアップに使う施設だろ？　ラフタリアは更にアレを使って遠い国に瞬間移動できるんだよ」
「そ、そのようなことが⁉　で、ですが革命派の柱であるラフタリア様に、今国を離れられては我々も大変困るのですが……」
俺は目を細めてラルヴァ達を睨にらむ。
というかラフタリアも無言の圧力を発する。
別に国に興味はないし、革命派の連中も承知の上のはず。
今更そんなことを言われてもな？
「すぐに戻ってくる。どっちにしても数日はこの旧都で治安回復のアピールをす

る必要があるだろ？」
今すぐ天命派に突撃するのは難しい。
あっちの姑こ息そくな戦略でアトラ達を治安維持に割かれているしな。
合流までは数日掛かるだろう。
その間に更なる戦力を引き寄せるのも一考だ。
「あれ？　なんか三つ石碑が立っているな」
「何でしょうか？　何か特別な魔法とかが覚えられるものでしょうか？」
「どうだろうな？」
そう思いながら龍刻の砂時計を囲むようにそれぞれ書かれた文字に目を向ける。
「勇者文字ですね」
「そうだな……魔法文字も付与されていて特定の奴しか読めないみたいだぞ？」
石碑に触れると文字が浮かび上がる。完全にオロチの石室にあったのと同じ文字だ。
えーっと。
「盾の聖武器の強化方法その一、他の聖武器や眷けん属ぞく器の強化方法の共有……」
「あらー？　前にもあったわね」
「そう――」

「そうなんですか？　と主人は仰おっしゃっています」
セインが文字を指で追って応える。
「読めないそうです」
「盾の勇者しか読めないってことなんだろ」
俺は石碑を殴りつける。
「しつこいぞ！　どんだけ転がってんだ！」
「ナオフミ様落ちついてください」
「樹ー！」
同行している樹を呼ぶ。
前回は遺跡の崩壊でできなかったが、同じことが書かれているなら樹に読ませるべきだ。
「これが読めるか？」
「はい……」
そう言って樹は石碑を読みとる。
魔法とか多少勉強しているから今なら読めるだろ。
リーシアが付きっきりで教えているしな。
「弓の勇者の強化方法その一、武器自体の性能と希少性、強力なレア武器……」
……それって樹が説明していたやつだよな？

やっぱり知っている知識じゃないか。
「樹の方は既に使用済みの強化方法みたいだな」
「そのようです。ですが尚文さん、強化方法の共有についてのちゃんとした説明は初めてですよ？」
そういやそうだな。
なんていうか説明書が転がっているような気分だ。
「他の二つも見てみよう」
次の石碑の文字を樹と一緒に読む。
「盾の聖武器の強化方法その二、信頼し信頼されることで能力上昇……？」
盾の水晶の部分が光る。
樹の方は鉱石強化の説明だった。
「これって強化方法か？」
「ナオフミ様、心当たりがありませんか？」
「え？」
ラフタリアに指摘されて俺は心当たりを探る。
何かあったか？
信頼……ラフタリア達のことは信じているが、それで能力上昇？
「メルロマルクにいる時、三勇教の教皇と戦った辺りから霊亀と戦った時辺りで

す。ナオフミ様、かなり強きょう靭じんになったじゃないですか。逆にキズナさんの世界にいるときは思ったよりも伸びが良くないと仰っていました」
「そういえば……そうだな」
思ったよりも能力の伸びが良いなーって思っていた頃は、もしかしてこの強化が勝手に発揮されていたってことなのか？
「私も不思議なくらい力が出ましたし、ナオフミ様に信頼されることで能力の伸びにボーナスが掛かっていたのかと」
ふむ、確かにな。
あの頃のラフタリアはどんどん強くなっていった。今はもっと強いけどさ。
「もしかしたら僕や錬れんさんが弱っていたのもここに理由があるのかもしれませんね」
棒読みで樹は俺に向かって言う。
樹達は逆に国や国民に嫌われ始めていたもんな。
思ったよりも弱いって烙らく印いんを押されていたし。
とはいえ、強化方法の共有を信じていないと最初から発動しないものなんじゃないのか？
……うーん。
「次を確認しよう」

どうもちゃんと理解すると倍率が変わるような気がする。
強化方法の共有が如実だ。
オロチの石室で確認してから能力が上がっていたのは確かだ。
そう思いながら三つ目の石碑を見る。
「盾の聖武器の強化方法その三、エネルギーブースト？」
説明文を読むとステータス魔法にもちゃっかりＥＰという項目が追加されている。
「勇者は武器の力で自動で引き出されるエネルギーがあり、常時力を展開している。そしてスキルにエネルギーを振り分けることでより強固なスキルとして放つことが可能……って」
これってオートで無双活性っていう技能が発動してるってことなんじゃないか？
伝説の武器の所持者であるというだけで常時無双活性が完全な状態で作動しているようなのだ。
ヘルプではエネルギーブーストと書かれていた。
既に作動している無双活性を更に発動っていう二重起動はできるはずもないよな。
「エネルギーブーストですか？」

樹が何かを目で追い始め、やがてカッと気を発露させる。
「ふぇぇぇぇぇぇ!?　なんでイツキ様が突然、気を使えるようになるんですかぁ！」
確認すると樹の放出する気が増えている。
俺もか。ただ、若干毛色が違うように見えなくもない。
変幻無双流はこの力を疑似的に再現したものと考えるとしっくりくる気がする。
「スキルや魔法、攻撃にも混ぜることができるＥＰが出ましたね。ＳＰや魔力と複合で作動するようですが……意識するだけで消耗していきます。要練習ですね」
こんな簡単に習得できるとか……今までの努力が馬鹿みたいじゃないか！
ウンザリする。
が、結局は使い方みたいだな。運用を間違うと消耗が激しくなるだけになりかねない。
どちらにしても簡易的に気を使えるようになっただけで、詳しくなったわけじゃないと納得するほかないな。
「ラフタリアは眷属器の世界違いだから共有はできないもんな」
「そうですね。できたら便利ですが、既に使えるのでなんとも……」
無双活性はできないけどな。
スキルに込めることは前からできていたし、グラスから教わっていたんだった

か？
　セインもできるみたいだし、できて当たり前ってのが歯は痒がゆいな。
　強くなった気があんまりしない。
「ですが、なんで盾の強化方法が記載されているのでしょうか？」
「グラス達から聞いた話……波によって世界が融合している現象と関わりがあるんじゃないか？　シルトヴェルトやクテンロウって亜人達の国だろ？」
　言うなれば盾の勇者の領域だ。
　世界地図を見ても亜人の土地が多い。
　そこから考えるにクテンロウという国に盾の強化方法が隠されていても不思議ではない。
　精霊具という変わった呼び名で伝わっているみたいだけどさ。
「まあ、錬を連れてきてこの碑文を読ませてみればわかるかもしれないぞ」
　世界が融合した順番とかいろんな理由が考えられる。
　今は判断材料を集める段階だ。
「そう……ですね。では一いっ旦たんメルロマルクの方へ行ってみましょうか？」
「ああ」
　勇者が錬だけで大丈夫だったかとか色々とな。
　クテンロウは占領したが村が滅ぼされていたら意味がない。

そんなわけで俺達はクテンロウで見つかった龍刻の砂時計を利用してメルロマルクに転移したのだった。

# 十一話　一時帰還

ポータルシールドで村の方へ移動する。

「ただいまー！」

「ラフー！」

フィーロとラフちゃんが元気よく声を出す。

「特に異常はなさそうですね」

「あ、兄ちゃん達が帰ってきたー！」

キールが俺達を見つけて駆け寄ってくる。

「おかえり兄ちゃん！　ラフタリアちゃんを殺そうとしてくる連中達を倒してき

たのか!?」
最後に話をしたのがシルトヴェルトから船を出してもらう日の朝だったから……多少前か。
キールの声を聞きつけて錬れんがやってきた。
「尚なお文ふみ、経過は……」
「いや、途中で龍刻の砂時計を見つけたから村の様子を見に来た」
「そうか」
「大分侵攻できたぞ？　そっちの方はどうだ？」
「襲撃はまったく来ていない。多分尚文達がクテンロウに乗り込んだことが判明したからだと思う」
ふむ……奴等もそれどころじゃなくなったってことか。
元々言語とかいろんな問題もあるし、距離があるから追加で兵士を出すのも難しい。
しかも本土が攻撃されているとなると、少しでも人員をかき集めなければいけないってことか。
「ところで尚文、出発前にエクレールに何か言ったのか？」
「なんのことだ？」
「どうもエクレールが尚文に何か言われたとかで愚痴をな……領主の才能がない

とか」
う……そういやメルティの機嫌を取るためにエクレールを下げるようなことを言ったな。
まあ、事実だからしょうがない。
書類整理よりも稽古に現うつつを抜かしていたのは事実だしな。
この話題は無視して、本題を進めよう。
「村の方に襲撃がないのなら……錬、お前も侵攻組に組み込むからついてこい。もう船旅でもないし大丈夫だろ」
「そうか」
錬はホッとしたように頷うなずいた。そんなに泳ぐのが苦手か。
「尚文と樹いつきの留守を守っていたから心配していたところだ。セインさんもいなくて村のみんなも心配していた」
そういう意味じゃセインがここにいるのも便利だったんだな。
行くことはできないけど実況はしてくれていたって感じで。
「対勇者や独自の技術を持っているくせに敵がバカで色々と呆あきれる」
「まったく否定できないのがなんとも悲しくなってきますね」
ラフタリアも呆れたように呟つぶやく。
俺達は錬にクテンロウでの出来事を簡潔に説明した。

もちろん、武器の強化方法が発見されたこととかもな。
「これで俺達はもっと強くなれるってことか……」
「俺もラフタリアちゃんの故郷に行ってみてー」
キールが目を輝かせ、尻尾を振りながら尋ねてくる。
「兄ちゃん兄ちゃん！　俺達も連れてってくれないのか？」
「なんだかんだで村にいつ襲撃が来るかわからないし、村を空けるのもどうかと思ってな……」
「じゃあ村のみんなで行くってのは？」
あー……ここの全員をクテンロウに連れていくのか？
ラフタリアの方を見ると露骨に渋い顔をしている。
「さすがに多すぎるだろ。事が片付いたら連れてってやるから我慢してくれ」
「良い案だと思ったんだけどなー」
「全員で出撃して村を空けたら、泥棒とか来たらどうするんだよ」
金目のものとか、それなりに保管してるんだぞ？
「メルティちゃんに預かってもらうのは？」
む……それも手だが。
「ナオフミ様」
ラフタリアが嫌がってるもんな。

「そもそもキール、ある意味クテンロウで戦争してるんだぞ？　戦争に行かせるためにお前等を育ててるわけじゃないんだから我慢しろ」
　目的を履き違えてはならない。
　俺達の本来の目的は波に備えた復興なんだからな。
「そっか——……残念」
「面倒事が片付いたらそのうち連れてってやるよ」
　観光には良さそうなところだしな。考えておこう。
「ごしゅじんさまーフィーロ、メルちゃんに会いに行っていい？」
「ああ、行ってきてもいいぞ。村にいれば後で迎えに来てやるから遊んでこい」
「やったー！　メルちゃーん！」
　あっという間にフィーロは走り去っていった。
「そういえばあっちに呪いに効く温泉がある。なんだかんだでカルミラ島のポータルが取れていないだろうから治療に使えるだろう」
　俺を含め、勇者は呪われてるのが多いし、そろそろ完治させたい。
　呪いの所せ為いで弱体化していて、戦いで不利になっているわけだしな。
「ラフー」
　ラフちゃんが村の魔物達に挨拶をしている。
　そういえばラトとかウィンディア辺りもシルトヴェルトから回収しておかない

となる。
「改めて思うが転移は便利だな」
フィーロやガエリオンの足で何週間も掛かる距離が一瞬だ。
「本来はいつでも使えるはずなのに使用不可地域が多くて困る」
「そ、そうか」
「で？　錬は泳ぎを少しは覚えたか？」
「剣の兄ちゃん、一五メートルくらい泳げるようになったぜ！　俺が教えたんだ！」
「ほう……」
錬を見ると視線を逸らされる。
これだけの日数といろんな技能を利用して一五メートル泳げるようになったのか。
「ナオフミ様、程々に」
なんて感じで錬をクテンロウへ連れていくことなった。
ラトとウィンディアはシルトヴェルトの生態系調査をある程度終えていた。
だから丁度良いので連れていくことにした。
桜光樹の枝をラトに見せたら目を輝かせて調べている。
クテンロウへの好奇心が増したっぽい。

「おー！　面白い生態系をしてるわね！　ほら、行くわよ」
「ガエリオンは？」
「アトラ達の足代わりに別行動中だ。すぐに合流できる」
「わかった」
「じゃあ伯爵、私達は近隣調査に行ってくるわね」
「ああ、まだ敵がいるかもしれないから十分に注意しろよ」
「わかってるわよ」
そんな感じで二人は出かけていった。
後方援護組になるがこっちへ連れてきた方が研究がはかどりそうだ。
それから武器屋の店番をしていたイミアの叔父に声を掛けた。
「ここに師匠とエルハルトがいるんですか？」
すぐに戻ってこれるだろうってことで一旦たん店を閉じてもらい、クテンロウの元もと康やす二号の工房へと案内する。
「ああ、そろそろ奴の工房に着いた頃だろ。会いに行くからついてこい」
「はい」
イミアの叔父は確か鍛か冶じ師の修行が家庭の事情で中途半端だったはず。
親父の手伝いで補完しているようだけど、正式に学ぶにはいい機会だ。
それに、あの元康二号の見張りは一人でも増やした方がいい。

ってな感じで親父達の元へイミアの叔父を連れていった。
「お？　トーリィじゃねえか。アンちゃん、どうしたんだ？」
元康二号の工房ってところに来たんだが……凄すごく大きい鍛冶場だった。
手入れは行き届き、製鉄所も兼任する。
常に窯には火がくべられているみたいで、屋根の煙突からは絶えず煙が出ている。
魔法的な設備もあって……なんていうか設備だけでいうなら親父の店は足元にも及ばないんじゃないかって思えるほどだ。特に魔法効果のありそうな……パンとか焼きそうな窯とそれに繋つながるハンドルが微妙に気になる。
「旧都に龍刻の砂時計があってな。親父が大変だろうから店を一旦閉じてもらって連れてきた」
「メルロマルクの店の方が不安になるがぁ……確かに助かるぜ」
「ゲ！　トーリィ！　野郎……俺をどこまで追い込みやがる」
元康二号がイミアの叔父を見てから俺を睨にらむ。
「いいからちゃんと仕事しろ。遊ぶのは親父とイミアの叔父に技術を全て叩たたきこんでからな」
「うるせえ！　お前の所為で三日酔い潰つぶれちまったんだぞ！」
「知らんわ。お前の注文した酒だろ」

まあ酒に細工はしたが。

「師匠が逃げようとするのを見張るのが大変だったぜ。トーリィが来たんならいいことだ」

親父も困ったように腕を組んで呟く。

「えーっと……がんばります」

イミアの叔父は申し訳なさそうに応える。

それ、姪めいと同じ反応だな。

「ついでに親父が悩んでいた霊亀の素材とかもあっちから取り寄せできるからいつでも言ってくれ」

「おお！　そりゃあ助かるぜ。師匠と調べりゃ良いものが絶対に作れるからよ！」

「くっそ！　しょうがねえ、トーリィ！　てめぇもみっちり叩きこんでやるからその収益を後でよこせよ」

どんな条件だ。

アレだ。弟子二人に技術を叩きこむから利益を後でよこせと。

残念だったな。イミアの叔父の場合は俺の収益になるんだ。お前になんてやるはずないだろ？

「ああそうそう、剣の勇者の錬を連れてきた」

「え？　ここで俺を紹介するのか？」

あ、黙って俺達のやり取りを見ていた錬が自分を指差して応える。
「ああ、なかなか良さそうな剣があってな。錬にコピーさせようと思ってたんだ」
「まだ浄化中だぞ？　お前等ごときが触れたらどうなるかわからねえっての」
元康二号が部屋の隅で縛られた剣を指差して応える。
「ここの工房でももう少し時間が掛かるってんだ」
「とはいえ……剣、か……確かに、あそこにある剣は凄い気配がする……こう、剣がざわついているのがわかる」
そう言って錬は自らの剣の柄つかに手を置いた。
「あ？　お前も武器作りに興味あるのか？」
「え、いや……まあ。良い武器を集めるのが好きだから」
「ふむ……盾の野郎よりも非モテオーラを背負っていておめーには好感が持てそうだな。いいだろう。後で多少教えてやるから、俺を逃がす手伝いをしろよ」
俺の目の前でよくもまあそんなふざけたことを言えるな。
「よ、よろしく頼む。俺の名前は天あま木き錬だ」
錬も愛想笑いをするな。非モテオーラとかバカにされているだろ。
「まあいい。錬、その馬鹿をちゃんと見張っておくんだぞ」
「わかった」
で、錬を工房に預けてきたんだが……。

「俺の作った剣がぁあああああああ！」
「す、すいません！　呪いで触ったものが劣化するのをすっかり忘れてた！」
俺達が出てすぐに元康二号の絶叫が響き渡った。
損害、桜天命石の剣一本。
錬に武器をコピーさせるのは苦労しそうだな。
少しでも早く呪いを完治させるべく、温泉への入浴を命じておいた。

# 十二話　先代と当代

さて、旧都を占拠してから数日が経過した。
ラフタリアはいろんな方面にアピールするため、巫み女こ服を着て旧都内を街宣している。
既にクテンロウの三分の二を占拠した俺達は、実質クテンロウを牛耳ったよう

なもんだ。
各方面の種族代表が、東の都にいる天命を裏切ってこっちの傘下に加わってくるのは自然の摂理と言える。
アトラ達の火消しもあって、天命派の連中の騒動はかなり鎮火している。
一応、あっちの水竜の巫女が姑こ息そくなテロ行為をやめるように指示を出しているっぽいのだが、聞かずに行動している奴が多いとの話だ。
話によると毒婦の配下が主犯格らしい。
これで勝てると思っているところを見るに相当な愚か者みたいだな。
むしろ水竜の巫女が早くこっちに鞍くら替えすることを願うばかりだ。
姑息な策謀をするのは今や天命派ってことで、被害が多ければ多いほどラフタリアの方に信仰が集まる図式が形成されていた。
他に戦場の状況はというと、旧都占拠後は錬れんや樹いつき達を先陣に置いて東の都に侵攻をしているんだが……連日道中の村や町は無血開城状態。
敵前逃亡をした当代の水竜の巫女は東の都に連れ戻されたとか何とか。
抵抗する連中が展開する桜天結界は、継承の儀を行ったラフタリアが掛けた桜天結界でやはり相殺できるそうだ。
そうなると錬や樹、サディナ相手に天命派は手も足も出ない。
アトラ達には後方で姑息な抵抗を続ける連中の鎮圧に動いてもらっている。

シルトヴェルトの連中との連携がかなり上う手まくいって、鎮圧ははかどっているみたいだ。
この国の連中の技術には冴えたものがあるとか錬が言っていたが、ステータスで勝っているのでごり押しできる状況だな。
内乱ってなんだっけ？　って状態へと様変わりしている。
いい加減、クテンロウ侵攻を切り上げて帰還しても問題はなさそうだとも思えるのだが、ふざけた連中に報いを受けさせることが達成できていない。
「ナオフミ様」
「ん？」
ラフタリアが作戦会議の休憩中にやってきた。
サディナやフィーロ達、動ける人材には前線に行ってもらっている。
俺も明日には出発する予定だ。
セインは休憩中の俺の部屋の前で待機している。完全にボディガードだ。
一応、明日は待機中のフィーロに乗っていく予定だ。
フィーロの足なら敵兵に遭遇しない限り、一日で東の都に行けるだろう。
大分近づいてきたって感じだな。
「この後の作戦はどんな方針で行くのでしょうか？」
「一応、相手の天命を抑え込まないとな。報いを受けさせないといけないし、あ

る意味、膿うみを出さないと同じことを繰り返されかねない」
流れてくる情報では、現在の天命は単純に利用されているに過ぎない。
よくわからない間に責任者に祭り上げられていて、実際の黒幕はその周りにいる連中だ。
「やるからにはトコトンやるんですね」
「ああ。とはいえ、今回の事件でラフタリアの出生が知れたのはいいことだと思っている」
「私は……そこまでは……お父さんやお母さんのことを知ることは嬉しく思いますが、私は私です。ルロロナ村出身のラフタリアで十分なんですよ」
俺はラフタリアの顔を見る。
女王として担がれていることに関して複雑な心境ってことか……。
世界を救った後、俺が帰った後にラフタリアはどの道を選ぶのか。
もう既に結果は出ているように見えなくもない。
「だけどなラフタリア。少なくともクテンロウって国は政情が不安定なのは事実なんだ。自立できるようにしていかないと大量の人が路頭に迷うことになるんだぞ？」
「……はい」
「継ぎたくないって気持ちはわかっている。それまでにどれだけ政情を安定させ

るか、もしくは、誰に任せるかだ」
「そう……ですね」
納得はしかねるって態度だけど、頷うなずくしかない。そんな様子でラフタリアは頷く。
方法は幾らでもある。開国させてシルトヴェルトに吸収合併させるとかな。
その辺りはどうとでもなりそうだ。
「ラフー」
「ごしゅじんさまー、会議終わったー？」
そこでラフちゃんとフィーロが顔を覗のぞかせる。
「まだだ。各部族との調整が難航気味でな。くっだらない面子を気にする奴は切り捨てないとこっちが困る」
面倒だからシルトヴェルトの連中に丸投げしたくなるほど、政治が腐敗している。
メルロマルクもそうだが腐りやすすぎるだろ。
とはいえ、有能な人材もそれなりにいるから見極めが大変だ。
こっちに鞍替えした奴に対しても目を光らせないとな。
まあ、どちらにしてもシルトヴェルトの圧力は案外バカにできない。
盾の勇者の権力もなかなかに使いやすい。

他にラフタリアが帰路の龍脈で龍刻の砂時計からシルトヴェルトの猛者を連れてきているのも大きい。

舞い戻った天命様はまさに神の如ごとき兵士達を無限に呼び出せるとか噂になっているそうだ。

なんて感じに人員を早急に揃そろえられたから俺達が東の都に進軍するのに……そんなに時間は掛からなかった。

そして東の都が見えてきた頃のこと。

旧都の時と同じく伝令兵がやってきた。

「また代表による決闘の提案が来ています」

「相手をする必要があるのか？」

もはや相手は詰み状態なんじゃないか？

一応、東の都の後は北に集落や大きめの町があるらしいが、そこに逃げる気だろうか？

まあ、相手側の水竜の巫女が義理堅い奴みたいだから応じてもいいかくらいは考えている。

「今回、天命派が勝った場合、一度撤退していただければ追い打ちを掛けることはないそうです。それだけはクテンロウの将軍……巫女として守るとのこと、そのための念書まで書かれております」

ってな感じで何か文字と記号が書かれている。
なんか見覚えがある文字のような……？
「あら、あっちは本気みたいね。時間稼ぎでもする気かしら？」
「そのようです」
サディナの言葉にラルヴァが同意する。
「どういうことだ？」
「この印、種族代表として、町の守り手としての約束みたいなものなのよ。仮に破ったら、何よりも重い信頼に泥を塗ることになるわ。家どころか一族郎党、クテンロウじゃ住めなくなるくらい重たいことよ？」
絶対の約束みたいなことか……。
奴隷紋並みに重たい約束事だな。
とはいっても、古いにしえから封印されている化け物の封印を解いていくバカ天命派だし、信用するのは難しくないか？
「対戦相手は先代の水竜の巫女だと指定されています。どうしましょうか？」
俺達はサディナに目を向ける。
「あら？　お姉さん？」
「はい。どうも当代の水竜の巫女がどうしても戦いたい相手のようでして、その戦いさえできればあとは後日に回していいとの話です」

「とはいってもな。受ける義理はないだろ。おめおめと敵の大将を逃す作戦に乗ってやることはない」
「では提案は却下し、攻め込みますか？」
「そうだな……どうしたものか」
どちらとも決めかねて考えていた矢先――
「んー!?」
フィーロが大きく空を見上げる。
突然の突風で竜巻が発生し、俺達の軍の目の前を通過していった。
かなり高密度の竜巻だったぞ？
「凄すごい魔法だったよー。ビリビリってくらい力が来るー」
「儀式魔法『大竜巻』ね。ここまで密度の高い魔法となると相当の術者が指揮しているんだと思うわよ。急造の部隊じゃ対抗するのは難しそうね」
「俺なら突破できないことはないと思うが……」
これは警告ってことか？
ふむ……正直に言えば相手の言うことに従う義理はない。あくまで今までの風聞から相手をするか考えただけだ。この竜巻でかなり好戦的に感じられて印象がマイナスに傾く。
けれど、無駄な争いをするよりはマシだって提案は頷けるか。

「こっちが勝ったらどうするんだ？」
「素直に水竜の巫女が投降するそうです」
「天命共は投降する気はないのか？」
俺の問いに伝達兵は頷く。
話にならない提案だ。とはいえ、こいつは一度義理を通しているしな。
馬鹿な頭かしらの所せ為いで苦しんでいる将軍って感じだし、話に乗ってやるのも一興か。
「ナオフミちゃん、お姉さんならやってもいいわよー？」
「お前の妹らしいが、いいのか？」
「お姉さんが乗り越えなきゃいけない相手みたいだし、先代の巫女として当代の巫女にどれくらい強いか見せてあげなきゃね」
「そうか」
サディナがどうしても戦いたいみたいだから相手の提案を受けてやるか。
「わかった。ただ、立会人くらいは行ってもいいよな？」
「はい。ですが……」
伝達兵がラフタリアに目を向ける。
そうだな。ラフタリアは安全のために行かない方がいいかもしれない。
「ナオフミ様……」

ラフタリアは凄く行きたそうな顔をしている。
俺の隣にいた方が安全なのは確かだしな。
流星盾を展開しておけば急な刺客にも対応はできるだろう。
「大丈夫だ。盾の勇者である俺が警護するからな」
「ありがとうございます！」
行けると聞いてラフタリアが喜んでいる。
まあ、むしろ離れている方が怖いというのが本音だが。
「ラフー」
「フィーロも見るー」
「ん――」
セインも手を挙げている。俺から離れる気はないって態度だ。
ゾロゾロと大勢で行く羽目になりそうだな。
「しょうがない。十分に注意するんだぞ」
というわけで俺達は現・水竜の巫女が待ち受ける戦場へと足を運んだのだった。
戦国時代の戦場とかってこんな感じなのかな？
なんて思いつつ、革命派の代表として歩いていく。
アホ天命派の巫女達もこちらに向かっているようだ。
双方の陣営の真ん中で人影……じゃないか、数人の兵士とシャチ姿の獣人が、

刀を持って待ちかまえている。
　刀の使い手なのか？
　サディナも相手の流儀に合わせるのか獣人化して、近づいていく。
　俺は相手の巫女の姿を凝視した。
　身長はサディナよりも若干低めで、所々が丸いように見える。
　見比べると色がなんか違うな。衣装はもちろん違う。
　サディナはチョッキにふんどしみたいなフォールドを愛用しているけれど、相手は厚めのベストにホルダー、ブカブカのズボンって感じだ。
　チョッキとベストは意味的に同じなんだが……雰囲気かな？
　２Ｐカラー……この考えはゲーム的すぎるな。
　あと、なんか赤い刺青いれずみみたいな紋様が体中に施されているように見える。
　なんていうのか、サディナと比べるとシャーマンっぽい感じか？
　ゾディアとは雰囲気が違うが……はっきりとは見極められないか。
　声を掛けようとしたところでサディナが一歩前に出る。
　というか近くにいる俺の顔を見て気付かないなら別人か。
　そんな偶然、続くはずもないか。
「貴方あなたがお姉さんの妹なのかしら？」

「……」
無言でシャチ獣人の代表は頷き、ベストのポケットから瓶を取り出して飲む。
なんかのドーピングか？
一本飲み終えると同じものを取り出してサディナに投げ渡す。
サディナは瓶の蓋ふたを外して匂いを嗅ぐ。
「あらー懐かしい匂いね。地酒じゃないのー」
酒をプレゼントってこと……じゃないだろうな。
「これで同じ条件。サディナ……絶対にこっちが有能であることを証明してみせるわ」
「神託があればお姉さんよりも有能でしょ」
「ふざけたことを……私がどれだけ貴方と比べられたかわかっているのか！」
敵意がヒシヒシと伝わってくる。
「ぜーんぜん。お姉さん、評価低かったし」
「お前がいなくなった所為で国がどれだけ荒れたか！　どれだけ恐れられた化け物だったのか知らないの!?」
これはサディナがいなくなったことで国の治安が低下したとかだろう。
後方にいる国の連中に視線を向けると頷かれた。
やっぱそうか……よくよく考えてみればサディナ相手にかなり用心深くしてい

たもんな。
　それなりに人数を用意してきていたし。
「噂は噂でしょ？」
「そんな噂に翻ほん弄ろうされ、お前の後を強引に継がされた身にもなりなさい！」
　うわー凄く恨まれている。こんなこともあるんだな。
　俺の場合、弟の方が周りの評価が高いからアレだが。
「悪いとは思ったわよー？　まさかお姉さんの後を継がせるためにあの人達ががんばっちゃうなんて思いもしなかったし」
「私は……私は地獄を見た！　お前に匹敵する者になるために……どれだけ苦労したと思っている！」
「お姉さんが広げて開けちゃった穴を、お姉さんと同じことができる人を作り出して埋めるなんて狂った考えなんじゃないの？」
　姉が優秀だから次に生まれる妹も優秀であるはずだ、とか考えていたのか？
　腐れ外道な両親共だな。
　というかサディナ、やっぱお前は強くて評価されていたんじゃないか。
　神託持ってないからとバカにされたなんて、唯一の弱点を指摘されていただけだろ。

「ちゃんと話は通したはずなのに、こんなことをするなんて、水竜様も見放すはずよね。さすがのお姉さんもあの人達に、お灸きゅうを据えに行かなきゃいけなそうねー……」

と、サディナはバチッと帯電させながら蔑さげすむわけでもなく、同情するわけでもなく、そう答えた。

「お姉さんをご指名だし、水竜様の巫女だった者としてはちゃんと相手をしなきゃいけなそうよね」

「挙句……水竜様が頼んだのはお前ときている。そんなの認められるものか！」

殺気を放ちながら現水竜の巫女が刀を向ける。

サディナもいつでも相手ができるように銛もりを構えている。

精神的な余裕はサディナの方に軍配が上がっているように見えるな。

ん……？　なんだ？　相手が風を纏まとっているように見えるぞ？

「サディナ……貴方は精霊具の祝福を受けていると聞く。全力で掛かってきなさい！」

「あら？　お姉さん、国を出る前よりもも一っと強くなってるけどいいのかしら？」

「ええ、こっちもその分、天命様から授かった力で応えてみせる。そして私自身の力を……神託の力を見るがよい！」

相手の巫女はポケットから酒を取り出して飲み干す。
ん？　紋様が光ったように見えるが……。
「……名を名乗らないのもどうかと思うから教えるわ。私の名前はシルディナ。現水竜の巫女にして殺さつ戮りくの巫女。サディナ……貴方を超えた者の名。今の私の得意魔法は風……神託の力の恐ろしさを知りなさい」
怒りに満ちていた声から、普段のサディナみたいな口調に変わっている？
「あら？　神託って本当にあるの？」
「今こそ見せてあげるわ……英雄や先祖の声の力を！」
そう言ってシルディナが腰のホルダーから……四角い札みたいなものを取り出して空に投げる。
札は綺き麗れいな軌道を描いて落ちてくる。
まるで札が地面に落ちた時が戦いの合図だというかのように。
「はぁああああああああ！」
札が地面に落ちると同時にシルディナが身体を低くして突撃し、刀を大きく振りかぶって斬りつける。
サディナはその突撃を銛で軽く受け流すと同時に跳ね飛ばす力を利用し、一回転して銛もり竿ざおで殴りかかる。
「随分と大ぶりな攻撃ね。キレがないわよ？」

シルディナの背中に銛竿が当たるかと思ったその時。
「甘い！」
シルディナの背中に展開された風がサディナの一撃を受け止めて大きく突風を巻き起こす。
「あらあら、小手先の技術？　お姉さんだってその程度できるわよ？」
バチバチとサディナが全身から雷を発生させて、風を強引に押し返そうとしている。
「はあ！」
その合間にシルディナが手を前にかざして、サディナの腹目掛けて風の玉のようなものを押しつける。
「余計なこだわりは、戦いを鈍らすわよ？」
その攻防の隙すきを衝つくように、サディナの尻尾がシルディナの腰辺りに命中、追撃とばかりに蹴けりが入る。
「う……」
初撃はサディナの方に軍配が上がったか。
しかし、その攻撃を弾はじくようにシルディナも尻尾を振ってサディナの腿ももを強く殴りつける。
「おっと、お姉さんも受けちゃったか」

「舐なめた真似をするわね。古から続く魔法には、こういう使い方もある！」
『力の根源たる私が命ずる。真理を今一度読み解き――』
「お姉さんに通じると思っているのかしら？」
サディナは龍脈法を使える。
へたすりゃツヴァイトクラスの魔法でも阻止できるぞ。
『龍脈よ、大地よ――』
「あ、あら？　詠唱妨害が難しいわね。なかなかやるじゃない」
どうやらサディナでも妨害は難しいようだ。
この辺りは使い手の実力が絡んでいるので、シルディナはサディナと同じくらいの実力があるってことか。
俺もキャンセルできるか相手の魔法を読みとってみた。
なんだあれ？
シルディナの唱える魔法……魔法とも龍脈法とも言えるほど複雑で、合唱魔法の域に差しかかっているぞ。
『神風よ、我を守り敵を屠ほふる力となれ！』
「ドライファ・神風・アーマー！」
シルディナは刀から手を離し、全身を使ってサディナに突撃する。
もちろん、風を纏ってのことだ。

アレは……フィーロのスパイラルストライクと似た動きだぞ。
いや、サディナの放つ水龍滅破だったかにも似ている。
「おっと！」
サディナは銛を器用に捻ひねって跳躍し、突撃を躱かわす。
「行くわよー」
攻撃の隙を逃さずに銛で背中から突こうとした瞬間、サディナは攻撃を中断してバックステップを取った。
なんで攻撃をしないんだ？
「ごしゅじんさま、あの人、風の魔法が凄く上手だよ。あのまま攻撃していたらサディナお姉ちゃん切られてた」
見えない刃やいばを使いこなしているってことか。
俺は目を凝らして確認する。
うん……龍脈法と気を併用することで解析ができた。
なんだアレ？　魔法とも言えるけど、永続的に風を発生させる攻撃か？
「あらあら、面白いことをするわね」
ヒュンヒュンとシルディナが風を纏い続けている。
まるで風の鎧よろいだな。
風の魔法を使い、まるで手で持つかのように放り捨てた刀を浮かせていた。

フロート系みたいだ。
そういや錬の奴……フロート系のスキルが出ているけど、使いたがらないんだよな。
どうも剣を動かすことに意識が行っちゃうからとか言っていた。
ラフタリアも似たようなスキルを持っているのだろうか？
あったら便利だよな。
そう思いながらフロートシールドをくるくると俺は動かす。
「ナオフミ様、なんか別のことを考えてませんか？」
ラフタリアに気付かれた。戦いに集中しよう。
「まだまだ！　この程度で私は止まらない！」
サディナが銛を回転させると、キンキンと火花が散る。
風の刃が幾重にも飛んでいっているってことか。
それに加えて本体と、浮かんでいる刀の攻撃が組み合わされる。
「あら～……面白いことをしてくれるわ～。少しは楽しめそうね」
サディナが相手の速度に対応できているってのも恐ろしい。
「ラフタリアちゃんやアトラちゃんの攻撃を受けていたら簡単に捌さばけるわ」
凄いな。
まあ、俺だったら流星盾を展開して全部受け止めているところだけどさ。

風の魔法を可視化するのは結構骨が折れるけど、捌けないほどじゃないか。
「むー……なんか凄いー。フィーロも真似したい」
「がんばればできるんじゃないか？」
「んー……どうやったら二つの声が出せるのかわからない」
確かに、シルディナの魔法詠唱がなんか変だ。
口は一つなのに、声が二重になって別のことを言っていたのだ。
アレが神託による魔法詠唱ってことなのか？
「さーて、面白い手品を見せてもらったからお姉さんもいっちょやりますかね」
そう言いながらサディナはファストクラスの魔法を素早く唱える。
「ファスト・ライトニングボルト！　ファスト・チェインライトニング」
バチバチとサディナの周りに雷が発生する。
「無駄よ。その程度の魔法、私の風で吹き飛ばしてあげるわ！」
シルディナがそう応え、風がサディナの魔法を遮って、跳ね飛ばす。
「むしろその雷の力、利用させてもらうわ！」
シルディナが風でサディナの雷を集めて、刀と風の刃に混ぜながらサディナに向かって放った。
誘導された雷と二つの刃……そしてシルディナ本体による突撃がサディナに飛んでいく。

「さーて、お姉さんがその程度の魔法しか使わないと思ったのかしら？　次はこっちよー」
　サディナは空を見上げる。
「風の魔法が貴方だけのものだと思ったら、大間違いなんだから」
　雲と空気からサディナは力を引き寄せる。
『我、サディナが大気の力を引き出し、顕在を望む。龍脈よ、我を守り、敵を弾け！』
「ウインドシールド！」
　ガツッとサディナの前に風耐性の効果が掛かる魔法が発生する。
「その程度の守り、突破など容易たやすい！」
「あら、お姉さんがただ、貴方の攻撃を受け止めるだけにこんな魔法を使うと思ったのかしら？　魔法にはね、こういう使い方もあるのよ」
　サディナはシルディナの攻撃を受け止めると同時に……風の守りで、相手の風を受け止める。
　が、焼け石に水、守りが一瞬で剥はぎ取られるのが見える。
　もちろん、その分、シルディナの風の鎧の密度が一瞬、落ちたように見えた。
　が、それまでだ。止めるには遠く及ばない。
「その程度？　期待はずれも甚だしいわ」

シルディナは笑みを浮かべながら風と雷が合わさった一撃をサディナに放つ。

「そう思う？　ざーんねん。そもそもお姉さんの雷を利用するって発想が甘いわねー」

「なに!?」

パチンとサディナが指を弾くとシルディナが利用していた雷の出力が上がって大きく弾ける。

「意図的に貴方の風に利用されるように放ったのだから当然、こういうこともできるの」

「それがどうしたというのよ」

「あら？　わからない？　周りがどうなってるのか、見えないのかしら？」

サディナの言葉に、シルディナがハッと周囲を見渡す。

バチバチと辺りに静電気が発生し、地面がスパークを始める。

まるで……ここに雷が降り注ぐかのような状況だ。

龍脈法を唱えた際にも、意図的になのか、雲が集まって雨雲ができあがっていた。

そう、いつの間にか空に雷雲ができている。

「大きく風を起こして雨雲を散らす！」

「無駄よ。風の中にも十分、お姉さんの雷が蔓延えんしてるもの」

サディナは相手を小馬鹿にするような声音で応えてから錫を振り下ろす。
「詠唱妨害されないように仕掛けるのが大変だったわね。じゃあ短く唱えるわよ。根比べね。ドライファ……サンダーバースト！」
距離を取ろうとするシルディナに追いすがるようにサディナは巧みに錫で手繰り寄せ、雷を自分諸共降り注がせる。
一瞬の閃せん光こうと共に、極太の雷が上空の雨雲から降り注いで、二人に命中する。
「くううううう……」
シルディナの風の鎧が雷を強引に逸らし、霧散しながら少しずつ剥がれおちていく。
風の刃は既に散り、刀が避雷針となって雷が地面に吸い込まれていく。
「はぁ……はぁ……」
「あら、よく耐えたじゃないの。でも……お姉さんの追撃は止まらないわよ」
アレだけの魔法が降り注いでいるのに、二人揃ってダメージがほとんどない。
シルディナは肩で息をしちゃいるがな。
「ドライファ・ライトニングスピードとサンダーガード。ホラホラーお姉さんをもっと楽しませて、もっと速く……魔法を唱えていくわよ！」
雷を宿したサディナは自分に攻撃魔法を落としてもそれを利用する手段を持つ

ている。
敵にすると厄介な相手だ。無駄のない動きで追い詰めてくる。
ゼルトブルのコロシアムで痛いほど見せつけられた。
「この、調子に乗るなぁあ！」
風の鎧を再生成させたシルディナは目を細めてサディナに刀を向ける。
「まだ！　私の力はこんなものじゃないわ！」
「じゃあ、やってみるかしら？」
一いっ旦たん距離を取ったサディナとシルディナが睨みあう。
双方の放つ雷と風がぶつかりあっているが、コレは本人達が意図して放っているわけじゃない。
あくまで予備動作による副次作用か。
「な、なんか凄いです」
リーシアが戦いを見て、呟つぶやく。
全くだな。ここまで熾し烈れつな姉妹対決があっただろうか？
これを双方シャチ獣人が放っているっていうのだから感慨深い。
ホント、サディナは底が見えない奴だよな。
ただ……この戦いを見ていると。
サディナ、雷使い。

シルディナ、風使い。
これって風神雷神の対決にも見える。
元々サディナと合唱魔法を唱える時に使う雷神降臨の所為だな。
後は、おそらく二人揃って龍脈法習得の水系魔法の資質持ちだ。
意志を持った雷がシルディナに襲いかかり、シルディナは銛の一撃を避けながら風の混じった水流で雷を受け流す。
「何でしょう。とてもきれいな戦いに……見えてきました」
「そうだな」
卓越した技術のぶつかり合いに魅入られるかのように、双方の軍は戦いを見守ることしかできない。
「これはどうかしら？　雷撃銛！」
サディナがシルディナに向かって帯電した銛を投げつける。
シルディナは投げられた銛を風を纏った刀で弾いた。
サディナが手を掲げると、投げた銛が円を描いてサディナの手元に戻ってくる。
磁力操作までできるのか……雷属性って結構万能だな。
「もっと行きましょうか」
銛がバチッと雷を更に宿して三つ叉またの巨大な銛を形作っていく。
更に補充とばかりに雷がサディナに降り注いでいくぞ。

「ん――……ちょっと魔力を補充かしらね」
言いながら腰から酒瓶を取り出して飲み始めた。
こんな時でも余裕だな。
が、シルディナも負けずに酒を飲む。
「んく……んく……ぷはぁ！」
「あら、結構いける口？　飲み比べでもいいわよ」
「どっちにしても負けないわ！　神託の恐ろしさを見せて……やりゅ」
あ、酔い始めているのか？
「あなた――……さっきから気になっていたんだけど、既に泥酔してるんじゃないかしら？」
キョトンとした様子でサディナがシルディナに尋ねる。
お前は素が酔っぱらってるみたいな性格だよな。
「酔っていない……いける」
シルディナが背後にいる自軍の兵士に視線を向けると、足元に一本の銛が投げ込まれる。
錆びた……銛か？
「あら？　それって……懐かしいわね。お姉さんの銛じゃない」
「そうだ。お前がクテンロウに置いていった銛だ」

シルディナはそう言うと錆びた銛を握り締める。
「……ラフ？」
ラフちゃんがなんか目を凝らし始めた。
「どうした？」
「ラフラフ」
何やら説明してるが、悲しいかなよくわからん。
フィーロに目を向ける。
「えっと、あの銛から何か出て、あのお姉ちゃんの体に入っていったって」
例の神託ってやつか？
「ここまで追い詰められたのは珍しい……見せてあげる。本当の水竜の巫女の力を！」
そう言って……シルディナが銛を投げ捨ててからサディナに向かって不吉に笑い掛ける。
何だろうか？　シルディナが纏う空気が変わった気がする。
「ドライファ・ライトニングスピード、サンダーガード！」
シルディナが、サディナと同じく雷の援護魔法を発動させた!?
「もちろん……こっちも纏えるわよ」
で、風の鎧も纏っている。

風雷の鎧と化した魔法を纏ったシルディナが笑い掛ける。

「あらー？　雷の魔法まで使えるのかしら？　だけど、妙ね。お姉さんと同じ魔力を感じたけど」

「これが神託の力……神託の資質なき巫女、貴方自身が捨てた想いが勝敗を決するのよ」

……捨てた想い？

「一度抽出すれば……こうして札に収めることができる！」

今度は俺にも見ることができた。白紙のカードを取り出して何か魔法的な力を込めた。

するとカードに柄が浮かび上がっている。雷とシャチのイラストか？

……ゾディアからもらったカードとよく似ているんだが……。

「なるほど、本当の神託ってそういうことなのね。物や何かに宿った意志をカードに写して携帯して、いざって時にその身に宿し、再現する力……凄いわねー」

合唱魔法の域に差しかかっているあの魔法の使い方は、もしかしたら神託とやらの応用なのではないだろうか？

シルディナは風魔法の使い手だ。空気の振動で疑似的な詠唱を可能にしている。

意識は神託の力を借りて、詠唱は魔法で分担する。

そうすれば合唱魔法を実質一人で唱えられるのかもしれない。

フィーロも真似すれば一人で合唱魔法を使えるか？
「フィーロも風の魔法が使えるよな？　風の魔法で詠唱を作って一度に二つの魔法を唱えられないか？」
「えー？　えーっと……」
フィーロが腕を組んで考えてから魔法を唱えようとして首を傾かしげる。
「一つの魔法で二つの魔法を作ろうとしたけど無理だったー。魔力がぐるぐるするー」
うん、フィーロの説明が下手だからわかりづらいが、ものすごく高度な技術なんだろう。
容易く真似できることじゃないか。
サディナがクテンロウに置いてきた銛に残っていた思念を拾い上げて力に……なんだろう。
今までの偉人や勇者達の遺品の数だけ強くなる。
そんな才能を神託と呼ぶのなら、重要な役職を担う理由もわかる。
「感心していられるのも今のうちなんじゃない？」
ただ、人格にも結構影響が出てるようだ。
さっきよりもシルディナの喋しゃべり方がサディナに似てきたようだ。
「近代最強と呼ばれた巫女と私の力が合わされば、勝てない相手はまずいない。

更に……」
ズボッと地中から禍まが々まがしい刀が出現してシルディナがそれを掴つかむ。
アレって……間違いない。かなりやばい呪われた品だ。
あんなものを持って大丈夫なのか？
「ぐ……さア！　いくぞ！」
シルディナが纏う気が禍々しく変色し始めている。
あんまり良いことをしているようには見えないな。
俺達が助太刀するか？
そう思っていると、サディナが俺達の方に視線を向けて遮る。
「どんなものに宿った意志でも汲くみ取れるのは凄いわねー。お酒に酔ってるからできるってわけじゃないわね」
なんとも気の抜けた声でサディナは応える。
「さーて……じゃあお姉さんが、最近習得した一番の大技を見せちゃおうかしらね」
ゴゴゴってな感じでサディナの方から轟ごう音おんが響き渡る。
「せめてもの情け、一撃で仕留めてヤる！」
一瞬、女とは思えない声が聞こえた。
「うー」

「ラフー」
フィーロとラフちゃんが脅おびえたようにシルディナを見ている。
「早くやめさせた方がいいよー、あのお姉ちゃん。なんか見てると悲しい」
「ラフー」
「悲しい、か……」
歪ゆがんだ環境で育ったサディナの分身みたいな相手のようだしな。
早めに止めるべきだと思うが……。
サディナとシルディナが各々必殺技を放とうとしている。
まず放ったのはシルディナだった。
黒い二刀流の刀に雷と風を纏いサディナに向けて振りかぶる。
それだけで二つの龍がサディナに向かって飛んでいく。
「喰くらえ！　最強の殺戮の巫女は、私だ！」
次いで、白黒のシャチ姿に変身……じゃないな、魔法で形作ってサディナに向かって噛かみつきとばかりに刀を同時に振り下ろす。
二龍とシャチを模かたどった波状攻撃がサディナに向かって襲いかかる。
だが、サディナは銛を前に向けたまま意識を集中して魔法詠唱を繰り返していた。
そして攻撃が命中する瞬間。

「行くわよー！　鳴なる神かみ！」
天空から幾重にも降り注ぐ雷光が龍もシャチも全てを弾き飛ばす。
っていうか鳴神!?
獣化補助で変化した時にしか使えなそうな専用魔法を、サディナは何もしなくても使えるようになったのか？　それとも感覚を掴んだからいつでも唱えられるようになったとかか？
「サディナ姉さん、ナオフミ様の力なしであの魔法を唱えられるようになったってことですか!?」
バチバチと　どっかのバトル漫画みたいに放電が続いている。
「ぐあああああああああああ!?」
シルディナが高密度の雷を受けて吹き飛ばされた。
「見た目は確かに強そうだけど、密度が足りないわ。あえて言うなら混ぜすぎて軽い一撃ね」
「く……くうう……」
「フォウルは獣化した時に特に何か技とか使ったわけじゃないしな……感覚的に使えたんだろうか？」
「どうなんでしょうか？」
サディナに視線を向けるとウィンクしてきやがる。

答えろっての！
やり方次第で獣化補助は大きな成長効果が期待できるものになるんだぞ。
シルディナは刀を地面に突き立てて立ち上がる。
タフなのか、それとも天命の祝福の力なのか。
アストラルエンチャントをしているようには見えないんだがな。
目を凝らして確認する……やっぱりよくわからない。
独自基準の補助魔法みたいなものだし、目で判断することはできないか。
「あとね、お姉さんの想いを再現したみたいだけど、過去のお姉さんより今のお姉さんの方が強いに決まってるじゃない。わからないのかしら？」
まあ、確かにな。
サディナが持っていた何かから、過去のサディナの意識をトレースすることができるんだろうけど、本人相手にそんな真似しても今のサディナの方が経験など、いろんな面で上だ。
他に呪われた刀と別の何かでドーピングしているんだろうけど、その分、統一感がない。
「属性を沢山持っている子に似た感じで、ツギハギだらけなのよ。もっと上手く使わないとね」
確かリーシアが複数属性持ちだったよな。

エレメンタル……火と水と風と土の合成万能属性。
使うのが難しいのと資質の関係で使用者が少ないやつだ。
まあ器用貧乏のリーシアらしい魔法だ。
「確かに並々ならない才能と努力を感じるわね。だけど、いいえ、それ故に他者の力を借りれば借りるほど隙が多くなっていくわ」
「他者の力!?　……この力こそ私の力よ！」
サディナは首を振り、嘆きながら応える。
「これが神託というのなら、お姉さんに才能がなくてよかったと思うわ。貴方はその力でお姉さんよりも凄いところにいるんでしょ？　それでいいじゃない」
「認め……られない！　私こそ、本当の巫女であることを証明しなきゃいけないのだから……」
「あと、魔法は感情に結構左右されるわ。そんな滅茶苦茶な状態で使っていてもお姉さんには敵かなわないわよ？　もっと余裕を持ちなさいな」
シルディナはスッと、またもホルダーからカードを取り出して構える。
するとシルディナの傷が治っていく。
回復系の魔法が使えるようになるのか？
便利だな。一人いればいろんな局面で戦える万能戦士だぞ。
サディナは化け物みたいに強いけど、相手も相応な強さを持ってるじゃないか。

シルディナは、ルコルの実らしきものを取り出し、手で握り潰つぶして舐めた。

「あらー……」

あ、サディナがシルディナに羨うらやましそうな目を向けた。

「ヒック……」

お？　倒れずにいられるのか？

やっぱ俺以外でも食える奴がいるんじゃないか。

「……手段なんて選んでりゃれない。この手だけは、使う気はなかったけど……」

今、呂ろ律れつが回ってなかったぞ？

それからシルディナが札を取り出して構える。

ハンマーと陰陽のマークが描かれた札だな。

「ラフ!?」

何やらラフちゃんが変な声を出している。

ぼんやりと……桜色の何かが札から出ているように見えるな。

何だろうか？

「あれ？　何でしょう？　祝福とも何か違いますよ？」

「ラフタリアには見えるのか？」

「はい」

「この力は、わしゃしの最後の切り札……見てなさい」

札から何か力を授かったのか、シルディナの紋様が光る。薄ぼんやりと……魔力で構成された尻尾のようなものが生えると同時に……シルディナが亜人形態になるが、先ほどよりも素早い動きのため一瞬、目が追いつけなくなる。

高密度の風を纏っていて人影にしか見えないな……。

千鳥足だったのが、素早いステップに変化していく。

明らかに今までよりも動きがいい。

そして、複数のシルディナらしき影が現れてサディナを取り囲み、襲いかかった。

あの尻尾……誰かに似てるな。

徐おもむろに俺はラフタリアを見る。

ラフタリアとラフちゃんが目で一つの影を追っていた。

「あら？　幻覚？　この程度でお姉さんを騙だませると思っているのかしら？」

と、サディナが銛で分身したシルディナから一人を突き刺す。

それはラフタリアが見ていた影じゃない。

「甘い……音波で感知しているのはいいが、わざと見抜かれるように幻覚を放っているのがわからないだの？　もっと注意深くせねばだの」

だの？

喋り方が変わったな。これが切り札なのか？

シルディナは突き刺さったサディナの銛を掴み、風の塊となってその銛を弾き飛ばす。同時に他の分身がサディナに飛びかかった。

「あら？　さっきよりも密度が高いわね。随分と魔法も巧妙だし……まるで……」

もちろん、サディナはこれを雷の魔法と体術で巧みに避けるのだけど、徐々に追い込まれているように見えなくもない。

「サディナ姉さん！」

「ラフー！」

ラフタリアとラフちゃんが叫んだのは、亜人形態のシルディナが……大きな風を纏いながらハンマーみたいになった刀で殴りつけようとした瞬間だった。

だが、それさえも風で構成された分身で、シルディナが放つ陰陽のような紋様がサディナに絡みついて幾何学的な文字になって縛りつける。

「あら、随分と変わった魔法ね。少しずつお姉さんの魔力が散らされていくのがわかるわ」

サディナは雷の魔法をバチバチと帯電させて散らしているが、追いついていない。

それから風を纏ったシルディナは辺りを見渡し、ラフタリアと俺を見た後、呟いた。

「ふむ……」

バチンと拘束を断ち切って、サディナがシルディナに向かって突撃する。
もちろん、雷を纏った雷撃銛との併用攻撃だ。
シルディナは風を纏ったハンマーを腰の高さまで下げて、素早く、それでありながら大きく踏み込んだ。
「五行天命割り！」
ハンマーの先に陰陽が浮かび上がり、突撃してくるサディナに当たる。
もちろん、サディナはそれを逸らしながら銛で突こうとしたのだが――
「あ、あら？」
陰陽の力が誘導するようにガクンとサディナに命中し、雷を弾き飛ばして、魔法陣が浮かび上がり、五つの玉がサディナの周りで回り始める。
「土剋水だの」
シルディナがそう呟くと同時に、サディナが倒れ込む。
「な、何かしら？　随分と……動きが良くなったわね」
「ほう……これを受けて喋れるならば及第点。次は勝てるかわからんだの」
抵抗しているが、サディナは何かに縛られたように、立ち上がることすらできないようだ。
「こやつも随分と切羽詰まったことをしおる。先代の巫女よ、実質お前の勝利だ。これは反則だからだの」

制限時間付きの変化みたいな感じか？

神託……神様とやらを憑ひょう依いさせて代理で戦わせる攻撃で、今までの過去のサディナの残留思念とかを使ったものではなく、もっと強力な何かの意識を憑依させたものとかなんだろうな。

で、なぜか風を纏ったシルディナは風の中からラフタリアを指差す。

「現政権を畳むのもまた一興だの。このチャンスを逃す気はないだの」

そう言うと風が散り、亜人形態のシルディナが姿を現す。

「え？」

そこで俺はシルディナの姿を再度確認する。

やっぱそうじゃないか。偶然って怖いな。

「やはりゾディアか」

ポツリと俺がそう呟いた瞬間、シルディナ……いや、ゾディアが俺の方を見て目を大きく見開いた。

「ぬ！　いきなり不安定になっただの――」

シルディナの不自然な尻尾が急に消滅する。

どうも怪しげな力に手を染めているように見えるな。

方向性は違うんだろうが、カースシリーズを使っている勇者に近いものを感じる。

「あら――……」
　サディナも獣人化が解けて倒れた。
　それでも立ち上がろうとしているが、うまく立てないようだ。随分と強力な束縛攻撃だな。
　だがシルディナは、サディナとの戦闘は既に眼中にないのか、俺だけを見ている。
「なおふみちゃん……なんで、こんなところに？」
「そりゃあ俺が盾の勇者だからに決まってるだろ。サディナやラフタリアの隣にいたのに気付かなかったのか？」
　どんだけ集中していたんだよ。
　よくよく考えてみれば、ゾディアって名前、サディナのゼルトブルの時のリングネームによく似てるじゃねえか。
　ナディアと一文字違いだし、名前以外にも所々がよく似ている。
　酒に酔う前にあちゃーって言う口癖っぽいのもサディナに似てるし、酒好きなのも、俺がルコルの実を食った時の反応もそっくりだ。
「そんなぁ……」
　酔いが覚めたのか眠そうな表情でゾディアは俺を見る。
「知り合いですか？」

「ああ、元もと康やす二号と一緒に酒を飲んだ時に知り合った方向音痴女だ。卑猥わいな意味じゃなく、遊び相手になってほしかったみたいでな」

「敵勢力なのに知らない間にってやつですか？　サディナ姉さんと戦った時と同じですよ」

あ、ラフタリアも物わかりがいいな。

「さすがに俺もそこまで鈍感じゃない。疑ってはいた」

「ねえ、なおふみちゃん……その……」

「なんだ？　戦いたいならいつでも相手になるぞ？　本名はシルディナでいいのか？」

サディナを押さえつけることができるとか随分と化け物染みた強さを持ってるじゃないか。

まだ決着はついてはいないけど、十分驚異的な攻撃なのは間違いない。

「嘘うそだよね？　なおふみちゃんが、革命派の天命と共にいる精霊具の所持者っていうの」

「嘘じゃねえよ。この呪われた盾が見えないのか？」

自分で言ってて悲しくなる。

「じゃあ、サディナの恋人？」

「違う。誰が恋人だ」

「あらー？　どうなってるの？」
サディナも戦いに水を差されて首を傾げている。
「あちゃー……」
「もしかしてシルディナちゃん。ナオフミちゃんのこと気に入ってたのー？　ならお姉さんと一緒にナオフミちゃんと遊ぶ？」
「何言ってんだ！　勝負はどうした！」
「それどころじゃなさそうじゃない？」
サディナの言葉に不本意だが同意する。
シルディナの様子はかなりおかしい。
「なおふみちゃんはもうサディナのもの？」
「さっきから何言ってんだ？　そんなわけないだろ」
そう応えるとシルディナの表情が明るくなる。
「じゃあ……」
その直後――体に紋様が浮かび上がり、シルディナが肩を押さえつけながら呻うめいた。
「ぐううう……」
「どうした!?」
「ラフ！」

ラフちゃんがシルディナの腰のホルダーを指差す。
俺達にはなんにも見えないからどうしようもないぞ。
「はぁ……はぁ……」
「大丈夫か⁉」
シルディナを抱き寄せて容体を確認する。
この紋様が原因なのは一目でわかる。
「ラフ、ラフラフ！」
「えっとね。ラフちゃんの話だと、このお姉ちゃん、魂に穴が開けられてて、凄い形しているんだって。その魂の穴に何か力を入れて戦ってたんだって」
フィーロがラフちゃんの言葉を訳して伝えてくれる。ラフちゃんは幽霊が見えるからな。
それはつまり、神託の正体ってやつだろうか？
魂の隙を作って先祖の霊とかを憑依させる技術。
「それで？」
「ラフラフ」
「さっきは凄い何かを魂に入れていたんだけど、今は悪そうな何かが紋様から入って支配しようとしているんだって」
魂の類たぐいからの干渉？

「わかりました。下がってください」
ラフタリアが刀を霊刀に変化させてから居合斬りの構えを取る。
「今からその流れを断ちます。そうすればどうにかなるはずです」
「ラフー」
ラフちゃんがラフタリアの頭に飛び乗って、指差す。
斬るべき場所がわかっているってことだろう。
「水竜の巫女様に何をする！　皆のもの！　偽りの天命の命を奪え！」
そう煽せん動どうする兵士達が現れる。
最初から約束事を守る気がなさそうな連中だな。
が、それはごく一部の連中で、敵の天命派にもオロオロしているのが三分の二ほどいる。
結構、あっちの中にも迷っているのが多いみたいだ。
どちらにしても兵士は矢や槍やり、剣、刀、魔法等で俺達を攻撃してくる。
「桜天結界、流星盾、エアストシールド！　お前等！　先制攻撃をしてきた奴等に報いを受けさせろ！」
俺の宣言に応じて革命派の連中が雄たけびを上げ、俺達に向かって突撃してくる連中へなだれ込む。
「……ここです！」

スパンとラフタリアがシルディナの肩辺りに斬りつける。
するとバチッと文字が一部切り取られた。
紋様の点滅は小さくなったが、それでも点滅し続けている。
「ぐうう……や、やめて……うううう」
「ラフ」
「侵食はある程度抑えてますけど……なんですかこの紋様は！」
「奴隷紋みたいだけど配色がちょっと異なるわね。でも……こうかしら？」
サディナが酒を飲んで、紋様に魔力を入れながら触れる。
点滅が更に収まるが、それでも止まらない。
「放せ！」
シルディナはふらふらとした足取りで俺やサディナを突き飛ばして俺達を睨みつける。
何か、冷静でいられないようにされているのか？
「どうせ私なんて誰も望んでない……望まれて……ううう……あの人は、私を認めてくれる……これはその証、邪魔をするな！」
紋様を守るようにシルディナは立っている。
「あの人？」
サディナが眉を寄せる。

「だけどマキナ様の命令は絶対なの！　サディナを殺してから偽者の天命の命を狩らないと！　ぐ……やめ――離れろ！」
と、のた打ち回りながらシルディナは怒鳴った。
そして紋様の一部が弾ける。
「ラフ？」
「あれ？」
「あら？」
「どうした？」
「いえ……ラフちゃんの協力で見えていた悪そうな力の流れが四散して、大きな光がシルディナさんの中に入っていきました」
「お姉さんは周りの龍脈から綺麗な力の流れが入っていくのが見えたわね？」
だらんと腕を下ろしたシルディナが静かに俺達を見る。
「ふむ。急ごしらえならこれがいいだの。上出来だの」
これは……さっきサディナを押さえつけた人格のように見える。
そいつは俺を見てから何度か頷く。
「精霊具の所持者、大義だの。こっちは仕事があるだの」
「は？」
「今すぐ戦いをやめるだの！　こっちの軍は革命派に投降するだの！　従わない

者は逆賊とする！　革命軍と協力して取り押さえるだの！　以上だの！」
「「「は！」」」
混乱していた防衛軍が、俺達を襲う連中を後ろから攻撃して押さえつける。
割と統率の取れた動きだった。
「じゃあ、早めに終わらせてくるだの」
そう言って……風を纏ってシルディナは姿を消した。
「え？　今のなんだ？」
ラフタリアとラフちゃんが空を見ている。
なんだ？
「姿を消す魔法を使った後、風の魔法で空を飛んで都の城に行きました」
「風魔法ってそんなことができるのか？」
「飛べるの!?　フィーロもやってみたい」
「どうなんでしょうか？　少なくとも見たことがない魔法です」
合唱魔法を一人で唱えられる奴だし、誰でも真似できるものじゃないだろう。
「ところで戦いはどうなったのかしら？　お姉さんの鬱うっ憤ぷんを晴らしに行っていい？」
まあ、戦いの途中で横やりが入ったようなもんだしな。
周りを見ると合戦が始まっている。

というか、なんだこの急展開は。
防衛をしていた連中は味方同士で争いを始めるし……。
いったいどうなっているんだ？
「ラフ？」
「んー？」
ラフちゃんとフィーロがなぜか俺の方を見ている。
「どうした？」
「えっとね、ラフちゃんのお話なんだけど、ごしゅじんさまのポケット辺りがなんか光ってるんだって」
「ポケット？」
俺はラフちゃんが指差すポケットを見る。
するとシルディナが俺にくれた札が出てくる。
一体、何だろうな？
シルディナが何か能力を使う時に出していたのは確認しているけど……。
絆きずなの方の世界にあった札とも違う。どっちかというとカードっぽいし。
「ラフー」
「え？　えっとねーなんかね、そこから助けてって声が聞こえるんだって。それ、あのお姉ちゃんの魂の一部が入ってるみたいだって言ってるよ」

「そう……か」
なんで初対面の俺にこんなものを渡したのかよくわからないが、少なくとも重要なものみたいだな。
思えばものすごく楽しそうに酒を飲みカードをしていた。
戦場での表情とは全く違ったと思う。
「助けたいですが……追いかけますか？」
「そうだな」
俺達は東の都に目を向ける。
江戸とかと比べると小さいが、町と呼ぶには大きい……そんな感じの城下町が見える。
「あそこに乗り込んで大将である天命を捕らえれば俺達の勝利だしな。あっちが敵前逃亡をしたんだ。行っても文句は言われまい」
城のあちこちから煙が上がり始めている。
シルディナの奴、何をしているんだ？
放っておいても勝手に自滅しそうだけど、行かない手はないか。
錬と樹が近寄ってくる。
「ともかく、このチャンスを逃す手はない。このまま乗り込むぞ」
「はい！」

「しゅっぱーつ！」
「ラフー！」
ってな感じで俺達は軍を動かし、東の都に乗り込んでいったのだった。

# 十三話　過去の天命

「なんだ？」
城下町に侵入し、城の方へ近づくと煙が立ちこめていた。
城下町の混乱はこっちの軍に任せて、俺達は事件が起こっている城へと向かう。
城門が開いている。出入り自由って感じだ。
煙は出ているが……火事にでもなっているのだろうか？
「水系の魔法が使える奴等は火消しをしてくれ。襲ってくる奴等には遠慮するなよ！」

指示を出してから俺は流星盾を展開して一番前を進んでいく。
見取り図は事前に入手してある。
目的は相手側の天命の捕縛だ。
頭さえ捕らえてしまえば後はどうとでもなる。
ただ、こんな騒動がある時に相手の天命がバカ正直に天守閣とかにいるとは思えない。
俺だったら逃げる。
逃げてから打開策なり考えるだろう。だからいない可能性が高いな。
そう考えながら城内を探索していくと、兵士や身なりの良い死体があった。
近くで震えている貴族も発見する。
「た、助けてくれ！」
命乞いをしながら貴族は俺に頭を下げる。
あまりに情けない言動に思わず呆あきれてしまうな。
しかし、こういう奴の方がペラペラと情報を話してくれるもんだ。
「何があったんだ？」
「死にたくない！　い、いやだ！　あんな恐怖、もう味わいたくない！」
「いいから事情を話せって言ってるんだ。それとも、ここで死ぬか？」
「と、突然城内にあ、あの方が現れ、強大な力で次々と！　一刻も早く逃げねば

殺される！　だから――ヒィイイイ！」
　怯おびえきった顔をしたその貴族は、ラフタリアの顔を見て竦すくみ上がり、失神した。
「な、何なんですか。私の顔を見て失神するって……」
　投降してきたのにラフタリアの顔を見て失神するって。
「そんなに怖い形相で睨にらんでいたのか？　俺がラフちゃんグッズをセインに注文する時みたいな顔だったとか？」
「ナオフミ様は私を何だと思っているんですか？」
「娘みたいな――」
「もういいです。聞きたくないです」
　おや？　ラフタリアが更に不機嫌になったぞ。
　俺に親づらされるのがそんなに嫌か？　きっと難しい年頃なんだろう。
　死体の方を確認しよう。
「首を鋭い何かで落とされているものと……なんだ？　これ？」
　兵士の方は鋭い剣か何かで斬り落としたみたいな綺き麗れいな切り口で、身なりの良い死体は、胴の上半分を何かに叩たたき潰つぶされたような惨むごい殺され方をしている。
　おそらく、シルディナがやらかしたんだろうと思うが、どんな殺し方だ？

「鈍器でしょうか？」
「んー？」
フィーロが羽からモーニングスターを取り出して振り回してみせる。
やめろ。それじゃない。もっと大きい鈍器だ。
「少なくともフィーロが持っているモーニングスターよりも大きいな。そしてこの潰し方からするにハンマーじゃないだろうか？」
錬れんが死体をくまなく確認して呟つぶやく。
「間違いないな」
「ああ、どっちにしても警戒しながら行くぞ」
「わかりました」
そんな感じで俺達は警戒しながら進んでいった。
死体が転がっている方角を辿たどり……城の裏庭へと出た。
そこは訓練場で、盾や剣、弓っぽい武器を装備した藁わらの案山子かかしが置かれている。
他にラフタリアっぽい絵が描かれた案山子もあるな。
間違いなく訓練用の人形だろう。
あとは井戸か？
「終わりだあああああああああああああの！」

と、声が聞こえて、地響きが起こる。
訓練場の真ん中に巨大な穴と亀裂が形成され、円形に血が飛び散った跡ができあがっていた。
「まったく、あまりにも愚かだの。人の上に立つ者としても、いや、コイツは先兵だっただの。人としてもダメだの」
そこにいたのは……巨大なハンマーを持ち、巫み女こ服を着用した女の子だった。
ラフタリアによく似ている。
光りながら膨らんでいる尻尾。長い髪と端整な顔立ち。姉妹と言われても何の不思議もない少女だ。
「サディナの妹にも驚いたが、ラフタリアにも妹とか姉がいたのか？」
「ないと思うわよー？　目当ての天命なんじゃないのー？」
サディナはそう言っているが……確か元もと康やす二号が糞くそガキとか言っていたし、ラルヴァ達から聞いた話だと相手の天命は少年のはずだ。
これまでの情報と一致していない。
「まさか男の娘こってやつなのか？」
「サラッとそういう言葉が出てくる尚なお文ふみは、なんだかんだいってオタクだったんだな」

「うるさい」
錬を睨みつける。
そりゃあ俺はオタクだったよ。間違いなくな。
「いいえ、この人は天命じゃないと思います」
ラフタリアは刀の柄つかを掴つかんでいつでも抜刀できる構えを取りながら答える。
「そうだの。確かに、ここにいる私は、もう天命ではないだの」
目の前のラフタリア似の少女はハンマーを軽々と持ちあげて肩に乗せてこちらを見る。
この口調……聞き覚えがあるぞ。
「貴方あなたは、シルディナさんのはず。どうしてこのような真似を？」
やはりそうか。
逃げていったシルディナの口調と同じだった。
「国に巣食う膿うみ……マキナを仕留めただの。まあ、散々体の持ち主に抵抗されたがの。精霊具の所持者や末まつ裔えいも理解しているはずだの」
「理解？」
「そんなところまでわからないだの？」
俺達が首を傾かしげていると、そいつは見透かすかのように頷うなずく。

「ラ、ラフ!?」
そこでなぜかラフちゃんが驚きの声を上げる。
なんだ？　何を驚いているんだ？
そう思っているとラフちゃんが俺に素早く飛び乗って、頭に乗っかりそいつを指差す。
ラフちゃんのサポートを受けた上で見えたそいつはシルディナだった。
シルディアに憑ひょう依い……神託とやらで霊体のような存在が映っている。
今まで見えていたラフタリアに似ている少女は幻覚で、実際はシルディナなのか。
「ラフ！　ラフラフラフ！」
そちらではないとでも言うかのように鳴くラフちゃん。
なので更に目を凝らすと、シルディナの後方……何かを叩き潰した後からぼんやりと……禍まが々まがしい、ソウルイーターのような、キョウのような亡霊がゆらぁっと姿を現す光景が見えた。
姿は女……？　なんとなくだが、見ていて不快になるような顔の作りをしている。
なんだ？　キョウなんて目じゃないほどの禍々しい気配。
呪いに汚染されている部分がビシビシと痛みを発している。

そんな邪悪そうな奴がシルディナ目掛けて飛びかかろうとしているぞ。

「お、おい！」

俺が注意するよりも早くシルディナの体の紋様が歪いびつに光る。

「ぬ……術者を仕留めたというのにしぶとい……だの」

シルディナが呻うめきながら背後に纏まとわりついた亡霊に向かって言い放つ。

胸に向かって執しつ拗ように手を伸ばしている。

「ぐ……まだ紋様が残っている……だの」

「まさか紋様に逆らって私を殺すとは思いもしなかったわ。だけどその程度で私を消せると思ったら大間違いよ。こんなこともあろうかと用意していた予備の体なんだから」

予備の体？　ってまさか。

「毒婦がいつまでも……さっきまでシルディナを罵ば倒とうしておきながら体まで乗っ取る気だの」

「あら？　貴方に言われる筋合いはないわ」

さっきの様子から考えて、シルディナが叩き潰したのはマキナとかいう毒婦なんだろう。

幽霊になってシルディナに憑依しようとしているように見える。

「神託なんて大層なことを謳うたっているけど、魂とか残留思念が乗り移りやす

い便利な体質ってことでしょ。いい加減老いで美貌を維持できなくなってきたし、あの小便臭いガキとも仲が良いから取り入るのにいい体だと思って、念のために儀式を施しておいて正解だったわね」
「ぐ……シルディナの体はお前なんかに渡さないだの」
「逆らったから殺しておこうと思ったけど、丁度良かったわ。その体は私のものよ！　返しなさい！」
最初からシルディナの体が目当てだったとかどんだけクズなんだ。
乗り移りやすいとか他者に乗り移るとか、発想がホムンクルスを作っていたキョウを連想させて苛いら立だつな。まったく、どこにも似たような考えの奴がいるんだな。
老いで美貌を維持できないから他者の体を乗っ取って成り代わるなんてとんでもない。
「返せもクソもあるか。最初からお前のものじゃねーだろ！」
まるでシルディナがこいつに体を明け渡すために生まれてきたみたいな言い分だ。
そんなことのために作られたってわけじゃないだろうが、シルディナがどんな生い立ちなのかを察することくらいできる。
サディナの代わりに生み出され、やりたくもない仕事をやらされて、俺と遊ん

だ時にとても楽しそうにしていた。たった数時間のことを、だ。
「何を怒っているんだ？」
ここで黙って成り行きを見ていた錬が俺に尋ねてくる。
「シルディナが殺した奴等のうちの一人が亡霊化して体を乗っ取ろうとしている」
「なんだって⁉　そんなことができるのか？」
「ああ、しかもあのクズ女に似ている。助けたいが……俺には攻撃手段がない」
ソウルイーターシールドで攻撃ができればいいが、結局はカウンター狙いの俺では効率が悪い。
カウンターしかできないと察せられてしまえば何もできないしな。
錬もあのクズ女ことヴィッチを思い出して不快そうにしている。
どうやらそれは樹いつきも同じみたいだ。
「大変！　お姉さんも力になりたいけどどうしたらいいのかしら？」
「幽霊に攻撃を当てられるか？」
「聖水が効果的かしら？」
「ナオフミ様、私が行きます！　幽霊にはこれです！」
ラフタリアが対幽霊用のソウルイーター素材の刀に変化させて答える。
錬や樹も合わせて変化させた。
「お願いよ、ラフタリアちゃん達！」

「ああ、なんとなくだがあの子の背後辺りか？」
「ああ、間違いない！」
「わかりました！」
ラフタリアが駆けだし、錬が後を追い、樹が矢を放つ。
しかし、ラフタリア達は幽霊の類たぐいを目視できない。
俺とラフちゃんが指差したところに向かって各々が武器を振りかぶる。
「アハハハ！　邪魔なんてしない方が身のためよ！」
するとなぜかマキナは怪しげな防御膜のようなものを展開させてラフタリア達の攻撃を避け、黒い触手のようなものを伸ばして纏わりついた。
「ぐ……体が重い。幽霊系の敵の状態異常か！　見えない……見えれば倒せるのに」
亡霊であるはずなのに目視できないのは幽霊って扱いだからだったか？
キョウの時は途中で目視できたぞ。しかも幽霊状態なのに地味に強い。
既に怨霊になっているというのに、なんで見えないんだ？
「無駄無駄無駄！　その程度の攻撃で私を止められると思うんじゃないわ！　アハハハハハハハ！」
この笑い方、ヴィッチを連想して凄すごくイライラする。
どうにかして仕留める手立てはないか？

「ラフ！」
「ああ、ラフちゃん、ラフちゃん！　行け！」
ラフちゃんが走りだしてラフタリア達の援護に向かう。
見えないってかなり厄介だぞ。しかもシルディナの体を半分くらい支配しているのか、ラフタリア達に風の魔法を当てて吹き飛ばしてきやがる。
「ラフー！」
ラフちゃんが援護することを悟っているのか、ラフちゃんに狙いを絞っている。
「それじゃあ……ダメだの……精霊具の力を……魂を狩る武器ならもっと引き出せるだの……」
ラフタリア似の、シルディナに憑依している奴が助言してくる。
魂を狩る武器性能を引き出す。
ソウルイーターシールドに変えて目を凝らす。
専用効果にソウルイートというものがあるんだが……。
そう思って盾に意識と気を込めるとぼんやりと怨霊の姿が見えてきた。
「ラフタリア、錬と樹！　ソウルイーター系の武器に力を込めろ！　姿が見えるようになるぞ！」
どうやらソウルイーター系の武器には幽霊を目視することのできる効果が隠されているようだ。

「武器の力を……引き出す……見えてきました！」

「ああ！　そこだ！」

「射抜きます」

ラフタリアと錬はマキナの放った束縛を弾はじき、揃そろって亡霊に向かって攻撃を放つ。

先頭はラフタリア、次に錬が続き、眉間に樹の放った矢が命中。

「そこ？　じゃあお姉さんも行くわよ」

聖水を取り出したサディナが、樹の放った矢を目印に龍脈法の魔法を唱える。

『我、サディナが聖水の力を引き出し、顕在を望む。龍脈よ、我が敵を屠ほふれ』

「セイントアクアブラスト！」

「ギャアアアアアアアアアアア！　おのれえええええええ！」

サディナの作り出した聖水の水弾が命中、激怒したマキナが鬼の形相で襲いかかろうとしてくる。

だが、もはやお前は俺達の敵じゃない。

「お前みたいな身勝手な奴はさっさと消え失せろ！」

ラフタリア達の前に立ち、盾で受け止める。

ソウルイーターシールドのカウンター効果が作動してマキナの力を奪い取る。

「よく……やっただの！」

俺達の攻撃で拘束が解けたシルディナが、ハンマーを横に振りかぶって亡霊のマキナに叩きつける。
そして……何やら印を結んだように見えた。
「ぐあああ！　許さない！　私の邪魔をしたことをその身をもって後悔させてやる！」
「この地でお前に生き残る術すべなど残されていないだの」
シルディナが足をドンと強く踏むと、ハンマーが一際輝いてガツンと衝撃が走る。
「ぐあああああああああああああああ！」
マキナは跡形もなく消し飛び、赤黒い残ざん滓しが散る。
再生は……もうしないっぽいな。
ビシッとシルディナに纏わりついていた紋様が完全に弾けた。
「これでやったか……」
あれがマキナとかいう毒婦だったのか。
死んでから他者に乗り移ろうとする発想には嫌悪感しか湧かない。
どちらにしても処刑は免れなかっただろうから、手早く済んでよかったと思うべきか。
「奴を殺さねばクテンロウは良くならん。やっと仕留めることができただの」

満足したかのように答えるシルディナ。

「さて、と……このまま解けてしまっては今度はいつ出てこられるかわからんだの」

さっきも似たようなことを言っていたな。このままシルディナを乗っ取るならマキナと同類だぞ。

「戦う気か？　この数相手に勝てると思っているのか？」

なんとなくだが、先ほどのやり取りからみて敵ではない気はする。

「がんばればどうにかなりそうな数だの。精霊具も声を聞く限りあまり芳かんばしくはないように見えるだの……だけど」

シルディナはビッと俺を指差してからラフタリアに顔を向ける。

「精霊具の所持者、お前はシルディナからもらったカードがあるだの」

「あ、ああ……これか？」

俺はシルディナがよこした変わったカードを取り出す。

そしてシルディナはなぜかラフタリアを指差した。

「精霊具の使者に従う天命を指定するだの。お前が一騎打ちに応じれば、シルディナを解放してやるだの。もちろん衰弱したシルディナをちゃんと助けるだの」

「なに!?」

「盾の精霊具の所持者よ。それはシルディナのくり抜かれた心の結晶だの」

凄く重要なものをいつの間にか手渡されていた？
シルディナの奴、重いものを渡しやがるな。しかも何かに操られているっぽいし。
マキナか、謎のラフタリア似の奴かの二択だったら……どっちがいいのだろうな。
「よくもまあ、見知らぬ相手にそんなものを渡せるだの。理解に苦しむだの……いや、必要ないと、せめて大事な部分を初めて気に入った異性に渡しただのな」
「あら｜……」
「先代水竜の巫女、隙すきを見て攻撃しようとしても無駄だの」
サディナが動くよりも前にそれを注意して止める。
隙がないな……。
「断ったらどうする？」
「その時はシルディナの命はないだの」
く……シルディナがどうなろうと知ったことではないと言えなくもないが、知らない相手じゃない。サディナの妹ということもあるが、嫌いになりきれない。
苦労を察することができるし、俺にそんな大層なものを預けたことに対して色々とぶちかましてやりたい。
「その態度じゃマキナと大して差がないぞ？」

「どうとでも言うだの。あんな毒婦を信じていた報いだの」

「ナオフミ様」

ラフタリアが俺をまっすぐ見つめて言う。

「私に挑戦させてください」

「しかし……」

これはある意味、シルディナの命を人質にラフタリアを殺そうとしているのと同じだ。

そんなふざけた条件をこの場で飲めというのはおかしい。

非道だと罵りのしられてもいい。ラフタリアが戦う必要は……。

「お願いします。これは私が苦しむシルディナさんの呪縛を解ききれなかった所せ為いなんです」

「だが……あの呪縛は……」

見た限り、先ほど紋様は破壊されたように見えた。

「それに、ここで逃げたらもっと被害が出るように思えます」

「だの。そのような意識で天命を担う気ならここで調停者として仕留めてやろうと思っているだの」

調停者……それってクテンロウの連中が所持していた武器の名前だぞ。

「お前は一体何者だ？」

するとシルディナの体を乗っ取っている何かが俺に視線を向けて答える。
「神託の意味を理解するだの。まあ私は残留思念のようなものだのだが。ま、話はそろそろにするだの。受けるか受けないか。今はただそれだけだの」
「ナオフミ様」
受けねばラフタリアとシルディナの両方を殺すと言っている。
ラフタリアだけに戦わせるのは……悩んでいる暇はないか。
「わかった」
もしもラフタリアが負けるようなことがあったら、戦いに介入してでも止める。
俺は卑劣な人間だ。シルディナに取り憑ついている何かがラフタリアとの戦いで消耗しているのを察したら不意打ちでも何でもして止めてみせる。
了承すると、ラフタリアは一礼した。
「ありがとうございます」
シルディナに取り憑いた何かはカードを指差す。
「それを私の胸に当てれば、心の穴は埋まって拘束は解けるだの。隙あらば狙ってこいだの」
いや……このシルディナの体を乗っ取っている奴の説明よりも効果がありそうに感じる。
魂の欠片かけらだろ？　衰弱して情緒不安定だったところまで、治療できるん

じゃないか？
「ラフー！」
ラフちゃんが何度も頷いている。言っていることが正しいってことか？
俺はラフタリアにカードを手渡す。
「頼んだぞ」
「ええ、絶対に勝ってみせます。私をここまで連れてきてくれたナオフミ様をはじめ、皆さんのためにも！」
強く刀を握り締めてラフタリアはカードを胸元に隠す。
隙あらば取り出せる位置だ。
「しかし……変わった波長の武器だの。精霊具の眷けん属ぞく……いや、異なる世界の精霊具の眷属だの」
よくラフタリアの所持する刀が異世界の眷属器だって見抜いたな。
「では行きます……」
「いつでも来るだの」
シルディナに憑依している何かとラフタリア、こうして見合う二人を俺は似ていると感じる。
「ナオフミちゃんもわかってるんじゃない？　お姉さんの妹が神託で何を降ろしているのか」

「ああ」

残留思念とか言っていたし、シルディナに、魂に何かを入れて自らが行使できない複雑な魔法を使いこなす能力があることはわかる。

クテンロウを出る前のサディナになりきっていたみたいだし、魂じゃなくてもいいのだろう。

で、魔力で構成された尻尾と、外見の大きな変化。

ラフタリアには本当の姿がわかるということは幻術の類なのだろう。

そして残留思念を拾い上げて人格と成すならば、今のシルディナを支配している思念は過去の天命である可能性が高い。

だから化けた姿がラフタリアに似ているんだ。

シルディナに憑依した何か、過去の天命が俺を見る。

「ハンデだの。盾の精霊具の所持者。できる限りの援護魔法を掛けてやってもよいだの」

「舐めた真似を……」

どこまで余裕を見せてやがる。

だが、こちらが有利になるなら利用しない手はない。

「サディナ」

「わかったわ」

もうサディナと合唱魔法を唱えるのにも慣れてきたな。
慣れた自分が悲しい。
「『雷神降臨！』」
ラフタリアに雷神降臨を施す。
「貴方はいいんですか？」
「問題ないだの。こっちはこっちで天命としての力を展開させるだけだの」
ドスンとハンマーの持ち手の部分を地面に突き立てる。
それだけで辺りに桜光樹が生えて急速に伸び……桜天命石が生成されて結界を生成する。
これはこっちも桜天命石を使って結界を作りだして無力化――
「今、精霊具固有の魔法を唱えても意味がないとか思っただの？　残念だけどある程度設定して、無効化はしてないから安心するだの」
「信じられるか」
「疑い深い精霊具の所持者だの。どちらにしてもそこの天命では私の展開した結界を相殺などできないだの」
ラフタリアが頬ほおに汗を流しながら頷く。
「ええ、そうでしょうね。ですが、手のひらの上で踊らされているようで不愉快なのは事実です」

「負けそうになったら設定を変えると？　それは国を担う調停者に対する冒ぼう涜とくだの。そんな真似をするなら素直に敗北を選ぶだの」
「ナオフミ様ではありませんが、偽りだったら容赦しません」
俺じゃないがってところが引っかかるような気もするが、まあいいだろう。
「じゃあ……勝負、開始だの！」
過去の天命は一瞬でラフタリアの目の前に移動して、巨大なハンマーで横薙ぎにしてくる。
「はぁあああ！」
そのハンマーをラフタリアは受け止めもせずに前に飛び出し……すり抜ける!?
な、なんだ？　俺の目がおかしくなっているのか？
辺りを確認すると、みんな揃って目を凝らしている。
「受けるだの！」
「こっちもです！」
過去の天命がハンマーを振りかぶると、炎や氷、果ては隕いん石せきまで飛来し……更に過去の天命が幾重にも増えて見える。
同様にラフタリアも多重に増え、全てを受け止める。
これってもしかして幻覚魔法によるばかし合いか？
実体のない幻が観客である俺達を騙だまし始める。

やばい。しっかりと確認したいんだが、よくわからなくなってくる。
「ナオフミちゃん、目で見るんじゃなくて別の感覚で見ればいいんじゃない？」
サディナがそう言って指差す。
俺は気を見るように目を凝らして確認する。
するとそこにはラフタリアと過去の天命が打ちあっている姿が見えてきた。
「おお、感覚さえ騙す幻覚によくついてくるだの。十分だの」
「魔法で誤魔化そうとしても私は騙せませんよ！」
ラフタリアは鞘さやから刀を抜いて、疑似的な加速状態になって居合斬りを放っているのだが、当たらないのかそのまま振りかぶってスキルを放つ。
「スターダストブレイド！」
ラフタリアが振りかぶった刀身から星が散って相手を斬りつける。
刀身自体の攻撃力も増加しているが、広範囲に攻撃が命中するのが長所だ。
隙もほとんどなく、錬が好んで使う流星剣とほぼ同じ効果を持つ万能スキル。
過去の天命に向かって星が飛んでいき、命中する。
よし！　あれが本体だ。
「そこです！　剛刀・霞かすみ十字！」
もう一本の刀を抜いて過去の天命に斬りかかる。
弱らせてからトドメにカードを当てるつもりだな。

そう思って拳を作ってラフタリアを応援しようとした矢先。

「まだまだだの」

本体だと思っていた過去の天命がふわっとまるで煙のように霧散し、ラフタリアの背後に現れてハンマーで殴りつける。

「ぐ……」

咄とっ嗟さに受け身を取ってラフタリアは着地……即座に相手に詰め寄る。

けれど、紙一重でかわされてしまう。

「幻覚への耐性はあるだの。だけど、ちょっとした応用に引っ掛かってはダメだの。罠わなには罠で試してから実際に攻撃するだの」

「私が、見破れなかったなんて……」

「当代の天命は幻術の知識が未熟だの。耐性が十分にあって、多少は心得があるようだのも、それではまだ技術不足だの」

……うん。たぶんそれは俺の所為だ。

ラフタリアに魔法を覚えさせたことはあった。

あの頃はできることは全てやるべきだと思っていたので、ラフタリアには魔法で姿を隠して相手の背後から攻撃するなどの奇襲攻撃を担ってもらっていた。

だが、絆達の世界に行くようになった辺りで刀の眷属器の力に頼りっぱなしで魔法を蔑ないがしろにし始めていた。龍脈法は刀の眷属器の所為で習得が難しいと

言われてしまっていたしな。
　とはいえ、間違っていたとも思っていない。
　眷属器ほどの威力を持っている人物を奇策として使うのは、これまでの戦いを振り返ってみても、最善ではなかったはずだ。
　その結果、魔法が疎かになったのは失敗だったかもしれないけどな。
　この辺りは次の課題としておこう。
「まだです！」
　ラフタリアの尻尾が膨れ上がって、魔法を唱える。
「ハイド・ミラージュ！」
　フッと姿を消して辺りが幻覚まみれとなった中で、ラフタリアは過去の天命の背後に回り込んで刀を振るう。
　が、それをハンマーの柄の部分で受け止められた。
「姿を消すだけじゃだめだの。実体を錯覚させて間合いを取らせれば、なお相手を騙せるだの」
「く……」
　僅かずかなぶつかり合いでしかないが、相手の強さが際立っていくぞ。
　シルディナはどんだけ化け物染みた切り札を持っていたんだ。
「武器のぶつけ合いならこっちも行くだの」

ハンマーの先が輝き始め、過去の天命がラフタリアに向かって振りかぶる。
「大激震だの！」
「は！」
ラフタリアがそれを紙一重で回避して、ハンマーが地面に叩きつけられる。
すると土煙と共に地面から衝撃波が発生し、ラフタリアはその衝撃に吹き飛ばされる。
「なんて攻撃力……」
着地して距離を取り、肩で息をしながら呟く。
「精霊具や眷属器の所持者ってだけで甘く見ちゃダメだの」
クイクイと挑発的にハンマーを肩に乗せて過去の天命は言い放つ。
あのハンマー……かなりの業物か？
なんとなくだけど眷属器みたいな宝石が見えるんだが……。
あれも生前の武器を幻覚で見せかけているとかなんだろうか？
「一撃も与えられないだなんて……」
「筋は良いだの」
余裕があるように見える。
結構強くなったはずのラフタリアが赤子のように遊ばれてんぞ。
この勝負勝てるのか？

「はぁ！」
素早いフットワークでラフタリアは過去の天命に詰め寄り、誰もいない空間に斬りつける。
「細ささめ雪ゆき！」
「おっと！　よく見抜いただの」
チェインと火花が散り、何もない空間だと思っていたところから過去の天命が姿を現した。
え？　雑談をしている間に俺達の目を欺いていたってのか？
気で見ていても騙されかねないってどんな化かし合いだよ。
ラフタリアやラフちゃんしか、ちゃんと状況に追いついていけないんじゃないか？
「お？　これは厄介なスキルだの」
受け止めた箇所から雪のような力が散り、過去の天命がそこに手を添えて損傷した部分を直したように見えた。
効果的な攻撃……だったのか？
「さって、大分体も温まってきただの。そろそろ天命として本気で相手してやるだの」
そう言うと、過去の天命はハンマーを振りかぶり……同時に尻尾が膨れ上がる。

瞬間、ラフタリアの目の前に出現した。それを回避しようとしたラフタリアだったが、過去の天命は軽い身のこなしでハンマーを横薙ぎに切り替える。
そのスイングだけで大きく風が発生した。
「五行天命割り！」
「くう……」
攻撃を紙一重……いや、微かすかに当たったが、ラフタリアはスキルを放った。
「桜神楽一ノ型・開花！」
「甘いだの！」
周りに五種類の玉が浮かび上がる。
あれは……サディナを一撃で仕留めた時の攻撃！
かすっただけでも効果が作動するのか!?
「火剋金」
ラフタリアの着ていた巫女服が大きく裂ける。
そして刀に赤い筋が発生した。
「な……状態異常!?」
「今の武器を一時的に使用不能にしただの」
どんだけ万能攻撃を持ってんだよ。
そこでラフタリアは刀を別の形状に……魔竜素材の刀に変化させる。

「さっきのスキル。疑似的に天命の技を再現できるみたいだの。だけど、実用に耐え得るものにするならもっと練りあげないとこうして弾かれるだの」
鞘に刀を収めて居合斬りの体勢にラフタリアは入った。
「あの構え、力の練り具合は！」
リーシアが反応する。
また解説キャラか？　錬の時もやっていたよな。
「ああ！」
お前もか錬。
「変幻無双流応用技、月波！」
素早く水平に居合斬りを放つと、三日月型に斬撃が飛んでいく。
「おお？　スキルではない技術攻撃だの、だが――」
ハンマーでその三日月の斬撃を受け止める過去の天命。
「だの？」
そこでラフタリアは僅かに笑みを浮かべる。
攻撃が入った確信があったんだろう。
しかし……。
「変幻無双流……彼かの地の流派を習得しているとは驚きだの」
僅かにハンマーを振るだけでラフタリアが攻撃に潜ませた何かは相殺されてし

まったようだ。
「発想は評価に値するだの。じゃあこっちもやってやるだの」
ドスンと地面をハンマーで叩きつけると、地面を伝って無数の気で構築された玉がラフタリア目掛けて飛んでいく。
なんだあれ？　もしかしてあれの一つ一つが気を持った一撃？
俺がやっとのことで体内から弾き出すことのできる防御比例攻撃か？
というかどれだけ技術を持ってんだよ。
「当たるわけには――」
と、跳躍するラフタリアの着地点に回り込んで過去の天命はハンマーを振りかぶっている。
危ない！
そう思って一歩踏み出し掛けたその時、ラフタリアの姿が煙となって消える。
目を凝らすとラフタリアは反対方向に飛んで避けていた。
「今度は上う手まく避けただの……いい加減、殺すか考えていただの」
やはり危険な思考を持っていやがる。
ラフタリアに稽古を付けているとかそんなんじゃないな。
しかし、変幻無双流も通じないとなるとどうやって攻めるんだ。
決定打が見つからない。

「まだです。まだ……」
そう言ってラフタリアは刀を前に掲げて八極陣天命剣の構えを取る。
意識を集中し始めたその時。
「隙だらけだの！」
近づいてきた過去の天命を警戒して、構えを中断する。
やはり誰かが敵を足止めしておかないと放てる技じゃないか。
これじゃあ太極陣天命斬も放てない。
あれは桜陣結界と桜力光の援護があってやっと速く放てる技だ。
どっちにしてもスキルに頼らない攻撃は時間が掛かりすぎる。
手立てが思い浮かばないぞ。
それこそ、新武器を投入して新たなスキルに頼るしか……ないのか？
と、思っていると、過去の天命が呆れながらハンマーに力を込めてラフタリアに振り下ろす。
「いい加減、期待はずれもいいところだの。濃い天命の血筋は今世で終わりのようだの」
「くう……う、はあ！」
ラフタリアが必死に受け流したり、避けたりしているが、もはや子供と大人の戦いであるかのように追い詰められ始めた。

くそ、ここで俺が介入してラフタリアを守るしかないか。
一歩踏み出そうとした時、ラフタリアが過去の天命を凝視しながら……尻尾を膨らませるのに気付いた。
一瞬だけど、髪まで輝いたように見える。
「はぁあ!!」
「おっと！」
ラフタリアの反撃に過去の天命が大きく下がる。
「何度も何度も見せていれば嫌でも見切れますよ！」
そうして刀身に手を添えて構える。
なんとなく、刀身が光っているような？　気とも魔力ともＳＰとも違う何かか？
過去の天命も負けじとハンマーを振りかぶりながらラフタリアに殴りかかる。
「五行天命割り！」
「五行天命突！」
ラフタリアの刀と過去の天命のハンマーがぶつかる。
そのまま何度も刀とハンマーの鍔つば迫ぜり合いが発生した。
魔力がぶつかり合っているのか、魔力で生成された花びらが散りながら、周りに様々な幻覚が発生する。

「火剋金」
過去の天命が言うとラフタリアは張り合うかのように答える。
「金侮火！」
すると先ほどの武器破壊攻撃が弾けて散る。
無力化させたってことか？
「おお、天命の力を本能から察しただの？」
過去の天命が口笛を吹くように答えた。
「ではこうだの。水剋火！」
「火侮――」
ラフタリアは相殺しきれず鍔迫り合いから弾かれて、刀身の魔力が大きく吹き飛ばされていた。
あれは……もしや付与効果か気かなんかを無力化されているのか？
「変化が……」
絶句するラフタリア。
まさか武器変化妨害か！
俺も何度かされた覚えがあるが、こんなところにも技術として存在したのか！
「いえ……木生火！」
カッとラフタリアの刀に火が宿り、刀身が輝く。

「ふむ、拙つたない技術だが、上出来だの。だけど、そんな隙があったらどうなるかわかっているだの！」
過去の天命の姿がユラァッと消え、少し離れたところに大きく力を溜めている姿が現れる！
その力の胎動は!?
「見るだの！　これが天命の技だの！」
幾重にも分身しながらラフタリアに向かって一斉に飛びかかる。
その中でラフタリアは目を凝らし、実体を引き当てんとしていた。
「そこです！」
二本の刀を鞘に収め、居合斬りの構えを取りながら手を前に掲げて声を発する。
「私はまだ、あなたのように力を速く、重く練り上げることはできません。ですからできる工夫を最大限に……行きます！」
カッとラフタリアが大きく地面を踏み締めると地面に大きく陰陽のマークが展開される。
「桜神楽二ノ型・一分咲き！」
大きく振り下ろす構えで、ラフタリア目掛けて過去の天命がハンマーを叩きつけた。
「陰陽八極陣天命割り！」

力と力がぶつかり合うように、膨大な重圧が辺りに展開されている。
余りにも激しいぶつかりあいにビリビリと空気までが振動していた。
「五行天命――」
続けざまにラフタリアと過去の天命は打ちあう。
過去の天命の周りには五つの玉が浮かび、攻撃時に宿って、援護しているように見える。
張りあうようにラフタリアの周囲に五つの玉が浮かんでいる。
そして……なんだ？
城下町の近くで咲いていた桜光樹が一際光り輝いて、まだ明るいというのに、スポットライトのように空に光を放つ。
「春桜樹！」
「桜神楽三ノ型・三分咲き！」
双方が打ちあうことで光と闇が辺りに漂い、花弁のように散っていく。
俺はラフタリアが所有している魔法資質、光と闇の資質の意味をここでやっと理解したような気がした。
光を屈折させたり、闇に紛れたりするため……だけじゃない。
陰陽のように光と闇を抱え込んだ資質で、相反しそうな属性を使いこなしているんだ。

殴り合い、化かしあいから双方の武器のぶつかりあう音が無限に思えるほどに響き続ける。

「木剋土！　土剋水！　水剋火！　火剋金！　金剋木！」

「桜神楽四ノ型・五分咲き！　六分……咲き……く……」

僅かにラフタリアが押されているか？

いや……過去の天命も焦りを見せている。

「よくここまでついてきただの。その連撃系の強力なスキルは放つ度に威力が増加するのだろうが、短い間に湯水のごとく力を消耗するようだの」

「それくらい理解しています！　ですが……引きません！　はぁああああああああ！」

「こっちも必殺で行くだの！　天命五行相そう剋こく！」

幾重にも五つの玉が集束し、ハンマーの中に消え……膨大な力が込められた一撃がラフタリア目掛けて振り下ろされる。

地面に走っていた魔法陣が五芒星を宿し、ラフタリアに重圧を掛けているかのようだった。

応じるように刀で受け止めていたラフタリアの周囲に掛かる重圧が霧散し、地面に他の紋様が浮かび上がる。

だが、ラフタリアも負けじと力を解放させる。

ラフタリアの周囲を漂う玉が高速で回り始めた。
「やっとできた！　抑え込む陰の力に陽で対抗し、相殺してみせます！」
「攻撃をしながらそれを練っていたのは見ていただの、ここからは、一瞬……さあ、死にたくないなら来るだの！」
「はぁあああああああああ！　天命五行……相生！」
バキンと音を立てて、二人の周囲に展開されていた魔法陣が砕け散る。
過去の天命が攻撃を相殺されたことを悟って距離を取ろうとしたその時、ラフタリアが大きく近づきながら刀を振りあげる。
「まだです！　朧おぼろ月づき！」
僅かな隙を衝ついてスパンと過去の天命のハンマーの柄を切り裂き、肩口にラフタリアの攻撃が入った。
「あと少し……一瞬だけでもいい！　はぁあああ！」
鞘に収めたもう一本の刀を抜く。
アクセサリーの特殊効果である疑似ハイクイックはこの世界じゃ使用できない。今、ラフタリアが使っているのは今までのままのスピードを少し上げる程度の代物だ。
それでも、その僅かな速度が明暗を分けることもある。
「まだだの！」

過去の天命が諦めずに柄が短くなったハンマーを片手にラフタリアに殴りかかる。
が……ラフタリアに当たる直前、姿がかき消えた。
「ぬ？　この一瞬で、よく化かせただの」
感心するかのように過去の天命は声を漏らす。
「幻影剣！」
それは……最初に覚えた技であり、魔力もＳＰも気も全てを出しつくしたラフタリアが最後に残された力で放った一撃だった。
フッとラフタリアが過去の天命の背後に現れ、力強く刀で斬りつけた。
「これで……終わりです！」
胸元からカードを取りだしたラフタリアに対し、天命は反撃できそうだったのだが、何もせずに受ける。
「く……まあ及第点だの」
カードが胸に当たり、光と共に過去の天命の胸の中へと消えていく。
「色々と足りないところはあるが、気迫は認めてやるだの。特別に処分しないで、後を託してやってもいいかもしれん……だの」
ボリボリと頭を掻いたあと、過去の天命はラフタリアに拍手を送る。
ラフタリアは刀を構えてそれを睨みつける。

「待ってください。あなたは……本気ではありませんでしたね？」
「いいや？　この体でできる最大限の力を込めて相手をしただの。私を超えられない程度じゃ、調停者の資格もない。ましてや精霊具の所持者と結託しているなら尚更だの」
「調停者……勇者を止める立場ということですか？」
「乗り越えられない程度の力しか見せられないなら、来るべき時に現れる愚かな者達に報いを受けさせられないだの。慢心なく、クテンロウの天命の血筋を続けるよう努めることを祈っているだの」
過去の天命は胸に手を当てて呻くようにラフタリアに答える。
俺達が間に言葉をはさめるような雰囲気ではなかった。
「随分と国を荒らされもしておったようだが、最後は面白いものを見れただの。絶対に奴等に負けないようにがんばるだの……それじゃあ、過去の亡霊は引っ込むだの」
そう言うと、過去の天命が持っていたハンマーにヒビが入り、音を立てて跡形もなく砕け散り、光っていた尻尾が霧散……変へん化げが解けるようにシルディナが姿を現し、倒れ込んだ。
「あっと」
ラフタリアが倒れるシルディナを受け止めた。

「勝った……か」
俺達は駆け寄り、シルディナの様子を確認する。
呼吸も少し荒く、生命力が低下している。早めに処置しないと危ない。
話し合いに応じてくれるかわからないが、サディナの妹だし、色々と同情するところはある。
手当ては十分にすべきだ。
「治療を施す。回復系の魔法や薬草学に詳しい奴は手伝ってくれ。みんなは城の占拠を優先！　ラフタリアも疲労しているだろうが一緒にいてくれ。サディナも治療を手伝えよ」
「は、はい！」
「わかったわ」
そうして俺達は天命同士の戦いを見届け、後の処理に追われた。

シルディナの応急手当てをして搬送させた後、俺達は城の天守閣へと向かった。
城内にいた生き残りの話では現在の天命がまだ天守閣に一人でいるはずだそうだ。
「確か幼いんだったか？　もはや追い込まれたのを覚悟して配下や重鎮共を逃して一人残っているとかか？」
報告に来たラルヴァに尋ねる。
これまでさんざん馬鹿らしい命令を積み重ねてはいたが、最後は王者としての覚悟を見せていたとかなのかもしれない。
「それが……マキナにすぐに騒ぎは収まると言われて、天守閣の間に置き去りにされているそうで……」
「当のマキナはさっさと城の隠し通路から逃げようとして、後は俺達が見た通りってわけか」
俺の言葉にラルヴァは頷うなずいた。
何だろう。国内を滅茶苦茶にしておきながら、この責任感のなさ。
亡霊になってシルディナに乗り移ろうとしていた時もだが、ヴィッチを思い出した。

女王がいなかったらメルロマルクも似たような状態になっていたんじゃないか？

そう思えるくらい苛いら立だつ行動をしていやがる。

「ラフー」

ん？　ラフちゃんが何かボールのような物を大事そうに持っている。なんだ？

気にはなったのだが、とりあえず進んでいくと天守閣の……謁えっ見けんの間の奥に天命の部屋があった。

ふすまを開ける。

「だ、だれ!?」

そこには神主みたいな衣装を着た八歳くらいの男の子がいて、フィロリアルの雛ひなを模かたどったぬいぐるみを抱きしめ脅おびえた目をこちらに向けていた。

出会った頃のラフタリアよりも幼いぞ。

コイツがクテンロウの王をしていたバカ殿か？

室内はフィロリアルグッズで埋め尽くされていた。

絵にはじまり、ぬいぐるみ、木像に銅像まである。

金や宝石で作られたものはないのか？

あ、あった。だけどよく確認すると金メッキだ。宝石も安物で作られてる。

書物もかなりあるようだが、中はどうなんだろうな？　ぱっと見える表紙もフ

ィロリアルだ。
絵のフィロリアルの柄は白に桜色。完全にフィーロと同じ色合いだな。
なんでそんなにこの色合いが人気なのだろうか。
「マ、マキナはどこへ行ったの？　誰か！　シルディナ！　みんな！」
どうやら事態を完全に飲み込めず、ここに放置されているだけっぽいな。
どうしたものか。
ぶっちゃけコイツ、善悪の区別もつかずに利用されていたに過ぎないんだろう。
かといって安易に天命の加護を振りまきまくっていたことにも問題はある。
「あ！　その衣装……それは偉いボク以外は着ちゃいけないんだぞ！」
ラフタリアを指差してガキは言い放った。
とりあえず、コイツには状況を突きつけねばならんか。
理由もなしに捕らえられて処刑……は避けたいけど、権力の座から蹴け落とされることになるわけだし。
「悪いが、お前の味方をしてくれるような奴等は皆、死んだか捕らえられた。お前はもう偉くもなんともないんだ。それくらいわかるだろ？」
俺の問いにガキは俯うつむいて静かに頷く。
「やっぱりそうなんだ……」
おや？　思ったよりも物わかりがいいな。

「マキナがすぐに戻ってくるって言って、全然戻ってこないのはわかってたし、時々隠れてみんなでボクのことを疎ましく思っているようなことを言っていたのは知ってた」

だけど、とガキは続ける。

いや、理解力が高いから子供と呼んでやろう。

「それでもボクはみんなを信じていたかった……騒ぎを収めて帰ってきてくれるって」

「生憎あいにくだったな」

「……」

「あの、ナオフミ様。もう少し掛ける言葉があるのでは？」

「まあガキ相手に大人げない自覚はある。とはいえ、コイツはラフタリアの命を狙った連中の頭かしらなんだぞ？　大目に見るにしても問題のある相手だ」

コイツの支配力が全くなかったからこそ、ラフタリアの命が狙われた。

ちゃんと統治していたなら、刺客共も巫み女こ服を着た程度で襲ってくることも……なかったかもしれない。

震える体から勇気を絞り出すように子供は俺達に向かって力強く言う。

「して、余に何の用だ。余は負けたのだろう？　どこにでも連れていき、処刑するがいい。だが、余を慕った者達に罪はない。寛大に許してくれまいか？」

むしろお前を慕った者達が主犯で、お前自身にはそこまで罪はないだろうに。
俺からしたらお前の部下の方を処刑したい。
それにしてもボクから余か……公務とかで使い分けるように教えられてきたってことだろうな。
うーん、態度から察するにちゃんと教えればいい線行くかもしれない。
腐ってもラフタリアの親戚……従兄弟いとこと思ってしまいそうだ。
「そうだな……甘い処罰をする気はないが、まずはお前の天命の資格を剥はく奪だつする。その後をどうするかは後々決める」
俺の言葉に静かに目を瞑つむって震えを抑える子供。
話によると親は物心つく前に暗殺されたらしいし、それなりにがんばっていたんだろう。
東の都を占拠したことによりクテンロウの情勢は大きく変わり、もはや俺達に逆らう勢力は限りなく少なくなる。
旧都の呼び名が王都に戻り、平穏な政権にとって代わるくらいは予測ができている段階だ。
一応、膿うみの方は大分出せたと思う。
新たな権力の誕生を国民に示すのなら捕らえた天命の公開処刑をするのが、この世界の風潮だが……。

どうしたものかな。
どちらにしても、ふざけたことを仕出かした連中には報いを受けさせるけどさ。
まあ、俺の目的は既に達成されたに等しい。
「奴隷紋でも刻んで、拷問体験でもさせるか」
こう言ったら、どういう反応をするかを見て今後を考えるか。
「そ、それが罰だというのなら受けて立つ！」
お？　割と素直に受けるのな。
これも天命としての責任、というコイツなりの考えなんだろう。
拷問にしても、内容は知らなくても痛くて怖いくらいは知っているはずだ。
うん、コイツのことはそこまで憎めないな。
これまでの情報を纏まとめると利用されていただけなのは間違いない。
とは思うが、本音はどうなのか気になる。
「ふむ……ちょっと待っていろ」
俺はラフタリア達にその場で子供を見張るように命じてから、人型に変身しているフィーロの背中を押す形で部屋から連れ出した。
「ごしゅじんさまどうしたの？」
「フィーロ、今からフィロリアルクイーン形態になって黙って俺についてきて、あの子供を見つめていろ。俺が合図したらくちばしで子供の襟をつまんで持ちあげ

るんだ。もしも言いつけを守ったら、後でお前に特製の飯を食わせてやる」
「ホントー!?」
フィーロは嬉しそうな顔をした後、フィロリアルクイーン形態になってスキップ交じりについてくる。
「あれ？　ナオフミ様、一体……なんでフィーロがその姿なんですか？」
「あらー？」
「尚なお文ふみは何をしようとしているんだ？」
「さあ……僕にはわかりません」
「ふえ？」
事の成り行きを仲間達が見ている。
この後、コイツ等がどんな顔をするのか容易に想像できるな。
「あ、フィロリアルだ！」
子供が目を輝かせながら駆け寄ってくる。
そう、お前はフィロリアル好きが高じて生類憐あわれみの令なんて出してしまったバカ天命だったな。
コイツの底を見るにはこれが一番だ。
子供はフィーロに向かって駆けより、フィーロの羽毛に触れる。
フィーロはご機嫌な様子で、視線を子供に向けた。

黙っていろと言ったからな。喋しゃべったらフィーロの性格からして仲良くなりかねない。

「……」

俺の言いつけを守り、黙ったままでフィーロは視線だけ子供に向ける。

やがて子供の笑顔が戦せん慄りつに変わっていく。

やっぱそうか。このグッズの集め方からして本当のフィロリアルをよく知らないだろうことはなんとなくわかっていた。

あえて言うならオタクっぽい間取りなのだ。

オタクだった俺が感じ取れる怪しさってやつだな。

実際の女ではなくヒロインに恋している連中と同類。

つまり、本物のフィロリアルがどんな生き物なのかをよく知らないんだろう。

「え……あ、あああ……」

くくく……フィーロよ。

お前は前に村の連中に怖がられていたことをすっかり忘れているな。

「あわわわ……」

機嫌が良くて、俺の飯がもらえることで食欲を刺激されたフィーロが黙ったままで見ているのだ。

涎よだれを垂らしているわけだからな。獲物を前にした猛もう禽きん類るいの

恐ろしい威圧感に似た何かを子供は察した。
脅えの表情を浮かべ、腰を抜かす。
本当、喋っていたら結果は随分と変わっていただろう。
というか……メルティと反応が似た感じだったぞ。
ただし、メルティは飢えたフィロリアルであろうとも友達になろうと努めるんだがな。
この子供は俺の読み通りフィロリアルに対して好意はあるようだけど、そこまで慣れ親しんでいるようではない。
俺がフィーロに手で合図を送る。
するとフィーロはドスッと一歩踏み出して、ゆっくりと子供に近寄る。
涎をジュルッと啜すっている動きから、完全に獲物を見つけたみたいに見えるだろう。
「わ、わ！　く、くるな！　助けて、食べられちゃうよー！」
ピタッとそこでフィーロが止まり、俺に不快そうな目を向ける。
自分が嵌はめられたことを悟ったようだ。
だが、動きは止めない。
そんなにまでして俺の飯を食いたいのか？
後でフィーロに聞いたところ、ラフタリアや国の人達を困らせた罰なんだろう

なーってことで受け入れたらしい。
「あらー」
冷たい視線が俺に集まるのを感じる。
「あー……その、何をしているんですか？」
ラフタリアが代表で俺に尋ねてきた。
「まずは何をするにしても罰を与えねばな」
ここでちゃんと聞こえるように、それでありながら周りの連中に悟らせるように答える。
「そんなにもフィロリアルが好きなら、フィロリアルの餌えさの刑にしてやろうと思ったんだ。生きたまま食われるがいい」
「や、やだ！　た、助けてぇえええええ！」
お？　やっと底が見えてきたな。
どんなに凛りんとした態度をしてみせても所詮は子供だ。
たとえ利用されていたとしても、生類憐みの令なんて出した挙句、封じられた化け物にまで祝福を施していた罰は与えなければいけない。
これくらいの恐怖は体験してもらわねばな。
国の人達がどれだけ魔物の被害で困っていたか、身をもって味わってもらおう。
「わ、わ、わあああああああ！」

自身の欲する形、色合いをしたフィロリアルに襲われるという恐怖の光景が子供の脳裏に刻まれるだろう。

って思っていたら、いつの間にか映像水晶で革命派の重鎮が映像を撮っている。

コイツ等何をやっているんだ？　それって確かシルトヴェルトからの輸入品だったよな？

フィーロが子供の襟首をくちばしでつまんで持ちあげたところで、撮影が終わった。

後にこの映像が天命の処刑映像ってことで国に広められて、国民の溜りゅう飲いんが下がることになる。

「ぎゃあああああああああああああああ！」

まあ、別にフィーロが食ったわけじゃないけどさ。

子供の襟首をつまんでフィーロが俺の方へやってくる。

しばらく叫び続けた後、おもらしまでしてしまった子供が息も絶え絶えになって助けを求める。

が、ここには誰も助けが来ないと悟って更に抵抗したが、全く効果はなく、ぐったりとなった頃になって俺は解放するように命じた。

「うう……」

解放されたことを悟った子供は、這はってでも恐怖から逃げようとしている。

唖然ぜんとその様子を見ていたラフタリア達。

「その、もういいのでは？」

「まだ色々と叩たたきこみたいところではあるが、第一段階としてはこんなもんか」

これでいかに魔物が恐ろしい存在か理解しただろう。

「ごしゅじんさまひどーい」

「うるさい。仮にこれがメルティだったらどうなっている？」

「んー？　えっとねー。メルちゃんだったらーご飯くれたりーフィーロの撫なでてほしいところを撫でて、ほわーんとなるー」

そうだな。間違いなくメルティだったらこんな処刑方法があったとしても、上う手まく乗り越えてしまう気がする。

これがメルティとこの子供の大きな違いだ。

「な、何かの言語を喋ってる！」

ちなみにフィーロはメルロマルクの言葉で俺と話をしていたらしい。

既にシルトヴェルトやクテンロウの言葉もわかるんだけどな。

以前、異世界で見世物にされた記憶から言葉は早く覚えるべきだと学んだそうだ。

だが、子供にとっては喋るフィロリアルであったとしても、もう恐ろしい対象

なんだろう。
　震えて隅で縮こまっている。
「子供。お前にとても重要なことを教えてやる」
「な、何？」
「フィロリアルってのはな、お前からしたら見た目は可愛かったのかもしれないが、雑食で凶暴な生き物だ。身をもって体験しただろ？」
「ブー！」
「なんでフィロリアルを否定するような話をこんなところでしているんですか！」
　ラフタリアのツッコミを無視して俺は子供を諭す。
「まあ、暴れないように調教されていたか、押さえつけられた状況で触っていたんだろうな」
　俺の指摘に子供は何度も頷く。心当たりがあったんだろう。
「野生の魔物も同じだ。ましてやお前は凶悪すぎて国に害を成す化け物に天命の祝福を施して回ったんだ。その意味……わかるな？」
　俺の言葉に子供は俯き、ラフタリアはツッコミを入れるのをやめる。
　どう話を転がしているのかを理解したらしい。
「ブー！」
　フィーロは頬ほおを膨らませて抗議しているがな。

今は逆効果だ。存分に俺の言葉に説得力を持たせてくれる。

「さっきの恐怖、いや本当なら噛みつかれたりツメで切り裂かれたり、毒を吐かれたり色々と痛い思いをして死んでしまう……そんな仕打ちを国民は受けたんだ。お前が知らずにしていたことは、そういうことだ」

「……そう、だったんだ。なら……うん。確かに余は、天命の資格がない……偽者と皆は言っていたが、革命派の天命を慕う者の言う通り、余は天命の座を譲る」

おお？　歳相応のところはあるが、やっぱり利発なところもちゃんとあるようだ。

金や贅ぜい沢たくに物を言わせたバカじゃないみたいだし、これくらいで許してやるとするか。

「今後どうなるかはそこまで責任を持てないが、国を出て世の中を見て回るのもいいかもしれないな」

「機会を、与えられるのなら……」

ま、クテンロウの連中があまりにもバカだったから驚異的なスピードで国を占拠できたわけだし、助かりもした。処刑ではなく国外追放くらいにしておくべきだろう。

なんだかんだで利用されていたに過ぎなかったのなら、世界を色々と見せて勉強させるべきだ。

ラフタリアとは血の繋つながった親戚なんだしな。
少なくとも表面上は処刑したって扱いにすればいい。
それとも村に連れていってラフタリアの従兄弟とか元王子とでも内心で呼ぶか。
「ともかく、どんな処分になるかは後々決めるとして」
俺の言葉に子供は脅えながらも応じる姿勢を見せている。
よし、ここで重要なことを教えるとしようじゃないか。
「お前には他に重要なことを教えてやろう。フィロリアルなんかよりも可愛くて、賢くて、役に立つ魔物だ」
トンと俺はラフちゃんを両手で抱えて子供に向かって見せる。
「タリー?」
お？　新声？　いつの間にか新たな進化をしていたのか！
ラフちゃんは子供に向かって可愛らしく手を上げる。
「なんでですか！」
ここでラフタリアがツッコミを再開したが、俺は続ける。
「こ、こんな魔物、初めて見た。本でも見たことない！」
そう言いながら子供がラフちゃんに手を伸ばす。
ラフちゃんはラフーと鳴きながら、されるがまま子供に撫でられている。
頭から始まり、頬、お腹、手、足、尻尾と撫でられて、チョコンと子供を撫で

返す。
「わあああ……」
欲しいと目を輝かせる子供。
「この子はな。お前の親戚の毛髪から生まれた魔物なんだ。フィロリアルよりも可愛いだろ？」
「ブー！」
「う……ナオフミ様、やめてください」
フィーロはブーイングをやめず、ラフタリアは嫌そうにしている。
周りの連中は呆あきれ気味だ。
「で、あそこにいるのはお前の親戚の、革命派の天命をしているラフタリアって子だ。わかるな？」
「うん」
「お前の周りの連中は天命の血筋はお前だけで他の奴は偽者、殺せとか言っていたかもしれないが、親戚同士仲良くした方がいいだろ？」
「うん。そもそもどうして親戚なのに、みんなは敵だと言っていたの？」
「そんなこと決まっている。お前がみんなと言う連中にとって、ラフタリアが生きていると都合が悪かったんだ。だから殺すように命じた」
「……そうなんだ」

子供ながらにある程度は政治的なことも理解しているらしい。
腐りきった権力争いって感じだもんな。
「とまあ仲良くするのなら、もう少しラフちゃんを触らせてやる」
子供はラフちゃんとラフタリアを交互に見てから頷いた。
「だからフィロリアルなんかよりもラフちゃんグッズを作って――」
ラフタリアが俺の肩をガシッと強く掴つかんできた。
「ナオフミ様、何がしたいのかわかりませんが程々にしてください」
く……しょうがない。
ラフちゃん派閥への勧誘は後ですることにしよう。
「ともかく、お前の今後は悪いようにはしないし、ある程度は融通してやるから、世の中を学べ」
「わかった。余……ボクはもしも機会を与えられたのなら、人々に迷惑をかけた分、償いたい」
まあ、落としどころとしてはこんなもんだろ。
そんなこんなで子供を保護し、俺達は城を後にした。
「これでいいんだろ？」
俺はサディナに向かって、ぶっきらぼうにそう言った。
「そうねーお姉さん、ここまでやり切っちゃったナオフミちゃんにメロメロでラ

フタリアちゃんを誇らしく思うわー」

「はぁ……全ては巫女服の所せ為いなんですけどね。巫女服を着なければ、こんな争いに巻き込まれることはありませんでした」

それを言うなよ。

「タリーラフー」

「なんで私の名前みたいな鳴き声にドンドン変化していっているんですか！」

ラフちゃんにラフタリアがツッコミを入れる。

先ほどまで戦っていたのに元気だな。

そんなこんなで秘密裏に子供を連れ出し、俺達のクテンロウ攻略は一応終わりを迎えた。

正直、ものすごい速度で占領できてこっちが驚いているくらいだ。

ガタガタもいいところだろ。どんだけ杜ず撰さんなんだよ。

ちなみに後々追ってきたアトラ達は出遅れたことをかなり悔いていたが、戦ったのはラフタリアだっ たので他の連中は見ていたに過ぎない。

# エピローグ　夕暮れ

東の都を占拠してから二日ほど経過した頃……。
都の医療所に入所させられていたシルディナの見舞いに行ったところ、ちょうど意識が回復したところだった。
この時は甲か斐い甲が斐いしく見舞いに行っていたサディナと顔や尻尾がわからないように変装した子供を同伴していた。
先日のフィーロを使った映像水晶が公開されていて、国民には天命は惨むごたらしく処刑したと公表している。
そうでもしないと国民の怒りは収まらない程度には恨みが溜たまっていたようだ。
ラフタリアは勝利後の公務に追われ、アトラ達は再度残党処理に行かせていたところだ。
フィーロは都に住む子供達と友達になったとかで遊びに行った。
錬れんや樹いつきはリーシアと一緒に稽古をしている。
「う……ん……」

ゆっくりと目を開いたシルディナが辺りを見渡すように顔を動かす。
「気が付いたか？」
シルディナは俺とサディナがいることに気付いて起き上がろうとしたが、力が回復し切っておらず、起き上がれずにベッドに再度横になった。
「シルディナ！」
子供がシルディナに声を掛けると、シルディナは俺と子供を交互に見て首を傾かしげていた。
「まったく……意識が回復してすぐに戦おうとでも思ったのか？」
俺は半ば呆あきれるようにシルディナに問いかける。
シルディナの方は……話したくないのか顔を背けていた。
「お前は本当、一度しか会ったことのない奴に滅茶苦茶重たいものを預けるんだな」
たった一度、酒を酌くみ交わした関係でしかない相手に、自分の魂の欠片かけらを渡すとか、一体どんな思考をしているんだろうか？
結局俺はシルディナの助けになんてなっていなかったしな。
助けたのはラフタリアだ。
「別に……ただ、生まれて初めて素敵だと思った男性に会ったから、いつまでも捨てきれない魂の欠片を封じた札を渡しただけ」

「素敵って……お前の酒好きな反応から察するに、ルコルの実を食ってたからか？」

シルディナは頷うなずく。

「お酒に強い人が好き」

「ったく……姉妹揃そろって似たような反応をしやがって」

この酔いどれ姉妹が！

「あちゃー……」

「それもやめろ。嫌いな姉と似てるぞ」

「……」

まったく、嫌っているのは節々の会話でわかっているが、行動まで似てるのは血なのか？

「素敵だと思ったの。悪いの？　初めての恋って感じだったの」

「それがこともあろうに革命派の天命を後押しするシルトヴェルトの神様だもんな、できすぎだろ」

出会った俺が言うのもな。

「挙句……サディナの男なんて最低」

「待て、何度も言うが誰がサディナの男だ」

「あらー」

ここぞとばかりにサディナが俺の腕に手を絡ませようとしてくる。
それを払いのけて答える。
「悪いがそんな関係じゃない」
「お姉さんと楽しいことをしましょうよー」
「余計に話がこじれるからやめろ！」
サディナ、お前へのコンプレックスがものすごくある育ち方をしてるんだぞ。
下手に刺激するなっての。
だが、サディナは優しげな笑みを浮かべてシルディナを見ていた。
まるでそんな関係じゃないことを証明するかのように。
「お姉さんの妹なら、そんなところで諦めちゃダメよー？　ナオフミちゃんが気に入ったんなら、もっと情熱的に攻めなきゃ」
「ふざけるな！」
「それにお姉さん。ナオフミちゃんの愛人でいいしー……ラフタリアちゃんやアトラちゃんには勝てないかもしれないけど、フィーロちゃんの前くらいにはポジション取れそうね」
「何を言っているんだ？」
アトラはともかく、ラフタリアは娘のようなものだぞ。
娘に欲情するなんて変態のすることだ。まあ、アトラにも欲情しないがな。

ともかく、俺はこの世界で恋愛したり所帯を持ったりする気はない！
フィーロ？　フィーロにはメルティがいるだろうが。最近では槍やりを持ったストーカーに狙われているが。
「ともかく、ナオフミちゃんへの想いが少しでもあるなら、お姉さんは負けないわよー。それとも、逃げるの？」
サディナの言葉に、不快そうに眉を寄せてシルディナが睨にらんでくる。
マイナス方面の感情の幅が広いみたいなんだよな。
ある意味、虐待された村の連中に似た精神状態だ。
実年齢を考えるに多少助けになってやりたい気持ちはある。
「そんな諦めがいいならつまらないわー」
「あんまり刺激するなっての」
溜ため息いきが出るな。
割と思いやりのあるサディナも、妹相手だと距離感が掴つかめないんじゃないか？
「あの時、お前は凄く楽しそうにしていたな。ただカードゲームをしていただけだってのに」
「……」
シルディナは俺の話を聞きたくないとばかりに顔を背けている。

やはり説得は無理か？
歪ゆがんだ家柄から解放するのは難しいのかもしれない。
とはいえ、同情の気持ちはある。
「お前は随分と方向音痴みたいだが、また遊んでほしかったら相手してやる。それじゃあ、ダメか？」
どうもカードゲーム類が好きなようだから取っ掛かりにはなると思う。
部屋の外で護衛として待機しているセインがトランプを広げて見せている。
お前も好きみたいだな。
可哀想な境遇がある意味ラフタリアと重なってみえて、力になってやりたいと思うのは俺のエゴだろうか。
救いにはならないかもしれない。それでも多少の手助けくらいしてやりたいんだよ。
「あと、これは先に言っておいた方がいいかと思って伝えておく。シルディナ、お前の役職である殺さつ戮りくの巫み女こは解任する。やりたければ水竜の巫女だけにしろ。ちなみにサディナは水竜の巫女に戻る気はないぞ」
「ええ、水竜様とは縁があっただけで、戻る気は全くないわ」
「……!?」
ガバッとシルディナが俺の方を見る。

「殺戮の巫女も大事な役職なんだろうが、お前のように心の底から嫌がっている奴にさせる必要はない。処刑人なら雇えばいいだろ」

この辺りは大々的に変えるべき案件だ。

天命の威光を示すための汚れ役なんてくっだらない。

仕事として割り切ることのできる奴がすべきだ。

「それとも、お前はやり続けたいのか？　それなら止めんが……お前はそれでいいのか？」

「負けた派閥の私を処刑しないというの？　サディナに処刑させるつもりだったんじゃないの？」

ああ、そのことを考えていたわけね。

「しないわよーそんなこと。それよりもシルディナちゃん、あの人達……両親に関して、もう少し教えてくれないかしら？　お姉さんもさすがに我慢の限界だから」

サディナが苛いら立だちを見せながら、パチッと静電気を纏まとってシルディナに尋ねる。

「シルディナちゃんも一緒に来るー？　お姉さん、ちょーっと生まれ故郷に恐怖を振りまきに行く予定なのよ。あの人達には第二のシルディナちゃんを作れないくらいに脅おびえてもらいたくてね」

負けた派閥故に鞍くら替えに必死な集落なのは報告で知っている。

ぶっちゃけ、水竜にすらも見限られているってどんだけアホな両親なのか気になるけど、俺がついていくとサディナは村を壊滅させた挙句、両親の前で俺を紹介とかしそうだから行く気はない。

「この国にいたくないならついてこい。この子供同様、悪いようにはしない」

「お姉さんと遊びましょうよー。まずはがんばっちゃったあの人達に報いを受けさせるけどね」

ここまでしつこく言ってくるってことはサディナの奴、相当怒ってるな。

シルディナの容体から察するに歪んだことをしていたのは明白だし。

「ですが……私は……」

シルディナは子供に目を向けて申し訳なさそうに俯うつむいている。

「シルディナ……」

子供がシルディナに声を掛ける。

「で、お前とシルディナってどんな関係なんだ？」

「ボ、ボクの護衛とかもしてくれた、姉みたいな人。ボクを利用しようとしてくる人達とは違った……友達……」

絞り出すように子供は俺に向かって告げる。

「よかったな。友達だとよ」

あんまり尊敬しているようには見えなかったから、子供が勝手に友達だと思い

込んでいた可能性は高い。
シルディナは子供を見て目を見開いて驚いていた。
「天命様……私は神降ろしに失敗して、貴方あなたのかけがえのない……マキナ様や他の者達を手に掛けてしまいました……そのような言葉を掛けてもらえる存在ではありません」
「ふむ……そのことなんだが、どこまで覚えている？」
ぶっちゃけると、失敗して過去の天命を降ろしていたからこそ、俺達は楽にクテンロウを占拠することができたんだよな。
「動けなかったけど、全て覚えてる……抵抗したけれど、マキナ様や他の者達を手に……」
シルディナは狂いそうになるのを抑え込むように手で顔を覆う。
「まさかマキナ様があんなことを……言うだなんて……」
「俺達が行く前に何か言っていたのか？」
「……」
俺の言葉にシルディナは頷く。
「マキナ様の……前で操られた私がどうにか支配から逃れようとしたところ……謎の紋様で拘束し、殺されると思った際に……」
俺達が行くよりも少し前、マキナを追い詰めた過去の天命に肉体を乗っ取られ

ていたシルディナは体に施された紋様で押さえつけられて倒れてしまったそうだ。
元々過去の天命がマキナを殺さないように抵抗していたため、一時的に動けなかったらしい。
『まったく……飼い犬に手を噛かまれるとはこのことね。何事もなければ来るべき時まで自由にさせてあげようと思っていたのに……甘い言葉を掛けたらアッサリと信じちゃって。馬鹿で愚かな娘。挙句私に手を下そうなんて、愚かにも程があるわ』
勝ち誇った笑みでマキナという毒婦は言い放った。
他にも倒れているシルディナを重鎮達が嘲あざけっていたそうだ。
『貴方が私を信じて色々とがんばっていたのを見て、笑いを堪こらえるのが大変だったのよ。愚直に信じて死地へ行くんだもの。ホント、いいおもちゃだったわ』
絶句するシルディナを嘲あざ笑わらい、マキナは言い放った。
『そうそう！　その顔が見たかったのよ！　あははは！　おかしくて吐きそうになるわ！』
一ひと頻しきり笑った後、マキナは冷淡に、信じられないと手を伸ばすシルディナに告げた。
『とはいえ、私に逆らって襲いかかってくるような愚かな魚はいらないのよ。死になさい。ったく、汚らわしくて反へ吐どが出るわ！』

シャチ獣人のシルディナを魚とか、馬鹿にしてんな。
で、トドメを刺そうとした矢先、過去の天命に肉体を奪われて事に及んだとの話だ。
「話を聞くだけでもとんでもないクソ女だな」
挙句自分が殺されたからといって、体を乗っ取って成り代わろうとしていたとかとんでもない奴だ。
俺達が駆けつけるのが遅かったら、シルディナに成り代わっていて逃げられかねなかったぞ。
ヴィッチがそこにいるんじゃないかって思えるほどだ。
他人なんだよな？
とても他人とは思えない。時期的にありえないけどさ。
どこにでもクズな女はいるってことなんだろう。
俯く子供に目を向けて、肩に手を置いて答える。
「お前を置き去りにして逃げようとしていたみたいだし、天命の暗殺にも色々とかんでいるのが調べで判明している。気にする必要はないぞ……とはいってもな」
俺はサディナにも目を向ける。
「まあ、あの人はねー。お姉さんのことも罵ば倒とうしてたし……むしろどんな甘い言葉を言われたのか不思議だわ」

「似たような女に覚えがある。利用しやすいと思っていたんだろ」
サディナって観察眼があるし、下手に踏み込まれると見抜かれるとか思ったんだろ。
「よくわかるわね」
「メルティの姉がそんな性格をした奴だ」
「ああ、なるほど」
ってな感じで頷いてからシルディナと子供に向けて言う。
「大事だった奴の本性を知って、心に傷を負った気持ちは……なんとなくでしか察することはできない。けれど、騙だまされた気持ちは十分に理解できるつもりだ」
俺は冤えん罪ざいを被こうむった経験がある。
だからこそ、騙されたって気持ちには共感してしまう。
「そんな奴に騙されて下を見続けるくらいなら、奴の末路を聞いて胸を張ればいい。ざまあみろ、とな」
俺も早くヴィッチを見つけて、そういう末路を歩ませたいもんだ。
「で、お前が降ろしていた過去の天命が仕留めたってことでいいんだな？」
俺の言葉にシルディナは頷く。
「昔、初めて降ろした時から私の体を乗っ取って重鎮やマキナ様を殺そうとしていて……それをどうにか抑え込んでいた私の切り札だったの。今考えると、倒すべ

き敵だってずっと私に教えようとしていた」
「暴走するおそれはあるが危険な奥の手のつもりだったんだな」
その正体は国の膿うみや毒婦を消そうとする神聖な存在だったわけで。
ラフタリアとの戦いも改めて思い出してみると、過激な稽古だったように見えなくもない。
頼りない子孫にいろんな技を伝授したって感じだった。
「過去の天命の教えは間違っていなかったってことだな。このガキもそいつを殺したことに関しちゃ、もう気にしちゃいないだろ？」
「……うん。マキナは……信じたかったけど、今は思い出すだけで変なところが多かった」
本当、物事を知らないだけで、ちゃんと教えると理解が早いな、コイツは。
そのマキナって女も騙しているつもりだったんだろうけど、コイツはなんとなく察することはできていたみたいだしな。
行き先に迷っているみたいだし、俺の領地で本格的に色々と教えてみるか。
もしかしたらラフタリア並みに伸びるかもしれない。
「シルディナ、気にしてないから顔を上げて。クテンロウはこれから大きく変わるんだ。もう君をつらい目にあわせる人はいないんだ。だから、自由に生きてほしいんだ」

子供はそう言って、俺を見て頭を下げた。
「お前を慕っている部下も多いみたいだしな。温情で罪の類たぐいはうやむやにするつもりだ。それこそ、好きに生きるがいいさ」
「私は……」
「とはいえ、致命的な方向音痴は治さないと色々と生きづらそうだけどな」
「あちゃー……」
僅わずかだけどシルディナの表情が明るくなった気がする。
「クテンロウだけを見ていたら小さく纏まってしまうかもしれないな。このガキと一緒にしばらく俺の村や国辺りで生活しろ。それからでも答えを出すのは遅くないだろう」
「わかった……なおふみちゃんは私と飲み比べやカードで遊んでくれる？」
「ああ、村には遊び好きな連中が多いからな。教えりゃいくらでも遊んでくれるだろう。もちろん、俺も暇があったら相手してやる」
「そっか……わかった」
と、頷くとシルディナは布団から出て立ち上がる。
もう大丈夫なのか？　サディナもそうだが、頑丈な奴だな。
「というわけでシルディナちゃんって呼べばいいかしら？　お姉さんと一緒に、面白くないことを仕出かしてるあの人達に罰を与えに行きましょうね」

「え!?」
戦せん慄りつした表情を浮かべながらシルディナはサディナに連れられていく。
「あちゃー……！」
「ま、バカ親とは絶縁してこい。国を挙げてお前等一族の方針を許す気はないからって」
「はーい。じゃあ行ってくるわよナオフミちゃん！　後でナオフミちゃんにはお姉さんとシルディナちゃんの生まれた村を見てもらうんだから」
「はいはい」
二人の悪魔に滅ぼされた故郷を見せられてもな……。
「あーん……なおふみちゃん……あちゃー！　放して！」
なんか困った様子で連れられているけど、仲が良さそうな姉妹だな。
ヒュンヒュンバチバチと二人の間に魔法が飛び交ってるみたいだけどさ。
「シルディナちゃん、後で飲み比べしましょうね。あ、ちょっと酔ってる方が調子出るのかしら？　じゃあお姉さんお勧めのお酒をあげるわ」
「あちゃー……んぐ――」
大分声が小さくなっているが、二人揃って獣化して楽しげに歩いていく光景が俺の印象に強く残った。
「そんじゃ、城に戻るか」

「はい。これからよろしくお願いします」

「ま、お前もそんなに緊張するな。俺の村には子供が多いからな。お前も同じ扱いをしてやる」

子供とセインを連れて俺達は城へと戻った。

こっちも、セインの持つぬいぐるみに興味を持った子供が、道中でぬいぐるみと会話している姿が印象的だったな。

調整も大分終わり、城の一番高いテラスで俺はラフタリアと旧都だった都を見下ろす。

セインや他の連中は城内で思い思いに休んでいる。

やっとラフタリアと二人で話すことができるな。

夕日が随分と綺き麗れいに思えるのは、空気が澄んでいるからだろうか？

都は戦勝ムードと、天命派討伐でお祭り騒ぎになっている。

どこまでもお祭り好きだな。

「ふう、やっと面倒な戦いが片付いたな」

「戦いは片付きましたけど、この後どうする気ですか？」

「ん？　ラルヴァ達、革命派の重鎮共に国を任せてサッサと帰るつもりだぞ。天命派の連中は大抵黙らせたし、概おおむね問題はない」

今でも時々騒動を起こしてはいるらしいが、もはや少数派だ。

龍刻の砂時計があるから有事の際にラフタリアが顔を出すだけで大抵はどうにかなるようになっている。

「はぁ……とんだ騒動でした」

「いやだったか？　親のルーツを知ることができたんだぞ。挙句女王様じゃないか」

もはやラフタリアの地位を脅かす者は存在しない。

シルトヴェルトですら占領するのに躊ちゅう躇ちょしたクテンロウの、代表にまで登り詰めたんだ。

よくよく考えてみれば凄いサクセスストーリーだぞ。

ただの村娘だと思っていたら一国の女王だ。

「確かにお父さんやお母さんのいた国を知りたい気持ちはあります。ですけど、私はクテンロウの天命ではなく、あの村の……みんながいる村の女の子で、ナオフミ様の剣として戦うラフタリアで……十分なんです」

「権力欲がないんだな」

「それはナオフミ様だってそうじゃないですか。シルトヴェルトの神様なんですよ？」

……これは一本取られたな。

俺も興味はない。

利用できるものを利用しただけで、シルトヴェルトの王様とかになる気は微塵じんもない。

ラフタリアは縁に腰掛けて夕日を見つめる。

「クテンロウに来て、いろんな技、力の使い方を学びました。もっと、より強くなっていかないとこれからの戦いを乗り越えられないと思います」

「……そうだな」

思えばラフタリアは今回の戦いを乗り越えて一皮剥むけたような気がする。

「後はサディナに言われた通り、これでやっと堂々とラフタリアに巫女服を着せることができるな」

胸を張る俺になぜかラフタリアが縁から落ちそうになる。

大丈夫か？　ここは高いから落ちたら大変だぞ？

「結局、そこに纏めるんですか⁉」

「重要なことだぞ？　ラフタリアに一番似合う装備なんだからな」

ラフタリアに巫女服を着せたことが事の始まりだけど、結果的に良いところに転がっていったと思っている。

苦しむラフタリアを見殺しにしようとした連中に報いを受けさせることはできたし、腐り切ったクテンロウを結果的に救うこともできた。

ラフタリアの親戚やシルディナも、一応良い方向に向かわせられると思う。

「じゃあ、そうだな……ククク、これでシルトヴェルトとクテンロウは俺の手に落ちた……」
「いえ、そういうことを言いたいわけじゃないです」
まあわかってはいた。
だが、どちらにしてもシルトヴェルトとクテンロウとのコネクションは作った。いざって時に協力を仰ぐことはできるだろう。
「まったく……ナオフミ様は本当に押しが強くて、ついていくのが大変です」
「それは褒め言葉だな」
「なんか指摘するのに疲れてきました。今はそれでいいですよ」
綺麗な夕焼けだな。
そう思いながら落ちていく夕日を見続ける。
「まあ、後でラフタリアの両親の所持品とか思い出の品とか調べてみるか。ラフタリアも気になるだろ？」
「ええ、サディナ姉さんや国の人達からも聞きましたが、お父さん達のことをもっと知りたくなりました」
「それじゃあ、少しくらい休んでもよさそうだな。大変だったんだ、この辺りで休暇くらいとってもいいだろ。この国には温泉もあるみたいだしな」
「ナオフミ様と休めるならいいですね」

ふんわりと、桜光樹の花びらが風に舞って部屋に入ってくる。
城にも桜光樹の材木が使われているらしく、ラフタリアに反応して淡く光ったように見えた気がした。
「ごしゅじんさまー！　フィーロに特別のご飯ー！」
騒がしい奴が帰ってきたなー。そういや約束していたもんな。
「ほら、ナオフミ様。フィーロが要求してますよ。今日は特製の食事を作ってください」
「わかったわかった。それじゃあラフタリアの正式巫女服記念に作ってやるよ」
「またその話題ですか！」
なんて感じに俺達は部屋を後にしたのだった。
部屋を出る際にチラッと見えたのは、きっと夕日がもたらした幻だろう。
ラフタリアの面影を宿す男性と、優しげな表情がラフタリアによく似た女性が、ラフタリアに優しく手を振っている姿が俺には見えたような……気がした。
こうして俺は、みんなの料理を作るために、城の厨ちゅう房ぼうへ向けてラフタリアと共に階段を下りていくのだった。

著者プロフィール

＊＊＊

アネコユサギ
Aneko Yusagi

＊＊＊

神奈川県出身。ゲームと読書好きが高じて、小説を書き始める。
『盾の勇者の成り上がり』を執筆し、ネット上に作品を公開。

作品発表後、連日欠かすことなく更新することで病み付きとなる読者が続出し話題となる。２０１３年８月ＭＦブックスから商業デビュー。

「書籍化によって頂いている期待に応えられるよう頑張ります！」と語る。

企画／株式会社フロンティアワークス

担当編集／今井遼介、大原康平（株式会社フロンティアワークス）

ブックデザイン／ragtime

イラスト／弥南せいら

本書は小説投稿サイト「小説家になろう」（http://syosetu.com/）初出の作品を加筆の上書籍化したものです。

盾の勇者の成り上がり　14

アネコユサギ

平成28年２月25日　発行



本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

ＭＦブックス『盾の勇者の成り上がり　14』

平成28年２月29日初版第一刷発行

発行者　三坂泰二

発　行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
0570-002-001（カスタマーサポートセンター）
年末年始を除く平日10：00～18：00まで
http://www.kadokawa.co.jp/